

松山市文化局調査報告書14

東山鷲が森古墳群調査報告書

1991

松山市教育委員会

東山鶯が森古墳群調査報告書

1981

松山市教育委員会



2号填石室全景

——序——

美しい風土と環境に恵まれた松山市は、古くから文化が開かれた土地として夙に著名であります。

これまで道後平野では、石器時代から繩文、弥生、古墳、奈良、平安……と各期にわたる各種の遺構、遺物が発見されております。

これらの埋蔵文化財は、我々の遠い祖先が残してくれた貴重な文化遺産であり、先人達が培ってきた知恵、努力、英知の結晶であり、これを土台として現在の文化の隆盛があるといって決して過言ではありません。

この埋蔵文化財は、地中に眠っている限りにおいては、破壊もされず保存されていることになり理想とされるのであります。人類の発展のためににはこの狭い国土を有効に利用するための開発が必要となり、遺跡全部を土中に留めるということは不可能といってよい状態になってきております。

最近におきましては、宅地造成をきっかけとして事前発掘調査が行われ、その結果、白鳳時代の法隆寺式伽藍配置をもった古代寺院址「来住庵寺跡」が発見され、国の史跡として、永久保存されることとなつた事例もあります。

今回のこの調査におきましても、宅地造成をきっかけで、色々と論議もありましたが、関係各位の御理解をいただき調査を実施いたしました結果、詳細は本文で報告のとおり、性格としては古墳時代終末期を中心としたものであり、古代松山平野の歴史解明の大きな手がかりが得られたものと確信いたしております。また、出土物につきましては、復原可能なものは忠実に復原を行うこととし、併せて科学的処理などを行い、保存、活用をはかっております。

このように記録保存を行うことによって、皆様方に当市の埋蔵文化財に対する御認識と理解を深めていただき、今後の調査、研究の一助に御利用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、このような貴重な成果が得られましたのも、鶴居産業株式会社の埋蔵文化財に対する深い御理解と御協力、また、調査について直接御指導賜った京都市埋蔵文化財研究所、田辺昭三調査部長、それに直接、間接的に御協力いただいた関係各位に対しまして、ここに厚く御礼申しあげる次第でございます。

昭和56年4月30日

松山市教育委員会

教育長 西原多喜男

例　　言

1. 本書は、松山市教育委員会が1978年から1979年にかけて実施した東山廬が森古墳群の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は、鶴居産業株式会社より松山市教育委員会が委託されて実施した。

3. 調査費用は、原因者である鶴居産業株式会社が負担した。

4. 調査年月日 昭和53年9月18日～同12月19日（第一次）

昭和54年7月23日～同8月30日（第二次）

発掘調査地 松山市東石井町乙70番地（東経132°46'58"、北緯33°48'48"）

5. 調査組織

松山市教育委員会

教育長 西原多喜男　　調査指導 田辺 昭三（京都市埋文研究所調査部長）

" 関谷 勝良（前任）　調査担当 西尾 幸則（文化第二係主任）

教育次長 森田富士弥　　調査員 池田 学（文化第二係指導員）

" 小林 義春 " 松村 淳（"）

" 玉井 進（前任） " 栗田 茂敏（文化第二係調査員）

文化教育課長 藤原 渉 " 滝本 正志（国立奈良大学）

文化教育補佐 坪内 晃幸 " 越智 武志（子規記念博物館学芸員）

" 岸 郁男（前任） 田所 真（国学院大生）

文化第二係長 大西 輝昭

西 伸二（前任）

6. 本書の作成にあたっての業務

遺物整理、実測、製図 西尾幸則、池田学、松村淳、栗田茂敏、森敦子

編集、レイアウト、写真 田辺昭三、西尾幸則、池田学

執筆 田辺昭三、西尾幸則、池田学、松村淳

7. 調査関係協力機関

徳島大学医学部 山田正典（教授） 藤盛 健（助教授） 宮井正明

" " 松原 博 山下伸典

愛媛大学医学部 四宮孝昭（教授）

愛媛大学放射線部 川上寿昭（技師長） 技師会会長 橋口忠志

愛媛県立中央病院放射線部 渡部 昇 味口博志 戸梶医院 戸梶幸雄

松山市文化財専門委員会

8. 発掘調査にあたって、石室移築他終始協力いただいた鶴居産業株式会社大野陽一氏及び調査物品調達等現場保全を務めていただいた渡部穎藏氏に感謝いたします。

9. 調査の協力、助言に感謝します。

長井数秋、森 光晴、大山正風、草地牲白

10. その他、本遺跡についての見学会3回、文化講座2回（300名）を実施した。

目 次

I	はじめに	1
	調査の経緯.....	1
II	遺跡の環境.....	2
	遺跡の位置と歴史的環境.....	2
III	発掘調査の経過	5
1	調査経過.....	5
2	調査日誌.....	6
IV	遺構	13
一.	1号墳A石室.....	13
二.	1号墳B石室.....	14
三.	2号墳.....	14
四.	3号墳.....	22
五.	4号墳 (A・B石室)	24
六.	6号墳.....	30
七.	8号墳 (A・B・C石室)	34
八.	5・7号墳.....	41

九. その他の遺構.....	41
a. SK01.....	41
b. SK02.....	41
c. SK03.....	43
d. SK04・SK05.....	44
e. SK06.....	44
 V 遺 物.....	45
1. 各古墳出土の遺物概説.....	45
a. 2号墳出土須恵器.....	45
b. 4号墳出土須恵器.....	45
c. 6号墳出土須恵器.....	46
d. 8号墳出土須恵器.....	47
e. 1号墳出土須恵器.....	48
f. 5号墳出土須恵器.....	48
2. 出土遺物観察表.....	49
a. 須恵器・弥生土器（1表～13表）.....	49
b. 装身具類他（14表～24表）.....	62
 VI 総 括	
1. まとめと若干の考察.....	73
2. 東山鶴が森古墳群発掘調査の成果.....	77
3. 人骨について.....	80

図版目次

- 図版 1 東山丘陵遠景
東山周辺（空中写真）
- 図版 2 調査前（西から）
調査地全景（西から）
- 図版 3 2号墳石室状況(1)～(4)
- 図版 4 2号墳石室内状況
- 図版 5 2号墳遺物状況（奥半部）
2号墳閉塞面、同墳奥壁面
- 図版 6 2号墳石室解体（西から）
2号墳側壁、床面施設
- 図版 7 4号墳調査前
4号墳全景
- 図版 8 4号墳A・B石室（北から）
4号墳A石室・B石室
- 図版 9 4号墳遺物出土状況(1)～(3)
- 図版 10 6号墳全景（北から）
6号墳（南から）
- 図版 11 6号墳石室全景（北から）
- 図版 12 6号墳床面(1)～(3)
- 図版 13 6号墳遺物出土状況(1)～(3)
- 図版 14 8号墳全景
8号墳A石室、同B石室
- 図版 15 8号墳C石室
8号墳遺物出土状況(1)～(2)
- 図版 16 1号墳全景
1号墳A石室
- 図版 17 1号墳B石室
SK03（木棺葬）
- 図版 18 SK01とSK02全景
SK02（漆棺葬）
- 図版 19 3号墳全景・遺物出土状況

床面施設

- 図版 20 6号墳周溝内遺物出土状況
5・7号墳全景
- 図版 21 2号墳出土須恵器
- 図版 22 2号墳出土須恵器と土師器
- 図版 23 4号墳出土須恵器
- 図版 24 4号墳出土須恵器
- 図版 25 4号墳出土須恵器
- 図版 26 6号墳出土須恵器
- 図版 27 6号墳出土須恵器
- 図版 28 6号墳周溝出土須恵器
- 図版 29 6号墳周溝出土須恵器
- 図版 30 6号墳周溝出土須恵器
- 図版 31 6号墳周溝出土須恵器
- 図版 32 8号墳A・B石室出土須恵器
- 図版 33 1号墳と8号墳出土須恵器
- 図版 34 4号墳出土須恵器
- 図版 35 弥生土器
- 図版 36 弥生土器
- 図版 37 2号墳出土玉類
各石室出土耳環類
- 図版 38 各石室出土装身具類
- 図版 39 2号墳出土鉄器類
- 図版 40 2号墳出土鉄鎌類
- 図版 41 4号墳出土（鉄鎌・鉄斧・馬具外）
- 図版 42 4号墳出土（鉄鎌・鉈・直刀）
- 図版 43 8号墳出土（鉈・鉄鎌・刀子・鉄斧・直刀・鎌）
- 図版 44 各石室出土（鉄鎌・鋤先外）
- 図版 45 須恵器実測図
- 図版 46 須恵器実測図
- 図版 47 須恵器実測図
- 図版 48 須恵器実測図
- 図版 49 須恵器実測図
- 図版 50 須恵器実測図

- 図版 51 須恵器実測図
 図版 52 須恵器実測図
 図版 53 須恵器実測図
 図版 54 須恵器実測図
 図版 55 弥生土器実測図
 図版 56 装身具・銅・鉄製品類
 図版 57 馬具(辻金具・轡)
 図版 58 鉄鎌類
 図版 59 装身具・鉄器類
 図版 60 鉄鎌類他
 図版 61 馬具・鉄器類
 図版 62 装身具・鉄鎌・刀子
 図版 63 鏡・装身具・鉄器類
 図版 64 装身具・鉄器類
 図版 65 鉄器類
 図版 66 装身具・鉄器・石器類

挿図目次

第1図 遺跡の分布図.....	2
第2図 東山連山(東丘陵部を望む)	3
第3図 天山1号墳.....	3
第4図 国指定史跡来住庵寺跡.....	4
第5図 神事.....	6
第6図 測量(トランバースポイントの設定)	6
第7図 調査状況.....	7
第8図 2号墳円筒埴輪片出土.....	7
第9図 2号石室の検出.....	8
第10図 2号石室の検出.....	8
第11図 調査状況.....	9
第12図 調査状況.....	9
第13図 6号墳床面施設.....	10
第14図 石室の測量.....	10

第15図－1	一般見学会	11
第15図－2	中高校生文化講座	11
第16図	調査地周辺地形図	12
第17図	1号墳A石室	13
第18図	1号墳各遺構図	15
第19図	1号墳B石室	16
第20図	2号墳遺物配置図	17
第21図	玉類出土状況	17
第22図	2号墳石室平面図(1)	18
第23図	2号墳石室平面図(2)	19
第24図	2号墳石室断面・床面施設	20
第25図	2号墳石室展開図	21
第26図	3号墳遺物実測図(1)	22
第27図	3号墳遺物実測図(2)	23
第28図	3号墳石室平面図	23
第29図	3号墳床面施設	23
第30図	4号墳A石室検出状況	24
第31図	4号墳平面図	25
第32図	4号墳石室平断面図	26
第33図	4号墳石室展開図	27
第34図	4号墳遺物出土状況	27
第35図	4号墳B石室平面図	28
第36図	4号墳B石室展開図	29
第37図	6号墳周溝遺物出土状況	30
第38図	6号墳石室平面図	31
第39図	6号墳石室床面施設	32
第40図	6号墳石室展開図	33
第41図	8号墳石室平面図	35
第42図	8号墳A石室遺物配置図	36
第43図	8号墳A石室床面施設(1)	37
第44図	8号墳A石室床面施設(2)	38
第45図	8号墳A石室展開図	39
第46図	8号墳B石室展開図	40
第47図	8号墳B石室遺物配置図	40

第48図	8号墳C石室平面図	40
第49図	5・7号墳造構図	42
第50図	S K01・SK02実測図	43
第51図	S K03実測図	43
第52図	S K04・05実測図	44
第53図	S K06実測図	44
第54図	X線による成果	48
第55図	4号墳A石室羨道部	74
第56図	6号墳床面施設	75
第57図	6号墳羨道部	75
第58図	8号墳検出状況	76
第59図	8号墳A石室奥壁部	76
第60図	天山古墳群	78
第61図	東山2号墳人骨A体	80
第62図	どんだ原出土人骨	81
第63図	どんだ原出土人骨	82

I はじめに

1. 調査の経緯

東山は天山・土巣山・星岡とともに、松山平野のはば中央部に所在する分離独立丘陵である。これら及びその周辺には後述する様に、貴重な遺跡が多く分布している。しかし40万都市としての近年における開発は著しく、道路建設や市街地に伴う住宅建設等により、旧状が大きく変貌している地域である。これらの要因によるやむなきの発掘調査が多く実施されており、本調査もその一例と言える。

昭和48年7月2日、鶴居産業株式会社より松山市東石井町乙70番地（総面積5,400m²）の開発行為許可申請が市に提出された。このことにより市教委としても同地が、本市作成の文化財地図No.118（東山遺跡）として登録されていることなど府内合議書による意見を出し、関係部課や県関係部課においてもそれぞれ審議されることとなった。一方、自然と文化を守る会等による東山地区の文化財及び自然環境保護等の保存運動が行われ、要望書や請願書が提出されるに及び、市議会においても再三に亘る継続審議が実施された。これらの結果申請地を除く丘陵（東山東丘陵部）は、現形保存とする市の計画公園地として、それらの保全地区になっている。また昭和50年12月10日に同申請地の開発が、県より許可された他文化庁からも発掘通知が出された。しかしながら市議会等による再度の継続審議もなされたが、最終的に県議会と同方針とされた。ここに一応のこの問題に対する5年余りの論議に終止符が打たれたことになり、市教委は、記録保存による調査を検討したうえで確認調査を実施し、造構規模やその範囲の把握を図ることとなった。この結果、古墳3基や土壙墓等が確認された。これらに基づき市教委は、鶴居産業株式会社と再三の調査関係の交渉を行い、同社との覚書を交換し、原因者負担による本格調査を実施することになった。

調査は、昭和53年9月18日より同年12月19日までを第一次調査とし、翌年7月23日より同年8月30日までを第二次調査として全体で、5,400m²のうち約3,500m²の全面調査を行ったものである。

調査当初においては、なおも保存運動が続いたが、発掘工程や期間への影響を考えられ調査員全員は、保存と開発の板ばさみの中で調査を進めた。しかし調査進行の段階においては、同教委と同社との話し合いがもたれ、6号石室の移築協力が得られたり、調査地における数回の一般公開説明などにより、保存関係者及び多くの方々の理解を得ることができた。また将来を担う中高生の文化講座として活用できたことや、市立南中学校（草地教諭引率）の数百人による見学会も最も意義があったものと解される。

II 遺跡の環境

遺跡の位置と歴史的環境

東山は松山平野のほぼ中央部に所在し、その北方には伊予風土記逸文にも見られる天山が所在する。また東方に星が岡丘陵と、それぞれに洪積台地上に分離独立丘陵が点在しているものである。当調査地は、その中の東山丘陵の西端部に位置し、古くから東山薦が森として呼称されていた所で、海拔43m～38m上に立地している。

また三山の麓周辺部においては、早くより開けたものであり、弥生期から古墳期にかけての生活母体をなす遺構が検出されている。

これら周辺部の集落の一部は、松山市教委により発掘調査がなされ、多種の遺構遺物の検出を見た。北方に所在している天山古墳群である天山北神社古墳の調査では、全壇寸前であったが、奇跡的に鉄劍の外、半円方形帶神獸鏡の出土が見られ、同天山天王が森古墳では円筒埴輪をもつ円墳の外、弥生中期の住居址、後期の壺棺等が検出されている。東山より東北800mに位置する竹ノ下遺跡からは、板歌、鋤、木槌、獸形の柄頭、他多くの5世紀代の農工具や須恵器等が検出された。これに続く11号バイパスの福音寺町筋遺跡から北久米町乃



第1図 遺跡の分布図

万の裏地区の間、古墳期における数十基の竪穴住居址、掘立柱建物址や中世に至る種々の遺構が検出された。またさらに同バイパスを東に潤ると来住町に位置し、7世紀後半期に造営された法隆寺式伽藍を有した来住廃寺跡の調査がなされ、素弁10弁蓮華文、複弁8弁蓮華文軒丸瓦や東山とはほぞ

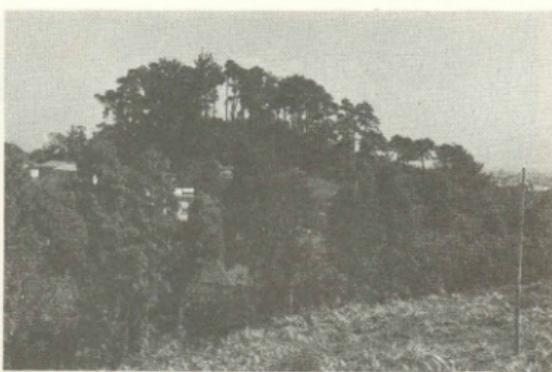
同型式の須恵器類等も検出された。また同地域およびその近くで弥生期の竪穴住居址等も検出された外、木簡・人形・墨書き土器等も検出されている。

東山丘陵の南麓に位置する石井東小遺跡では、弥生前期に類する壺棺、貝殻およびヘラによる木葉文を施す土器の出土が見られた。

また星が岡は、北条時直（北朝方）と土居・得能（南朝方）が戦った所であり、中世の古戦場跡として市民に親しく知られている。また古墳群としても保存度が比較的良好とされている所である。過去において正式な調査記録は残っていない。しかし実証性に欠けているが、故柳原多美雄氏は、当地方唯一の鳥類を描いた壁画古墳があったと言い残している。

またその他、名田愛三氏所蔵の環頭（三累環）も伝えられている。

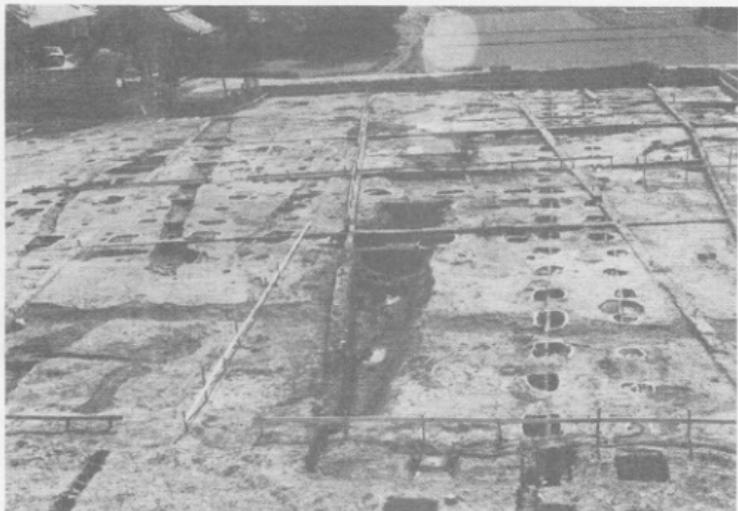
前述のように、三山の周辺一帯には貴重な遺跡の発見に至っている。またこれらは平野部の中央に位置することを始め、弥生期から古墳期の聖域として最も適地とした所であった。



第2図 東山連山（東丘陵部を望む）



第3図 天山1号古墳



第4図 国指定史跡来住庵寺跡

この東山は、現在東南面を中心とする丘陵部を残す状況であり、この地より縄文晩期の遺物や弥生期の遺物が採集されている他、古墳10数基を数えることができる。しかしその大半のものが半壊もしくはそれ以上の状態であり、それらの記録は皆無である。また同丘陵は、東北面にも百数十m延びていたもので、ここにも10数基の古墳が存在したが、調査もなく宅地化してしまったものであり、かつては本調査地を含めると全体で30基前後の古墳群が存在したものと考えられる。

(西尾)

III 発掘調査の経過

1. 調査経過

調査は、事前確認調査の資料を踏まえ、昭和53年9月18日から全面的に実施することとなった。まず下刈後に、地形測量及び墳丘測量（トラバース等による基準点の設定他）を実施し、各墳丘ごとに中軸線（磁北による南北と東西）による区画を設定、排土の土盛地との関係により調査地の北端部に位置する墳丘を、一号墳とし着手することとした。

一号墳の墳丘は削平され、石室は根石を数個残し床面も玉石を一部残す状況であった。二号墳においては、前述の要因により、特に10cmのコンタ撮りに注意を払い、東西トレンチにより主体部の発見に至り、本調査地区中唯一の処女墳として特に注目された。また同石室の保存度は最良であり、追葬された六体分の歯牙の他、鉄劍、鉄鎌、勾玉、丸玉、提瓶、短頸壺等の多種の副葬品が見られた。つぎに三号墳は、一号墳と同じく根石数個しか残ってなく、わずかに竪穴式の様相が示されるものであり、遺物は人骨（男性）と土師皿、鉄鎌等が出土し、須恵器は伴わなかった。

つぎに四・六号墳の主体部検出も微コンタのデーターを基とし、南北トレンチにより主体部の中軸及び範囲、版築等の確認を実施し、発掘区画設定により遺構検出を行った。四号墳・六号墳ともに石室石積が2段～3段目（半地下式における地山面の地下部分）を残す状態であり、主体部の遺構検出を難行させた。四号墳においては直徑14m巾1m～1.4mの周溝をもち、中央部に横穴式石室（巾2.5m×長さ7.3m）を築造し、その西側面に小規模の主体部を同時に築造するものであり、後述する遺物が発見された。六号墳にも直徑13m巾0.7m～2mの周溝が見られ、その中央部に四号墳とほぼ同平面プランを成し、同規模の横穴式石室が検出された。また六号墳は、前室が設けられていた他に、石室外埋葬がされ、同周溝に副葬品が埋められていたことが注目された。つぎに五・七号墳は、地山面切り込みによる周溝のみ検出し、石室は見られなかった。

第二次調査は、昭和54年7月23日より実施した。同社が宅造目的で、第一次調査地の南隣地をさらに200m²拡張し、宅地化するに伴い行ったものである。

この地においてもテストボーリング等の資料を基とした結果、八号墳の検出が見られた。それは4号墳と同じく一墳丘に大小の二主体を同時に築造するもので、4・6号墳に先行の時期の遺物や追葬がされていたものであった。なお第一・二次調査地からは、この他に弥生期の壺棺墓等の種々の遺構遺物が検出された。

以下、日を追って調査経過を略記する。

(西尾)

2. 調査日誌

第一次調査 (1978年9月18日～12月19日)

9月18日晴 発掘区域の地形測量のための杭打ち作業。

9月19日晴 昨日に続く作業及びBM (37, 90m) を中央埴丘部に取る。

9月20日曇後雨 地形測量を始める。PM 2時より雨となり作業中止。

9月21日晴 地形測量の実施。

9月22日晴 地形測量の実施。

9月23日晴 地形測量の実施。

9月25日晴 地形測量を終了。

9月26日晴 各埴丘部の平板測量の実施。グリッド設定。発掘諸材料搬入を行い、南地区から重機の搬入路をつくる。

9月27日晴 9時より鎮魂式を挙行。南部地区 (S11～W4・5 及び S12～W4・5) より第二層の耕作土まで削除を始める。S11～W5 に台付長頸壺・环身・环蓋等出土。これらはごく最近まで紀られていた状態である。S12～W5 で須恵器片・紡錘車出土、周溝と思われる部分を検出。

9月28日曇 昨日に続く作業。S9～W4・5, S10～W4・5 の第二層耕作土削除 (周溝検出作業)。

9月29日曇 S9・10・11～W6 第二層耕作土掲り下げ。裾部に保全土留め柵を設ける。

9月30日晴 S7・8～W4・5 第二層まで削除。

10月1日晴 S12～W5 で周溝を検出、4号墳として掲り下げを行う。2号墳の割りつけ。S4・5～W3・2 第一層削除。3号墳の割りつけ。

10月2日晴 1号墳掲りつけ。2号埴丘部第一



第5図 神事

層削除、主体部検出作業及び、南東部斜面第一層削除、埴輪片出土。4号埴丘部削除。発掘区の南西最深部に、3m巾の試掘溝を入れる。

10月3日 2号埴丘部二層剥離作業。4号墳断面計測。

10月4日 2号埴丘西側部第一層削除、昨日に続く作業。S7・8～W4, S8～W5 断面実測。



第6図 測量 (トラバースポイントの設定)

10月5日雨 作業休み。

10月6日晴 2号墳北部 S4～W3 掘り下げ、埴輪片多数出土。S3～W3・4・5 掘り下げ。

10月9日曇後晴 2号墳 S2～W4・5 掘り下げ、W4 に埴輪片、土師皿等出土。

10月11日晴 2号墳南西部 S4・5・6～W6・7 掘り下げ。S6～W3 平面測量実施。2号墳 S5・6～W4・5 遺物測量。4号墳周溝検出作業。

10月12日晴 2号墳 S2・3～W3・4・5 遺物測量 (須恵器・埴輪等)。S1～W

4・5及びS 2-W 6・7削除。4号墳昨日に統く作業。

10月13日晴 1号墳第一層耕作土削除。4号墳周溝掘り下げ。S 4・5・6-W 2・3、S 11・12-W 6の遺物測量(弥生土器・須恵高杯等)。S 9-W 4・5平面測量。

10月14日晴 1号墳丘部削除。S 5・6・7-W 6・7の遺物測量(高環・环蓋・土師壺・須恵器片等)。

10月16日曇 1号墳に玉石面検出、金環出土。S 4・5・6-W 4・5・6コンタ図作成。

10月17日晴 1号墳昨日に統く作業。2号墳丘測量。5号墳北部削除。S 4・5・6-W 6・7・8コンタ図作成。S 1-E 4に須恵高杯及び貝片出土。

10月18日晴 2号墳丘コンタ測量(S 2・3-W 6・7)、埴輪片多数出土。5号墳丘部削除(S 2・3-E 3・4)。S 2・3-E 1・2削除。6号墳表土削除(S 4・5-E 1・2)。S 2-W 3・4及びS 2-W 3・4の表土削除。

10月19日曇 2号墳丘部をE-W方向にトレンチを入れる。3号墳丘表土削除。5号墳東南榔部検出作業。6号墳東部と南部の榔部検出作業(S 6-E 1に配石を検出)。S 2-W 6・7コン



第7図 調査状況

タ図作成及び平面測量。

10月20日晴 2号墳丘部W方向にトレンチ掘り下げ遺構検出作業。3号及び7号墳丘部削除。

10月21日晴 2号W方向トレンチ(S 3-W 5地点)に石室と思われる石積みを検出、輪郭追求を急ぐ。3号墳周溝(S 7-E 1)検出、多量の須恵器・高環・壺・短頭壺等の遺物出土。S 7-W 1区に延長する周溝を確認、掘り下げ、須恵器長頸壺・壺等の遺物出土。

10月23日晴 2号主体部検出作業及び断面計測。3号墳昨日に統く遺物検出作業。6号主体部検出作業。

10月24日曇 2号墳周辺部の堆土を移動する。3号墳周溝内出土遺物実測。6号墳昨日に統く作業及びS Nトレンチ設定、南榔部で冠出土。

10月25日雨後曇 2号墳昨日に統く作業。S 5-W 1・4・5及びS 6-W 2・5掘り下げ。S 5-W 4・5埴輪片集中出土。3号主体部検出作業、人齒検出。出土遺物埴輪群実測。6号墳S Nトレンチ掘り下げ、深さ1.5m地点に石室の一部検出、主体部の輪郭を追求する。

10月26日曇 2号墳石室検出作業及び墳丘断面実測し全面掘り下げ。3号墳主体部



第8図 2号墳円筒埴輪片出土



第9図 2号石室の検出

掘り下げ、石組みは皆無に近い。墳丘部のEW方向断面検出。5号墳丘部掘り込み及び造構面検出作業。6号主体部検出作業（主体部内は二室であることを確認する）。

- 10月27日曇後雨 1号主体部掘り下げ。2号墳丘部掘り下げ及び主体部検出作業。5号墳S-Nトレンチ作業。6号墳石室内掘り下げ。降雨のため作業中止。
- 10月28日曇後雨 2号・5号・6号墳昨日に続く作業。6号主体部実測開始。
- 10月30日晴 2号墳丘北部掘り下げ（S 5-W 2・3）、埴輪片多数出土。5号墳丘北部掘り下げ。6号墳石室内掘り下げ及び周溝検出作業と平面実測。

- 10月31日晴 1号主体部検出作業。2号墳丘部周辺（S 2-W 3・4・5・6、S 3-W 6）掘り下げ。S 3・4-W 5・6断面実測後セクション撤去。S 1-W 4の堆土を移動する。3号墳S 7-W 1の畦撤去及び周溝部の遺物検出作業。6号漢道部掘り下げ及び周溝検出作業。7号墳丘部土壤状造構検出し掘り下げ。

- 11月1日晴 1号主体部壁面検出作業。2号墳（S 5・6-W 4・5・6）掘り下げ、埴輪片出土、埴輪片群実測。3号墳周溝出土遺物（台付長頸壺・环・短頸壺・土師高環等）とりあげる。

4号墳丘部E・W方向にトレンチ。

主体部を確認、周溝部掘り下げ。6号墳玄室内・漢道部・側壁部掘り下げ。

11月2日晴 2号墳丘部S 2-W 3・4の埴輪群実測。3号墳丘断面実測。4号墳丘部N・Sにトレンチ。6号墳昨日に続く作業、西部壁で銅鏡片1点出土。

11月4日晴 2号墳断面実測及び埴輪実測。4号主体部平面実測。

11月6日晴 1号玄床面検出。2号石室平面実測、地山掘り込み部を検出。3号床面検出。4号墳昨日に続く作業。6号玄室内掘り下げ。

11月7日晴 2号天井石断面実測、清掃後写真撮影、天井石を徐々に取り除く。人骨・横瓶・広口壺・提瓶・环・短頸壺・土師壺・直刀等の副葬品を確認。3号玄室内掘り下げ、鐵鏡片・鋤先片等出土。6号漢道部検出、土師壺等出土。7号墳丘の土壤状造構を掘り下げたが遺物検出できず。S 6-W 5（2号墳）の畦取り除く。

11月8日晴 2号天井石撤去作業及び石室掘り込み検出作業、玄室内写真撮影。3号床面検出作業。6号床面検出作業。S 3-W 7・8の堆土を移動。7号墳昨日に続く作業。



第10図 2号石室の検出

11月9日曇 1号平面実測。2号玄室内遺物撤去、清掃後写真撮影。頭髪・勾玉・管玉類を確認。3号墳昨日に続く作業、人骨検出。6号墳昨日に続く作業。7号墳丘の土壌状掘り下げ。S3・6～W1の断面実測及び平面測量。S4～W3及びS5～W2に三基の土壌検出。

11月10日晴後曇 1号平面実測。2号実測のための割りつけ。3号床面検出作業、人骨片出土。4号玄室内掘り下げ、落ち込み石実測撤去、須恵器片出土。S5～W2及びS5～W3土壌完掘、出土遺物無し。6号玄室内掘り下げ。

11月11日曇後雨 1号墳北面トレンチ。2号出土遺物実測。3号地山掘り込み部検出。4号玄室内掘り下げ。6号墳昨日に続く作業。

11月12日雨 日曜一部は図面整理、他は作業休み。



第12図 調査状況

11月13日陰後雨 1号墳東西面にトレンチ。4号墳昨日に続く作業。6号床面検出作業。午後より雨、室内作業に切り替える。

11月14日晴 1号根石部及び掘り込み部検出作業と玄室部断面実測。2号出土遺物実測。4号玄室内実測、地山掘り込み部の検出作業。6号床面検出作業、金環検出。



第11図 調査状況

11月15日晴 1号墳にてガラス玉出土。2号出土遺物実測及び写真撮影。4号玄室内掘り下げ、出土遺物実測。6号床面検出及び平面測量。

11月16日晴 1号墳丘検出作業。2号出土遺物実測後遺物を取り上げる。3号実測のための割りつけをし実測。4号玄室内掘り下げ、内部実測。6号床面検出作業、内部実測。

11月17日雨後曇 降雨のため待機し、11時より作業を始める。2号出土遺物直刀・鉄鎌類を取り上げる。3号出土遺物実測。4号内部実測、落ち込み石排除。6号床面検出作業、落ち込み石排除。

11月18日晴 1号墳丘検出作業。2号墳昨日に続く作業、刀子・鍬・馬具・玉類取り上げ。4号内部掘り下げ、床面玉石を検出。5号墳丘部掘り下げ。6号床面検出作業、漢道部で鉄器検出。

11月20日曇 4号墳平面測量。

11月21日晴 1号墳丘断面実測、墳丘部西斜面に玉石の残存する造構検出。2号床面玉石部の精査及び展開図作成。4号内部掘り下げ、出土遺物須恵器・壺実測。5号造構再確認のためトレンチを更に深める。6号床面検出作業、石室内に玄室を検出、前室部で金環・鉄片、玄門部で有蓋子持器台出土。発掘区の部分状況等の写真撮



第13図 6号墳床面施設影。

11月22日晴 1号造構部の平面測量、第二主体部の床面検出作業。2号玉石の実測。4号内部掘り下げ、出土遺物須恵器高环・白瓶・台付長頸壺・土師椀等を実測及び写真撮影。5号墳昨日に続く作業。6号前室部及び玄室部の床面検出作業、出土遺物須恵器高环・高环・台付長頸壺・壺蓋等。

11月23日晴 1号第二主体部の床石実測。2号床石実測。4号内部掘り下げ及び出土遺物実測。6号展開図作成及び前室部検出作業、無蓋高杯出土。

11月24日晴 1号墳昨日に続く作業及び墳丘北面の掘り下げ。2号床面実測。3号出土遺物土師椀・鉄鏃・刀子等実測、取り上げる。4号出土遺物金環・环身・壺蓋・椀等実測及び床面検出作業。6号墳昨日に続く作業。

11月25日晴 1号第二主体部の玉石部実測、新たに南肩部に切り合ひの弥生土壙を検出、掘り下げ壺棺検出。2号墳昨日に続く作業、掘り下げ、刀子の出土を見る。3号人骨（大腿骨・頭骨）一部検出。4号床石（玉石）検出作業、金環出土。6号墳展開図作成。

11月27日晴 1号墳丘部精査中西斜面に土壙遺構検出。1号と第二主体部の断面実測及び壺棺の実測。2号墳ガラス

小玉數十個出土、床面玉石排除。4号内部掘り下げ、金環・环身出土。

6号前室・玄室の玉石部実測、排除。11月28日曇時々あられ 2号墳展開図作成。3

号墳丘部断ちわり。4号玉石実測、墳丘断ちわり西側溝に石列検出、輪郭追求。6号墳昨日に続く作業及び墳丘部を断ちわる。発掘区の東側斜面扯張、表土剥ぎをする。

第二次調査（1979年7月23日～8月30日）

7月23日晴 本日より第二次調査を開始。器材搬入し柑橘類伐採と下刈りをする。

7月24日晴 下刈後地形測量とグリッド設定。発掘区を二分（E・W区）し、E区を更にA・B・C・Dの4区に細分割。

7月25日晴 E区耕作土排除。

7月26日晴 E区耕作土削除。W区にA・B・Cの試掘トレチ。

7月27日晴 E区に石室に用いられたと思われる石が現われる。W区トレチBに土壤状検出。トレチA・B断面実測。E区出土遺物須恵器片、土師器片等。

7月28日晴 E区畦断面実測と平面実測。W区トレチB・Cの断面実測。

7月30日晴 E区に石室確認8号とし、実測のための割りつけ。石室内部掘り下げ、落ち込み石等実測。W区土壤輪郭追求し掘り下げ、古銭・ガラス玉・人



第14図 石室の測量

骨出土。

7月31日晴 E区は昨日に統く作業。W区更に二基の土壤検出。

8月1日晴 昨日に同じ。

8月2日晴 E区8号に対して土字形に、上部は破壊された石室検出、8号Bとする(併有遺構)。埴丘部断ち割り。

8月3日晴 E区8号落ち込み石撤去及び断面実測。

8月4日晴 E区に下部を僅かに残す石積の一部検出、8号Cとする。W区遺構(土壤)測量と出土遺物実測。

8月6日暴後雨 E区8号玄室部狭道部掘り下げ。8号B平面実測。8号C玉石部実測、出土遺物金環。午後雨となり作業中止。

8月7日晴 8号及び周辺の排水後、8号遺物実測。8号Cは昨日に統く作業。

8月8日晴 8号の地山掘り込み面検出作業。8号C掘り下げ。ビーズ玉検出。

8月9日晴 昨日に同じ。



第15図-1 一般見学会

8月10日晴 8号内部掘り下げ。8号B平面測量及び内部掘り下げ。8号C埴丘部検出作業。

8月11日晴 8号平面実測。8号B内部掘り下げ、落ち込み石撤去、出土遺物銅環・ガラス玉類。8号C遺物検出、実測後床石検出、出土遺物須恵器短頸壺・細頸壺等。



第15-2図 中高生文化講座

8月13日晴 8号C壁面(根石部)実測。

8月14日晴 8号C内部及び掘り込み断面実測。

8月15日晴 8号A・B石室実測。

8月16日晴 ノ

8月17日晴 ノ

8月18日晴 ノ

8月20日晴 8号B玉石部検出し実測、断面及び壁面展開図作成。8号C展開図作成。

8月21日薄曇り 各遺構部分及び発掘区全景写真撮影の準備、撮影。

8月22日晴後雨 8号B展開図作成。夕方前より雨となり作業中止。

8月23日晴 8号B床面精査、写真撮影し終る。

8月24日晴 8号B埴丘断面実測。

8月25日晴 8号床面精査(既存の西側壁根石より更に内側に先の構築根石痕を検出)及び8号東側埴丘掘り込み部断面実測。現地一般見学会の準備を行なう。

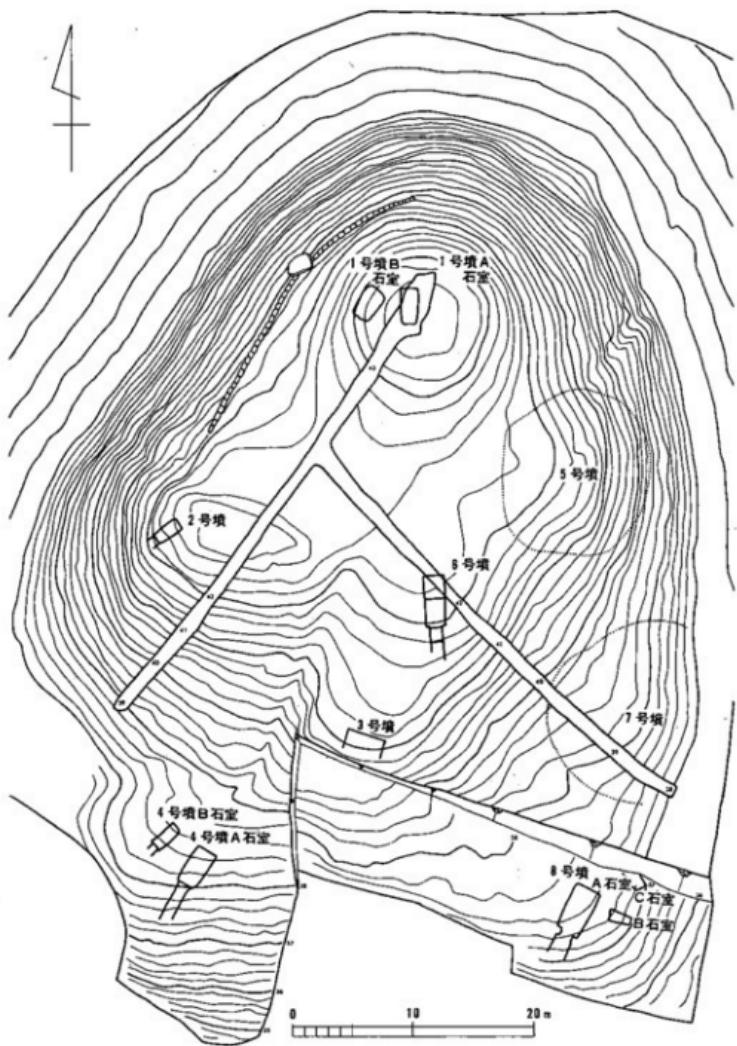
8月27日雨 室内作業(遺物整理)。

8月28日晴 各墳排水及び清掃。8号展開図作成。

8月29日晴 8号墳昨日に統く作業。発掘区の平板測量。

8月30日晴 8号展開図作成終了。総ての遺構断面実測終了。全城精査し写真撮影。発掘諸材料搬出し、全日程を終る。

(松村 淳)



第16図 調査地地形図

IV 遺構

調査地の地形

調査地の地形は、北斜面と西斜面が急斜面となり和泉砂岩の露出が見られる。南斜面は緩斜面になり現在共同墓地として使用され、東斜面も緩斜面となり一部果樹園として使用されている。また調査地は果樹園・養豚地等により、二次・三次的に墳丘が消滅されており、全体的に緩斜面となっている。

一. 1号墳A石室

a 墳丘及び外部構造

1号墳は本調査地の北端に位置し、海拔43mで最も高い尾根に築造されたものである。墳丘は部分的に数cm残すのみで、封土は流失し、前述の要因によりほとんど削平されている。また地山面において、最大径11m円周内に地山整形がされていることにより、ほぼ同規模の円墳であったことが推察される。

b 内部構造

主体部は前述の要因等により、ほとんど墳滅状態であり、基底石数個と床面に玉石敷を一



第17図 1号墳A石室

部分残す状態であった。主体部の掘り方は、墳丘中央部に巾2.5m×長さ4m×深さ0.4mの地表面（半地下式）に切り込みが検出された。残された基底石から見て石室の長軸は磁北にそって構築されその石室の大きさを復原してみると、巾1.3m×長さ2.9m×高さxになり、割石による基底石は横積に置かれている。なお石室の形態は掘り方プランにより、竪穴式石室が推察される。石室床面は攪乱により4分の1部分玉石敷が残されており、この部分より耳環1点、ガラス製小玉1点が出土した。

二. 1号墳B石室

1号墳丘A主体部の西面（2m側面）にそって、主体部の掘り方1.8m×2.75mが検出されたもので、石室は既に壊滅しており、床面の玉石敷のみ残すものであった。

造構断面において、A主体部との造構の切合は認められず同時期に構築されたもので、A主体部より小規模の石室幅1.1m×長さ2.3mの復原値が求められ、掘り方プランにより石室形態は竪穴式石室が考えられる。

三. 2号墳

a 墳丘及び外部構造

1号墳の南面27mに当り、ここにおいても造成・流失等の要因により緩斜面になり、等高線による墳丘表面状況は、判別しがたい状態であった。

墳丘は最大径13mの円墳をなし、主体部の北面と東面より円筒埴輪の集中的な出土が見られ、周囲に配列されたものと考えられるが、その抜き跡は検出できなかったと共に周溝はもたないものであった。また、主体部は本丘陵の南斜面を利用し構築されたものであり、地表面（半地下下面）の掘り方は、幅2.3m×長さ3.5mが検出され、墳丘の高さは1.5m計測されたが、元の高さは2.5m～3mの盛土が推察される。

b 内部構造

石室主軸をN53°52' Eにとる石室の大きさは、長さ2.3m、高さ1.1mで奥壁部床面幅1.05m、前部幅0.85mと規模は小型であり、わずかに古形状に奥広くされている。

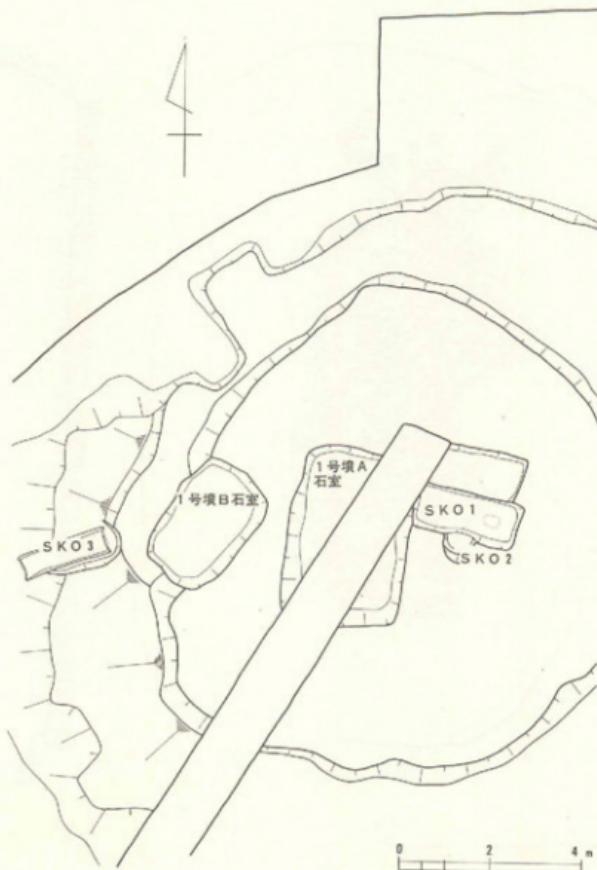
石室の形態は横穴式石室であり、玄室入口相当部の両側壁の中に閉塞石が一部分はさみ込む形になり、玄室入口部に直接閉塞施設をなすもので、狭道部がほとんどなくなり省略されているものである。また、閉塞石の乱れは追葬時が原因と考えられる。

石積み及び石材使用法は、奥壁中央の基底石だけ大きな石材を置き、その他は奥壁・両側壁とともに小口の割石で横積みをし、丁寧に粘土による目詰がされている。さらに奥壁・両側

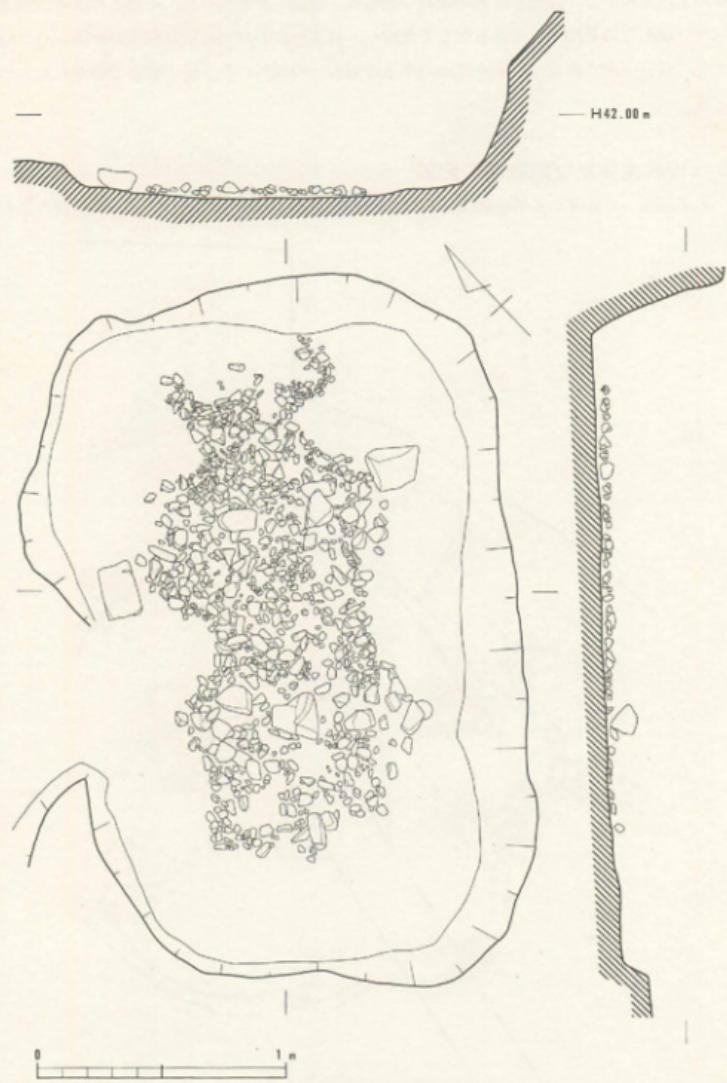
壁の上面を調整し、緑泥片岩系の板状の割石及び自然石が並べられ、その上にさらに大きな板状の緑泥片岩系の割石を蓋石として使用し、目詰めに小口の石及び粘土が詰められていた。また、石室床面の施設は1cm～3cmの小さな玉石（川原石）を5cmの厚さで敷かれたものである。

c 埋葬主体及び副葬品の配置

石室内部への外部からの土砂流入はほとんどなく、外部からの圧力によって側壁の詰石が、

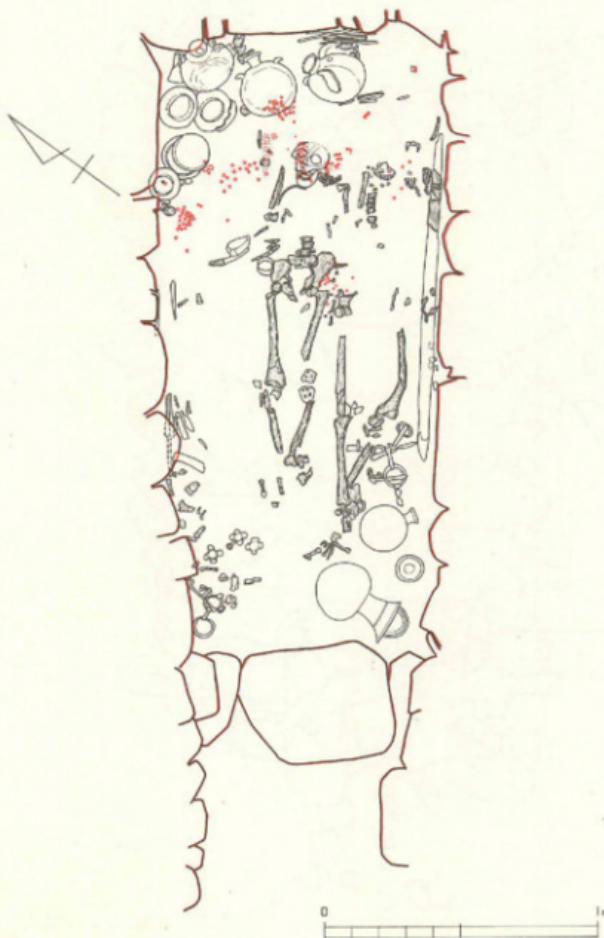


第18図 1号墳各造構図

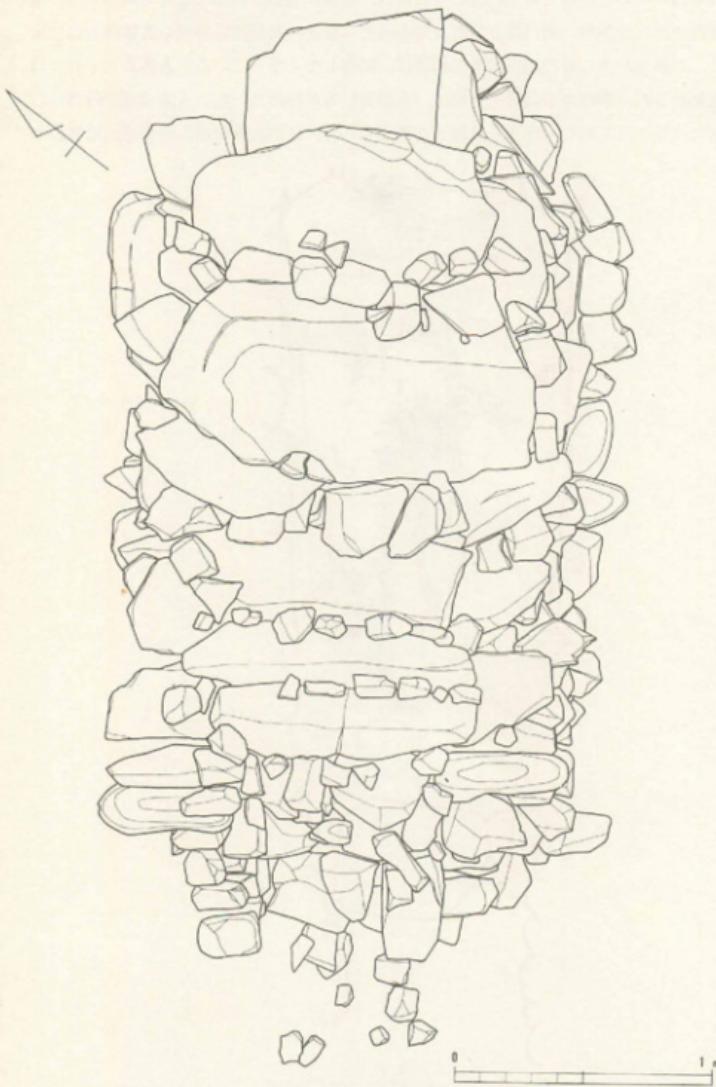


第19図 1号墳B石室

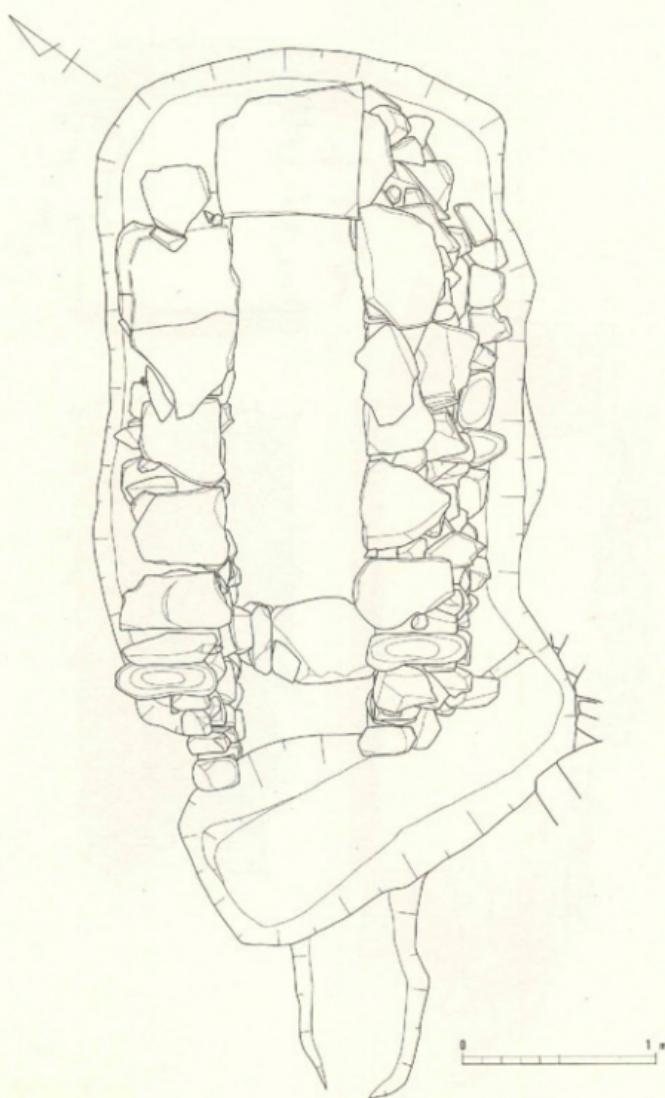
一部分落ち込んでいたのみであった。石室床面は、最後に追葬されたと考えられるA体が中心部に埋葬され、全体的に骨の保存は良好であった（後述の人骨鑑定参照）。A体顔面には朱が塗られ、この朱が塗られた場所以外の頭骨は、腐滅しなくなっている。A体の右手首には2個の銅鏡がされ、胸部からは管玉・勾玉（水晶製）等が検出された。A体の追葬段階において、先に被葬されていたB体等を整理した跡が見られ、B体大腿骨は、両側壁面に移動整



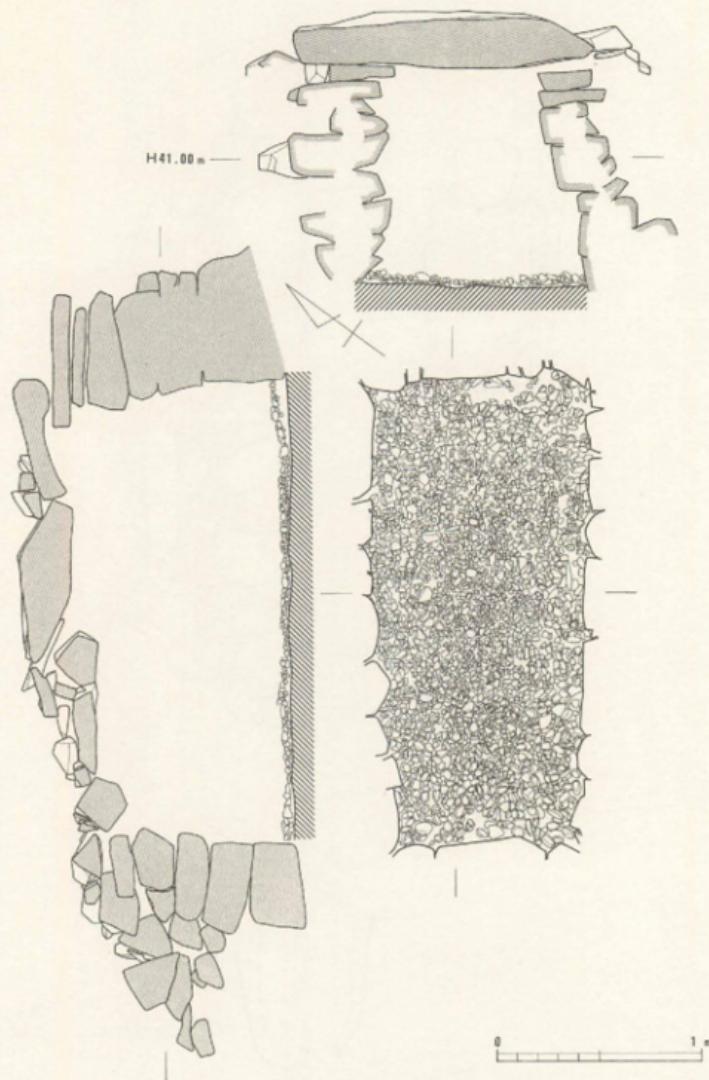
第20図 2号墳遺物配置図 第21図 玉類出土状況



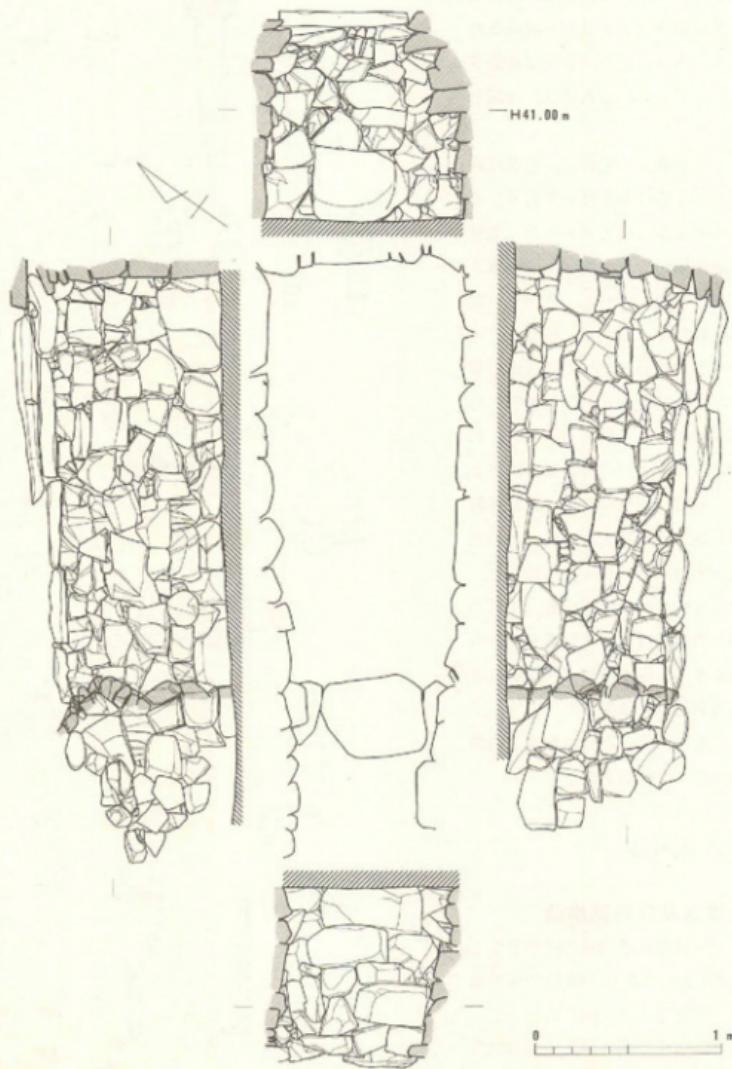
第22図 2号填石室平面図(1)



第23図 2号墳石室平面図(2)



第24図 2号填石室断面・床面施設



第25図 2号填石室展开图

理されていた。なお石室床面には、6体の歯牙（32×6）が検出されたが、A・B体を除き先に被葬されたと考えられる人骨は、消滅していた。

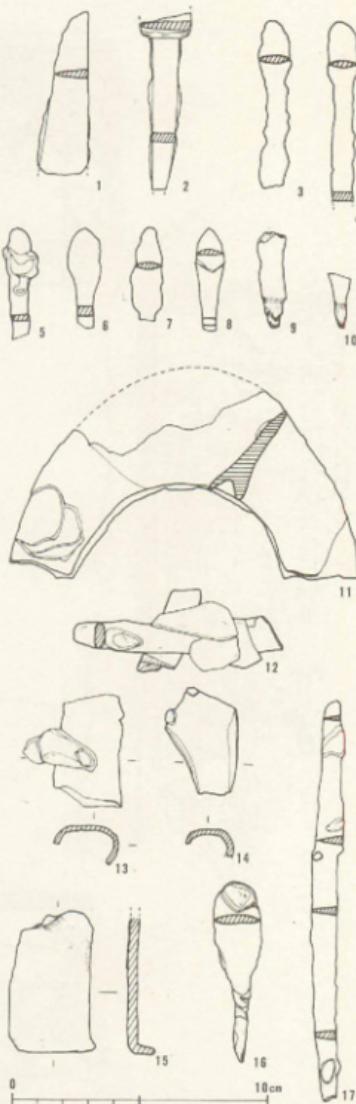
また副葬品の配置は、追葬段階における原位置を保っており、その保存状況は良好であった。奥壁床面に短頭壺3、蓋環1、提瓶3、小型広口壺（土師）2、鉄鎌束（22本）、鉄斧1、刀子4、馬具2、辻金具3が副葬され、またA体の周辺に装身具類の管玉（碧玉製）13個、丸玉（水晶製・ガラス製）24個、ガラス製小玉124個、空玉2個、耳環（銅製）2個、貝製垂飾品5個等が発見され、さらに石室入口床面に広口壺1、横瓶1を、またA体左側壁床面に直刀1（120cm）の発見は、当平野最長のものであり、X線撮影により目釘穴3ヶ所発見の成果を得た。

なお巻末に、各石室別出土遺物の分類、計測表を記した。

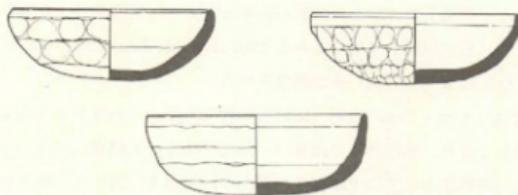
四．3号墳

墳丘及び内部構造

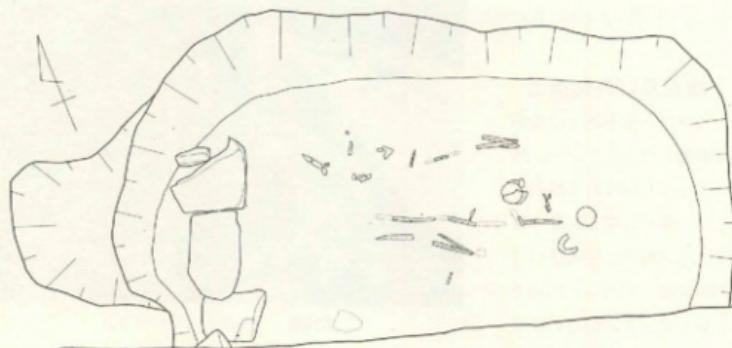
残丘は最大径12mの円墳をなし、高さ1.2mであり、墳丘の南半面は、開削等により削られていた。また同墳丘の東面封土中において、弥生土器（壺・甕・高杯）等の出土が見られた。



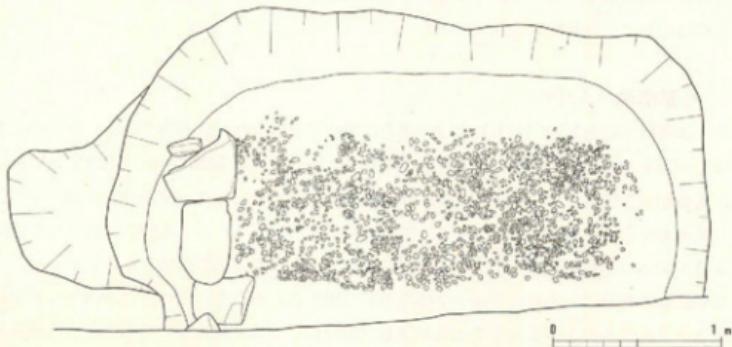
第26図 3号墳遺物実測図(1)



第27図 3号填造物実測図(2)



第28図 3号填石室平面図



第29図 3号填床面施設

主体部は、ほとんど壊滅されており、基底石数個と床面の玉石敷を残す状態であった。残された基底石により、石室規模を復原してみると幅1.1m×長さ2.2mになり、石室形態は、同石室の掘り方プランにより竪穴式石室が推察される。

石室床面の施設は、3cm～7cmの玉石（川原石）敷であり、その部分より人骨が出土したが、ほとんど腐滅しており、男性熟年の頭骨の一部及び歯牙、大腿骨（後述の人骨鑑定論文）等が検出された他、副葬品としては土師椀3、鋤先1、鉄鎌7、刀子5、鎌1（不明2）等を発見した。

五. 4号墳（A石室・B石室）

a 墳丘及び外部構造

2号墳から南方28mの南斜面に構築したものであり、盛土はほとんど削られて緩斜面をなし、僅かに墳丘が見うけられた。同墳丘は、最大径13.7mの測定値が求められ円墳をなすものである。墳丘の中央部には塚が祀られており、この部分より蓋杯が出土し、杯身の中に入骨（ほとんど腐蝕）が検出された。これらは開墾時にA主体部より見つかり、祀られたものであった。



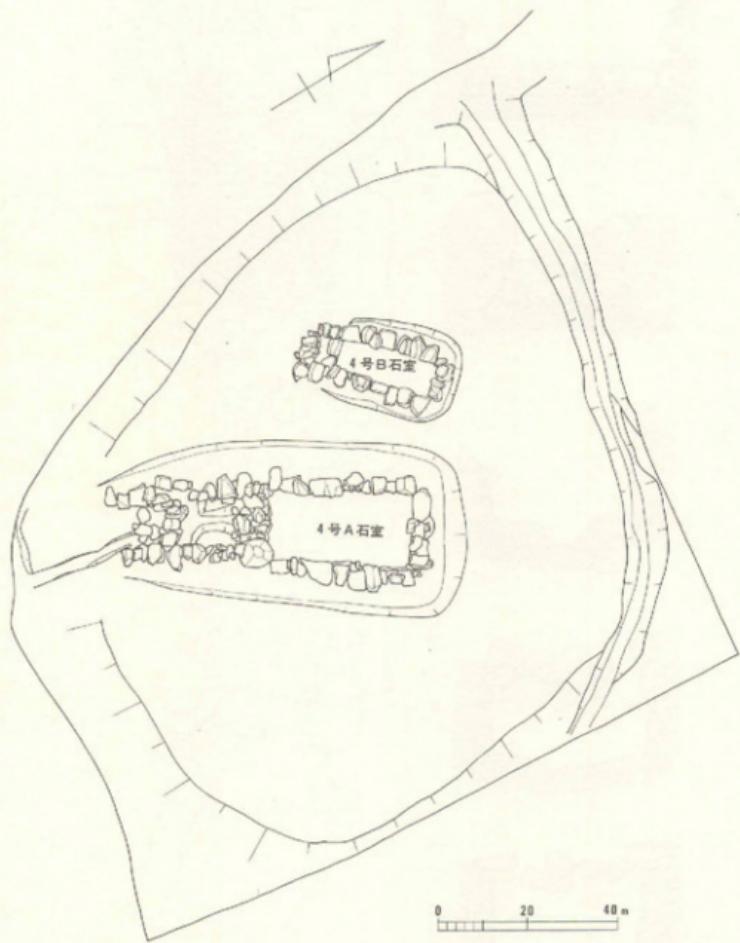
第30図 4号墳A石室検出状況

本墳は、同一墳丘に二石室（A・B主体）を構築するものであり、墳丘断面から両者は、同時期に一緒に建造されたものである。さらに同墳丘の回りには、幅0.8m～1.2m、深さ0.4mの周溝があげらされていた。

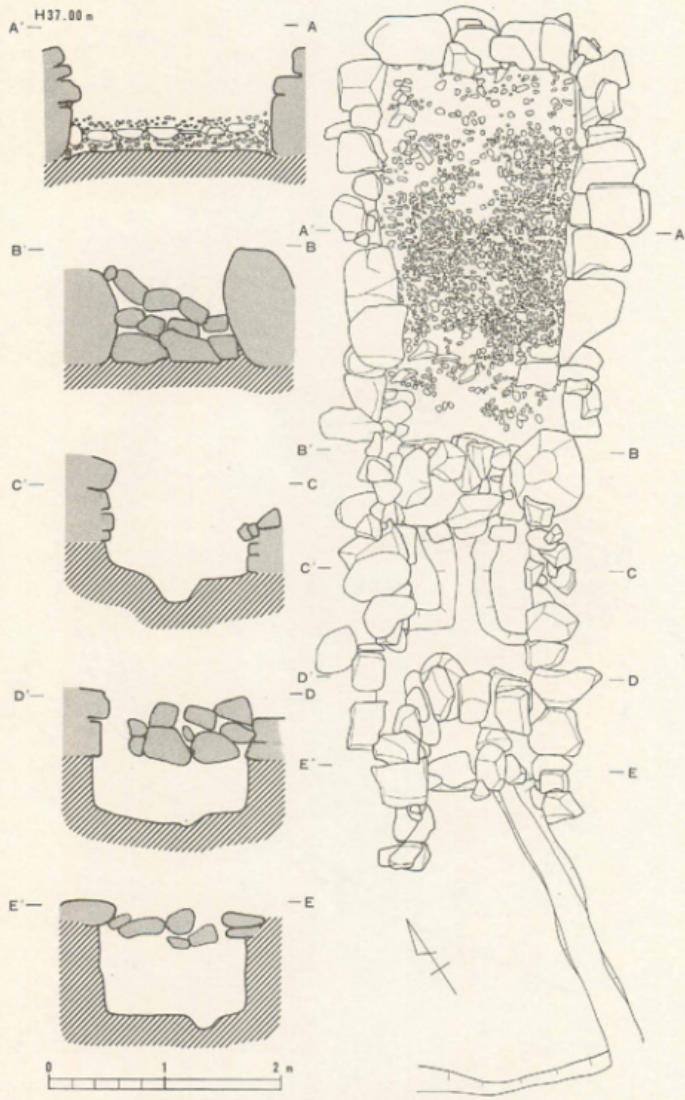
b 内部構造（A石室）

A主体部は主軸をN31°11' Eにとり、南方に開口部を作る横穴式石室である。石室の大きさは、石室全長6.3m、玄室長さ3.2m、羨道長さ3m、奥壁床面幅1.8m、玄門床面幅1.55m、羨道幅（玄門近く）1.1m、羨道幅（閉塞石近く）0.9mになり、平面プランは、羽子板状に羨道部から一直線状に奥広くなり、玄門部分の省略が見られる。玄門部入口には石積み（3段=40cm）を行い、東角に玄門石を縦に置き、玄室と羨道部の区切りがされている。

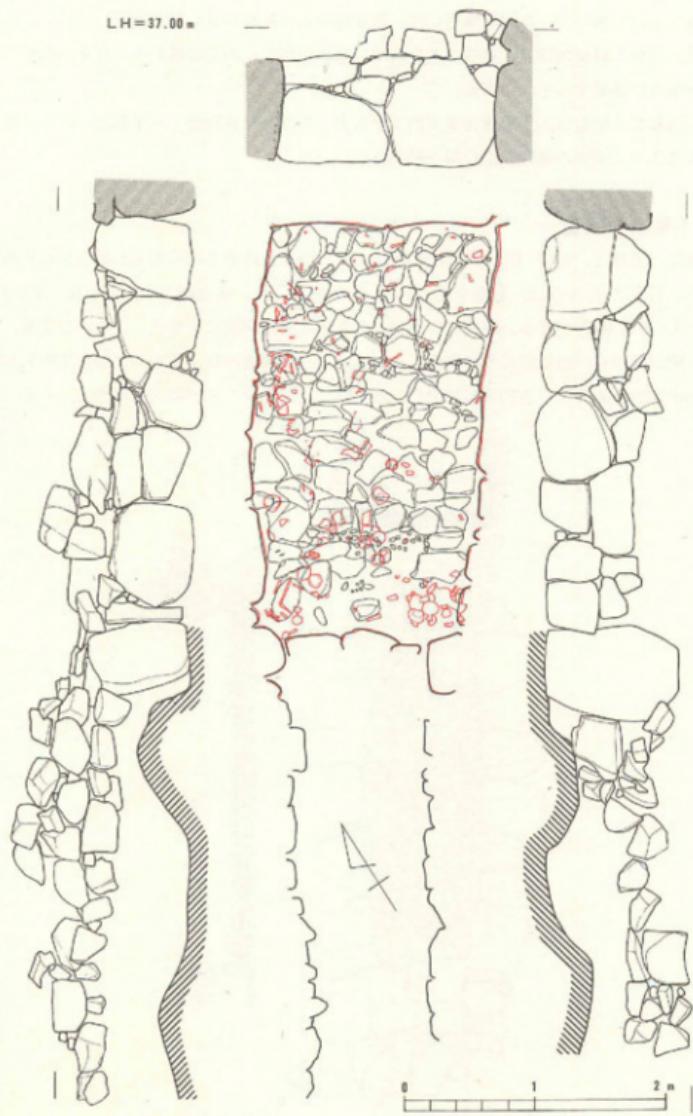
玄室床面の施設は、基底に5cm～7cmの玉石（川原石）を敷き、その上に20cm～30cm割石を敷き、さらにその上に5cm～7cm大の玉石（川原石）が敷かれるものである。また羨道部の床面には、45cm幅の排水溝を作り、さらにその中に30cm前後の割石を敷き、玄門部から開口部近くまで並べられている。閉塞施設は、開口部の基底に閉塞土を用いて、その上に閉塞



第31図 4号墳平面図



第32図 4号填石室平面断面図



第33図 4号墳石室展開図

第34図 4号墳遺物出土状況

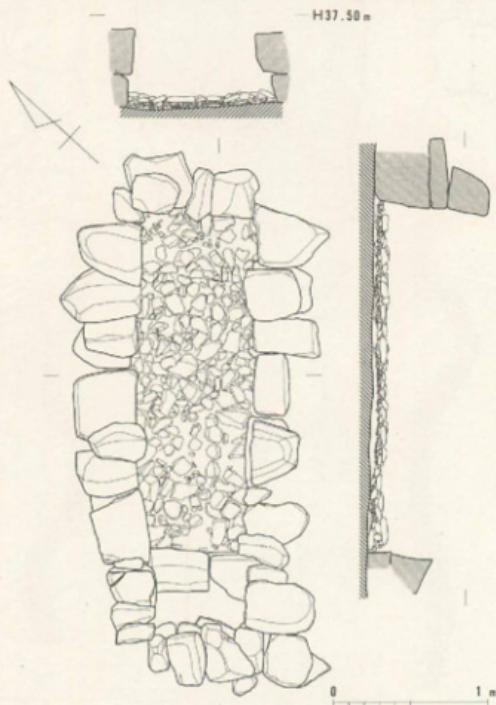
石を置くものであった。なお閉塞石には、追葬時の石の乱れが見られた。

石積み及び石材使用法は、奥壁の基底石だけ縦に使用しその上は横積みになり、側壁もすべて横積みに構築するものである。

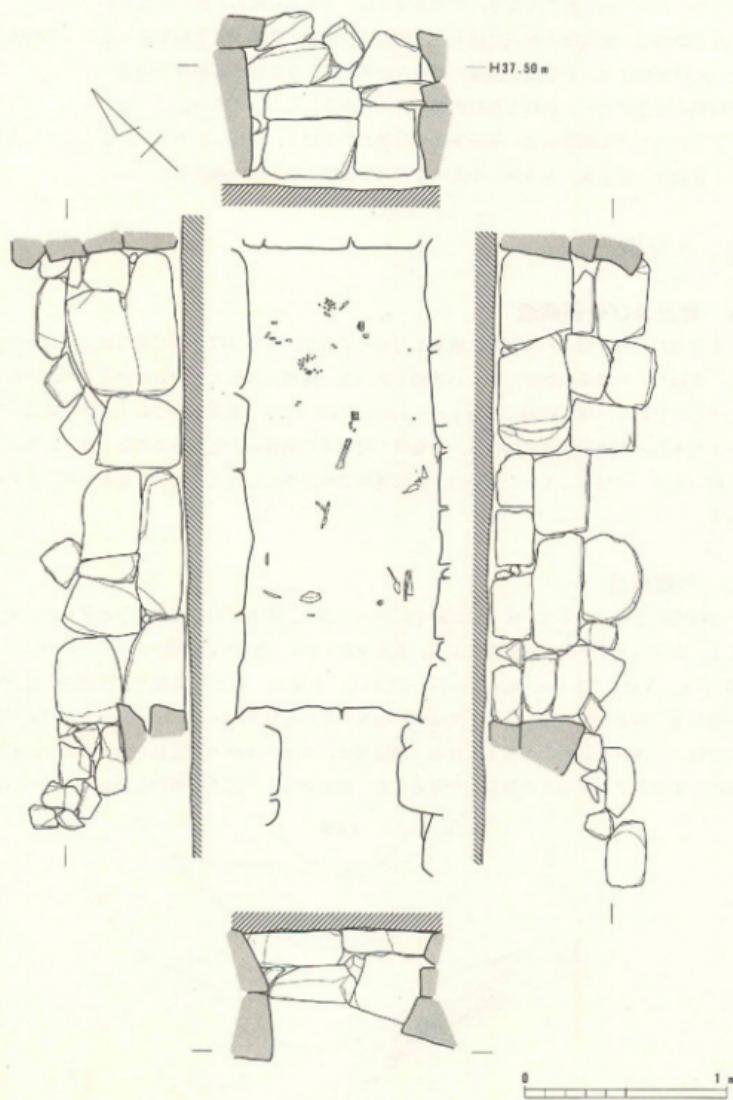
なお副葬品の配置は、玄室床面東玄門下から出土した台付長頸壺1・平瓶2・椀1以外は、開墾等により玄室内の遺物は原位置を動かされていた。

c 4号墳B石室

主体部の主軸は、N47°EでA主体部にははそった形に構築され、石室形態は横穴式石室である。石室の大きさは、石室全長3.5m、玄室長さ2.3m、床面幅1m、後道長さ0.9m、羨道幅0.6mの規模である。平面プランは、A主体部を意図的に小型化したものであり、両壁は、開口部から一直線状にやや奥広くなっている。床面施設は、玄室相当部に川原石10cm～20cmが敷きつめられ、玄門入口部分は、階段状に段を降りて玄室に入る形態になっている。



第35図 4号墳B石室平面図



第36図 4号墳B石室展開図

羨道部の長さは短いものとなり、この部分には、土を入れ固められていたものである。

なお閉塞は、開口部の基底に盛土し、粘土及び割石で閉塞するものであった。また石積み及び石材使用法は、石室及び羨道の石積みが基底石より2段の石積みしか残っていなかったが横積みを基調とし、石材と石材の間に詰め石がされるものである。

玄室内における副葬品は、東壁下より有茎式の平根4、尖根3、刀子4、また装身具類として耳環2、管玉8、丸玉56、小玉（ガラス製及び土製）52を検出した。

六. 6号墳

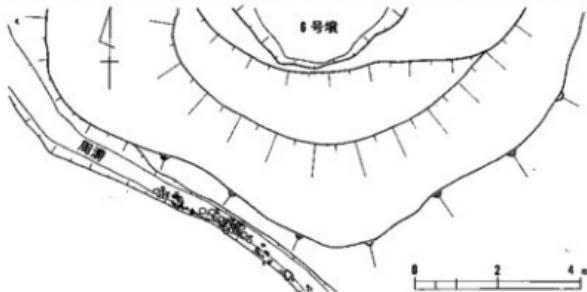
a 墳丘及び外部構造

2号墳から東方23mの南斜面に構築したものであり、盛土はほとんど削られて緩斜面をなし、表面からの墳丘判別がつかない状態であった。同墳丘は最大径19mが測定され、円墳をなすものであり、墳丘周囲には幅1m～2.3m、深さ0.3mの周溝をめぐらすものである。

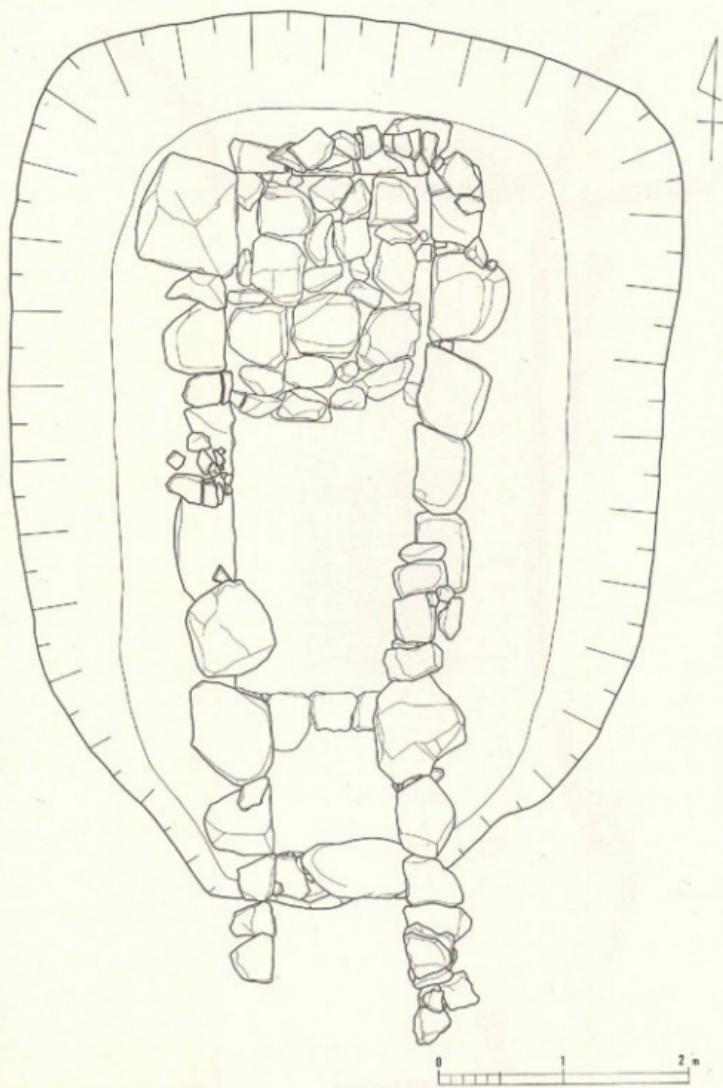
また本墳の南面周溝基底部には、造墓時の被葬者の副葬品を追葬時に埋葬されており、石室内（前室）に残存していた高杯は、同周溝中で検出された片と一致して復原されたものである。

b 内部構造

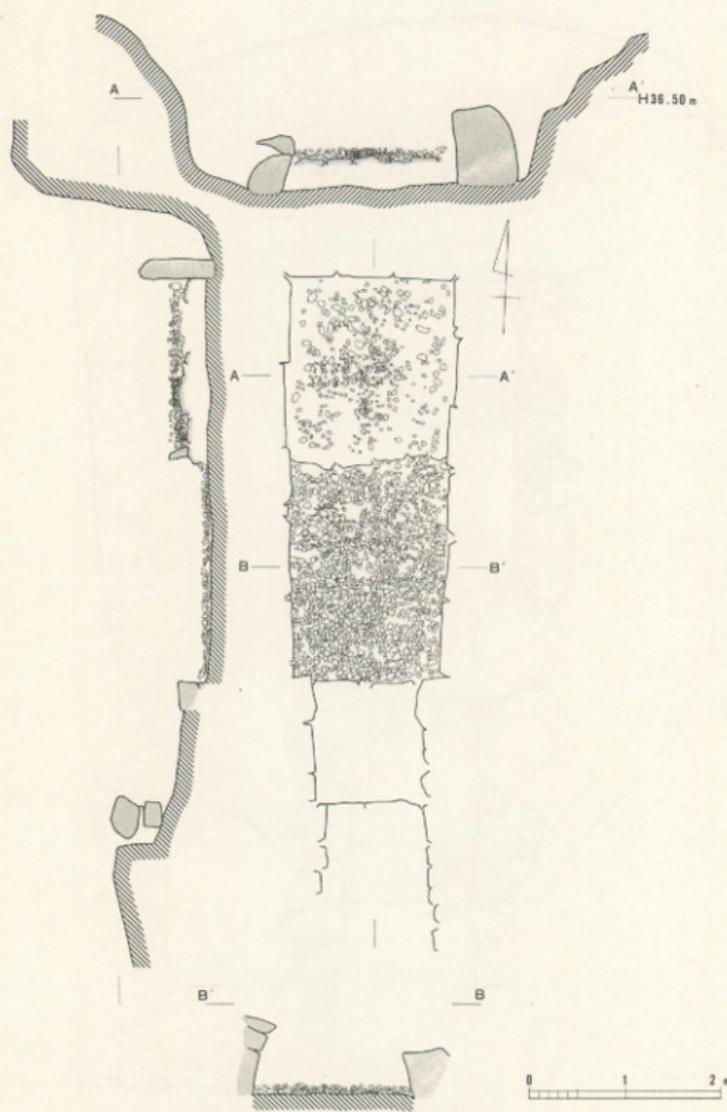
主体部の主軸はN $2^{\circ}11'W$ とほぼ磁北にそっており、南方に石室開口を作る横穴式石室である。石室の大きさは、石室全長7m、玄室全長4.2m、奥室1.9m×幅1.8m、前室2.3m×幅1.7m、羨道長さ2.8m、幅1.2mとなっている。玄室は、前室と奥室とに区画されており、奥室は前室部より40cm高くなり、30cm～50cm大の割石を敷き、さらに3cm～5cmの小粒の川原石を敷き、造築を収めたと考えられる。前室部は、5cm～8cmの川原石を敷いていた。石室規模・構造等で4号墳との類似点が見られる。羨道部は、一部西壁面が抜きとられているが、



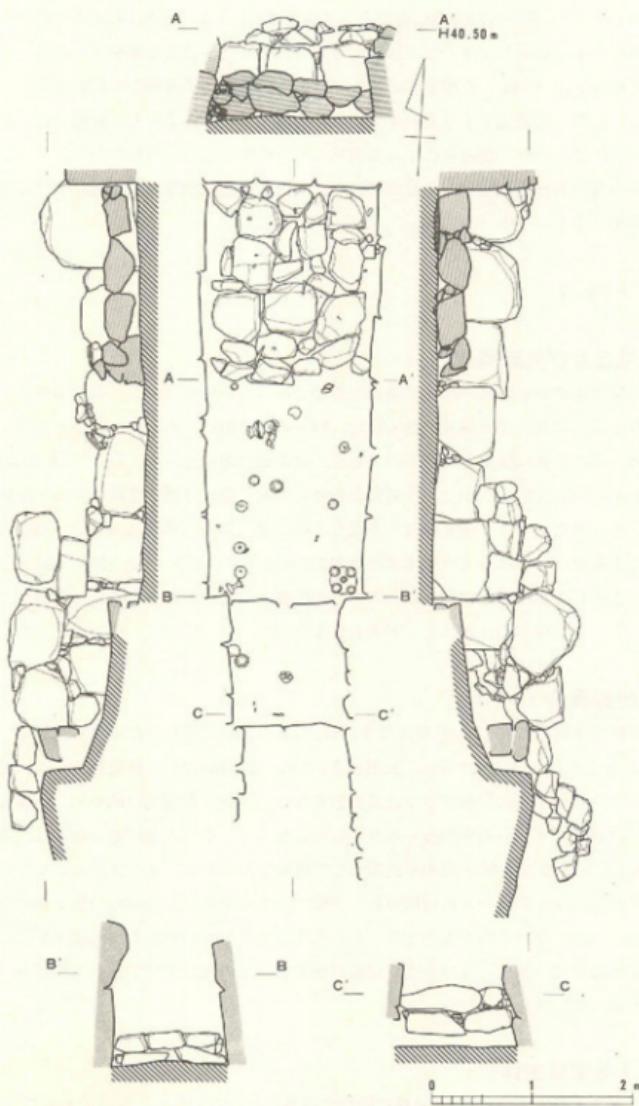
第37図 6号墳周溝遺物出土状況



第38図 6号填石室平面図



第39図 6号填石室床面施設



第40図 6号填石室展开図

開口部から1.2mまではほぼ地山面にそって構築され、1.2m地点に石積み2段(60cm)により地山面の土留めをし、またこの部分より地山面切り込みによる半地下になり、玄門部でさらに石積み2段(30cm)を構築することによって、玄室と羨道部との区画を合わせて土留めを行っており、羨道途中より玄門部までは粘土及び土を固めており、断面的には、石室開口部から玄門部にかけて階段状に下って前室へ行く構築方法がとられている。

石積み及び石材使用法は、奥壁の基底石と玄門だけ縦に使用しその他のすべて割石を横積みに構築するものであった。

七. 8号墳

a 墳丘及び外部構造

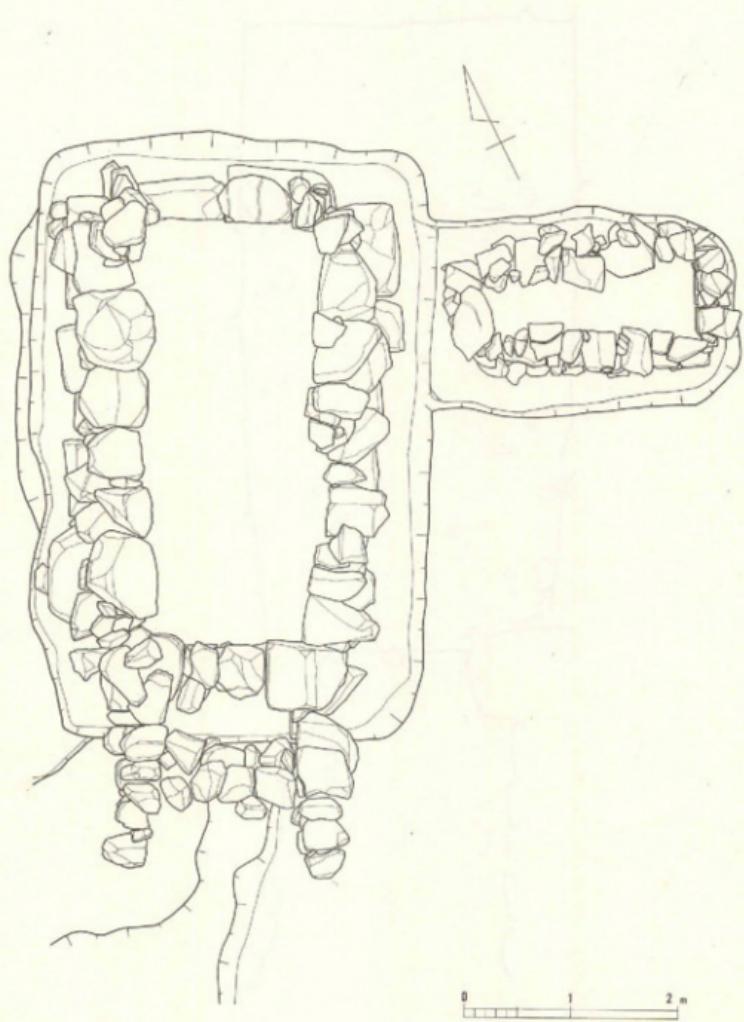
6号墳の東南27mの緩斜面に構築したものであった。墳丘はかなり削平されていたが、僅かに見うけられた。また墳丘の最大径は、14mの測定値が求められ、円墳をなすものである。本墳は、半地下式に構築されたものであり、地山面の切り込みは0.7mで、石室基底部から盛土1.8mが検出されたが、墳丘断面から考えてあと数mは盛土されたものと推察されるものである。また1・4号墳と同じく本墳も、同一墳丘に逆L字状に二石室を同時に構築するものであるが、さらにもう一基本墳の東側3.5mに小型の石室(C主体)床面が検出された。しかしこのC主体の墳丘は、本墳のA・B主体構築段階での隣接関係により削平されたものと見られ、C主体の墳丘はほとんど見られなかった。

b 内部構造(A主体)

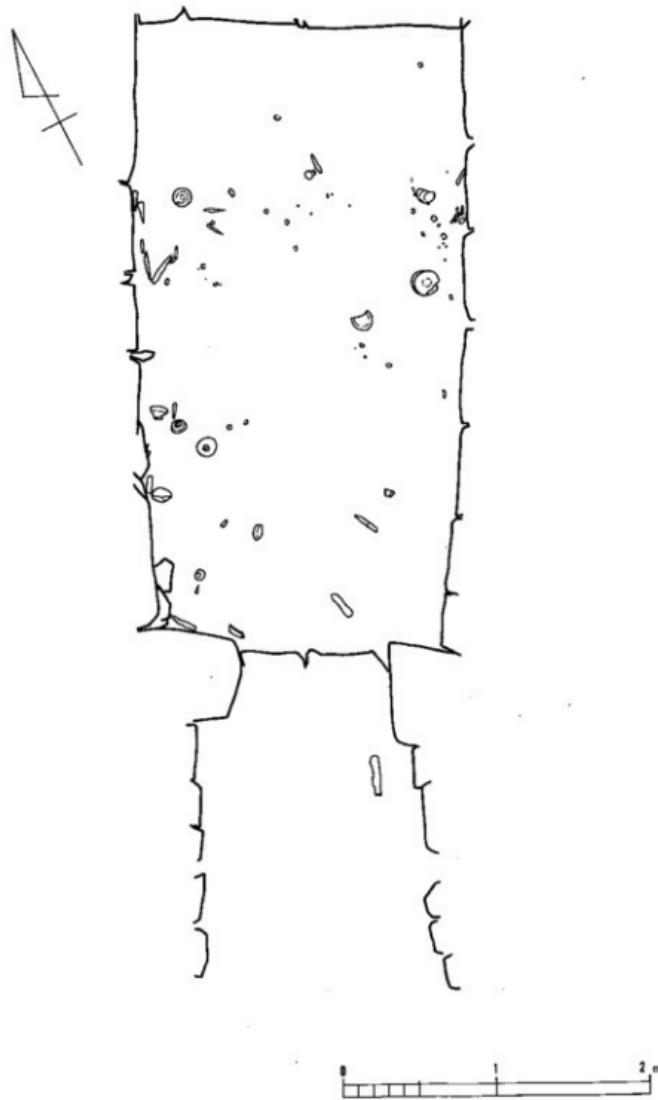
主体部の主軸はN26°4'40"Eになり、ほぼ南方に石室開口を作る横穴式石室である。石室の大きさは、石室全長6.8m、玄室長さ4.1m、玄室幅2.2m、羨道長さ2.2m、羨道幅1.5mになり、石室全体の平面プランは長方形をなし、側壁は石室開口部から一直線状になり、玄門だけ側壁より40cm石室内面へ入り込む形になっている。玄室の床面施設は、奥壁から1m×幅2.2m部分は遺骸を収める施設として構築したもので、下に20cm大の小角礫を敷き、その上面に5cm~10cmの玉石(川原石)を敷いたものであり、その他の前室相当部は、玉石(3cm~10cm)だけを敷くものであった。羨道は盛土を行いその上に石積みを置くものであり、閉塞は奥壁の基底石及び玄門だけ縦に使用し、その他はすべて割石を横積みに構築するものであった。

c 8号墳B主体

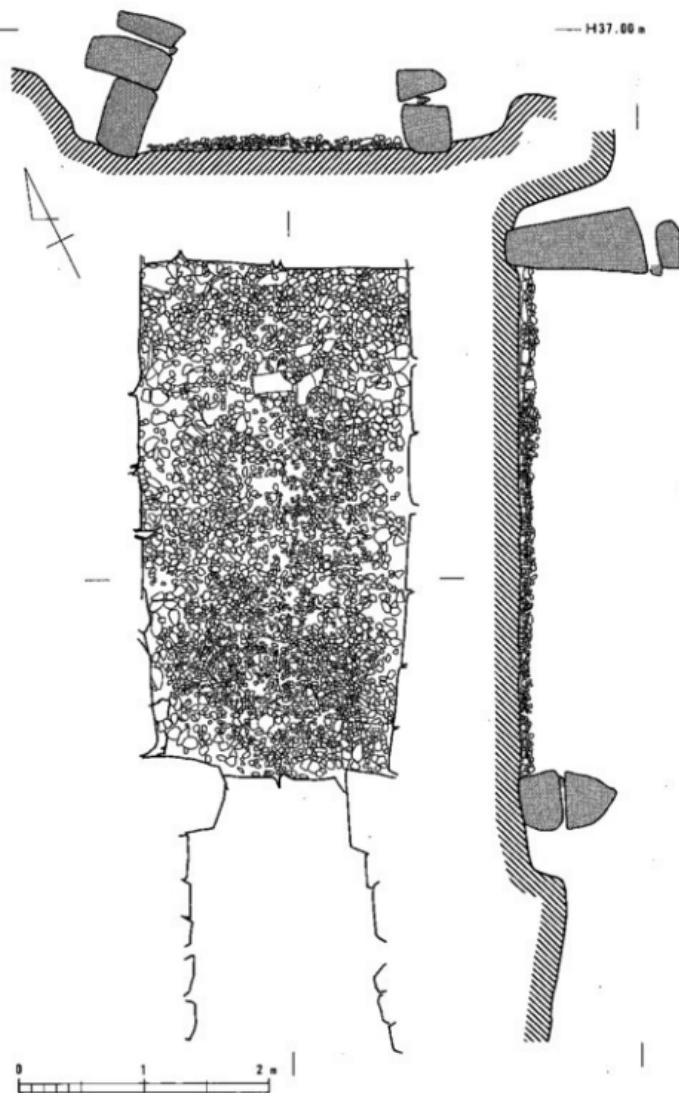
A主体部の石室北端より0.5m横に同時に構築したものであり、石室の大きさは、全長2.8m、幅1.3mで、平面プランはほぼ長方形をなし、床面は玉石4cm~7cmが敷かれているが、



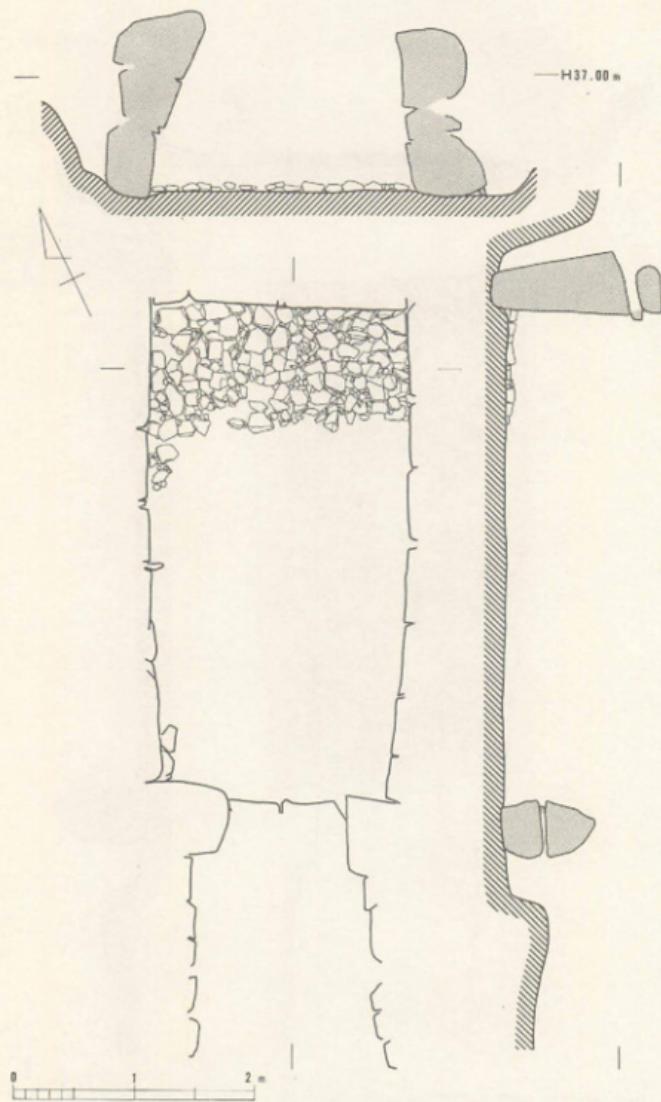
第41図 8号墳石室平面図



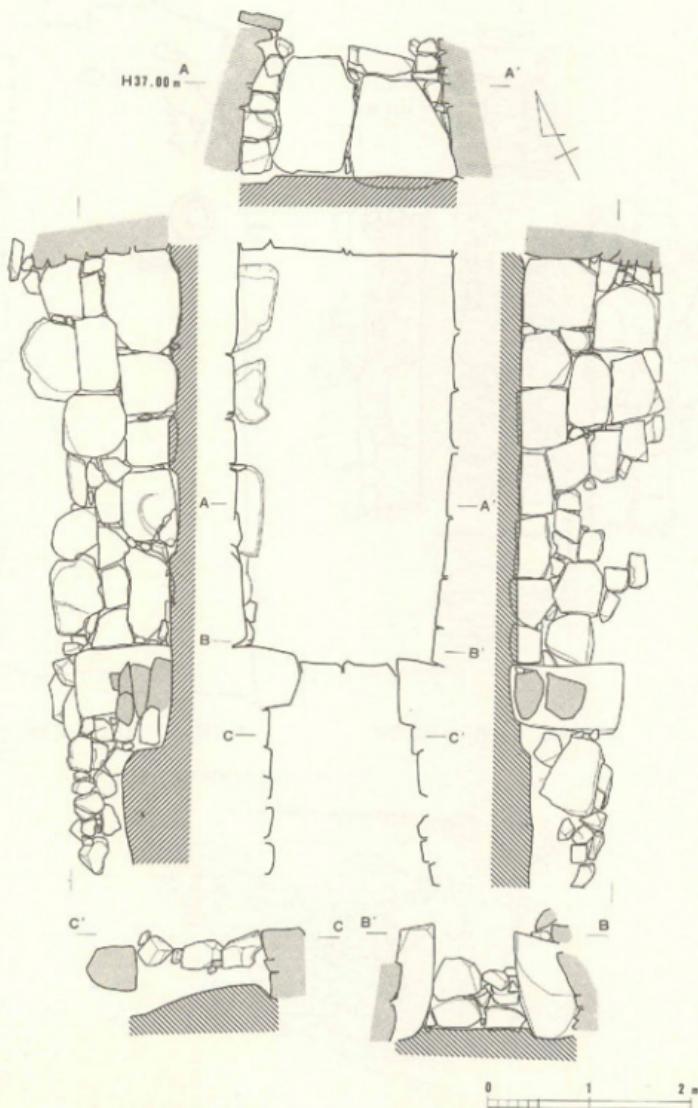
第42図 8号墳A石室遺物配置図



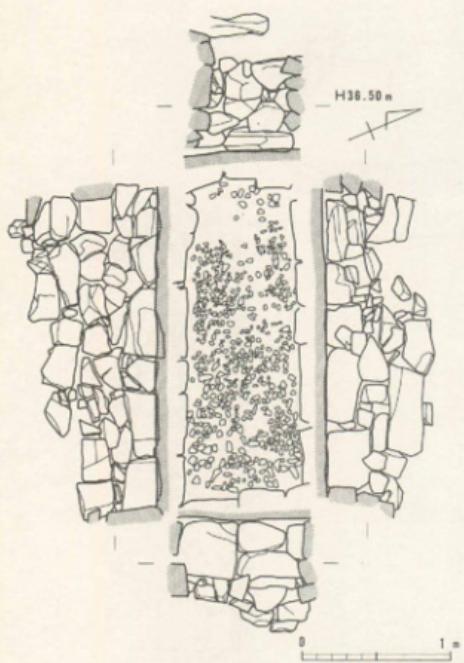
第43図 8号墳A石室床面施設(1)



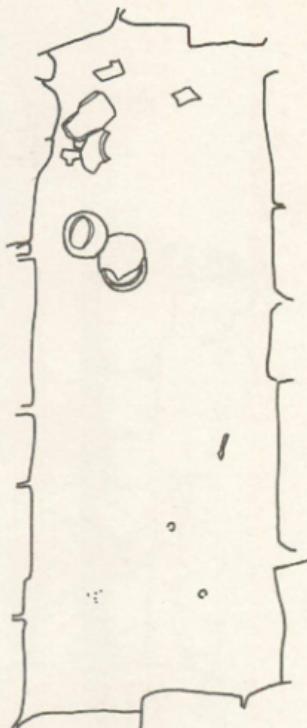
第44図 8号墳A石室床面施設(2)



第45圖 8號墳A石室剖面圖



第46図 8号墳B石室展開図



第47図 8号墳B石室遺物配置図



第48図 8号墳C石室平面図

狭道及び排水溝は省略され、全体的に雑な作り方になっている。また、石室の閉塞をA主体部側(西面)にした事が考えられ、西面側壁基底石上には、粘土及び土によって塞がれている部分が見られ、一見竪穴の様相を示しているけれども横穴式石室を省略したものと解したい。石積み及び石材使用法は、A主体狭道部に使われている石材と同じくらいのもので、比較的に小さな石が中心に使われており、側壁は、八の字状に割石を横積に構築するものである。

d なお8号墳C主体が同墳B主体より1.3m東方に発見されたが、開墾等により基底石数個と床面の一部が残されていたのみであった。残された石室は、幅1m×長さxであり、下に20cm~30cmの板石を敷き、その上に7cm大の玉石を敷きつめるものであった。なお本石室は壊滅寸前状態であったが、短頸壺等の若干の出土遺物が見られた。

八．5・7号墳

两者ともに主体部は壊滅し、なくなっているが、5号墳においては直径14m範囲に地山整形が見られ、明らかにそこに何らかの主体部の存在が考えられ、西裾部の4m範囲地には須恵器片が密集して検出され、5号墳の直接的な副葬品又は祭祀的な行為等のものとして考えたい。また7号墳においては直径15m円内に地山整形がされ、その周囲には幅1mの周溝が検出されたもので、ここにもその主体部の存在したことが考えられるものである。

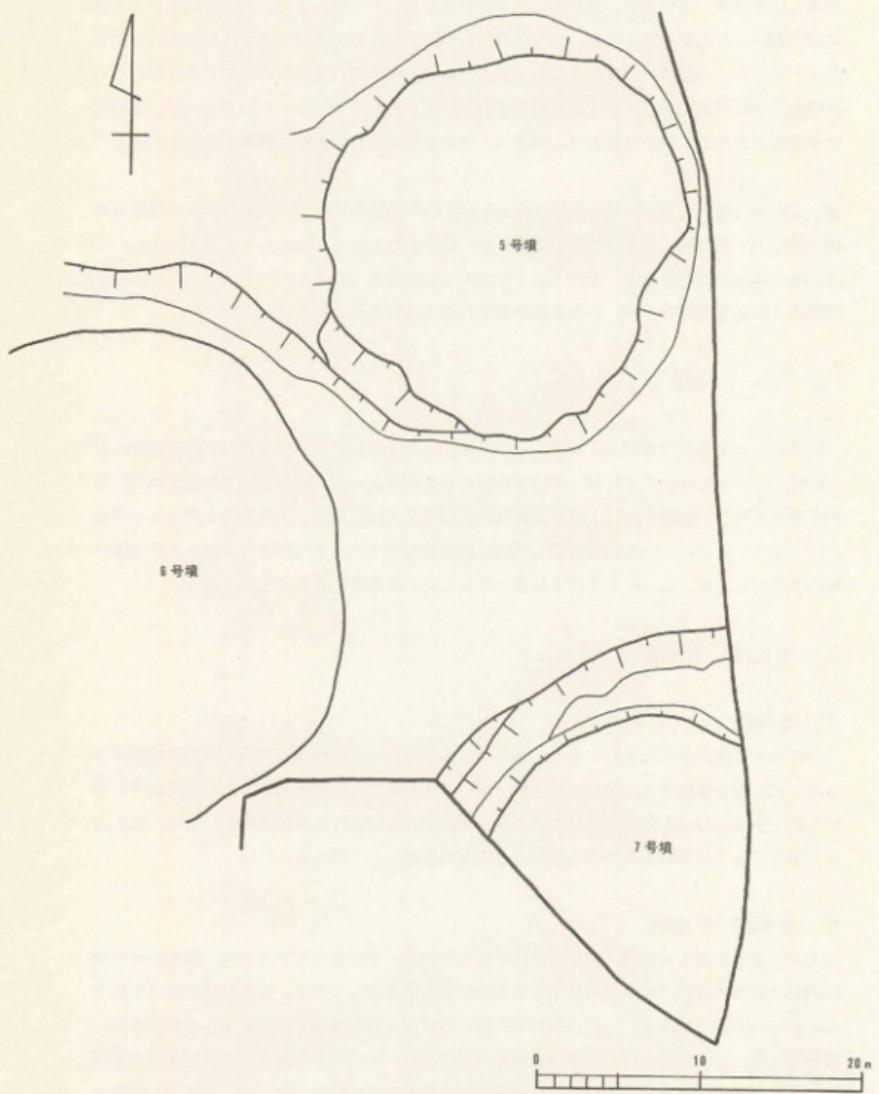
九．その他の遺構

a SK01

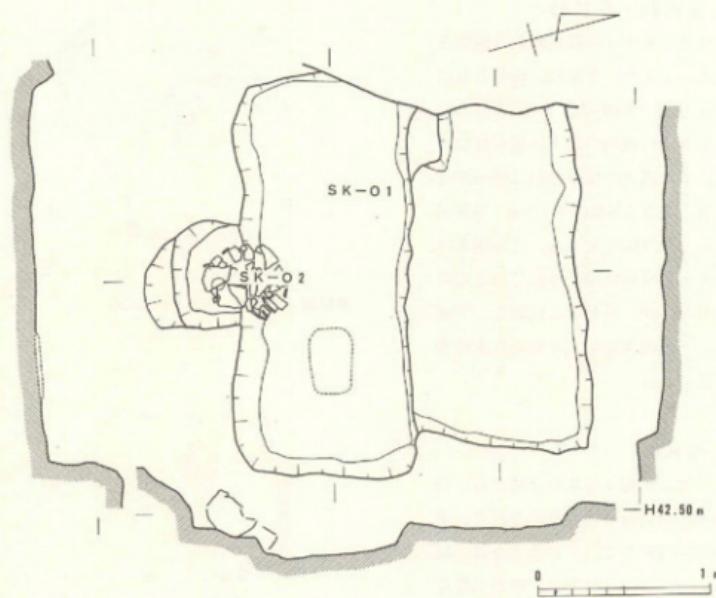
1号墳丘に検出されたものであり、幅1m×長さ2.4m×深さ0.5mで長方形状に地山切り込みの掘り方が検出され、SK2の遺構を切って作られたものである。また、西壁面及び北壁もなく全体的にかなり搅乱されていたが、床面から大腿骨片が検出された。また、他の遺物の出土は見られないものであったが、古墳期の遺構として解したい。

b SK02 (壺棺葬)

1号石室の東面1mの墳丘内から検出されたもので、その掘り方プランは、直径60cmのほぼ円形状に検出され、北面に隣接するSK01が本遺構を切っており、壺及び蓋の部分が削り取られていたものである。土器の相対年代型的には、弥生後期末葉に属するものであり、当平野においては祝谷古墳、津田鳥越遺跡(弥生集落)、天山天王が森古墳、西石井荒神堂遺跡、浮穴小遺跡、石井東小遺跡(弥生前期)等の低地の弥生集落の内外や、高地の古墳墳丘下層からその出土例が見られている。



第49図 5・7号墳遺構図

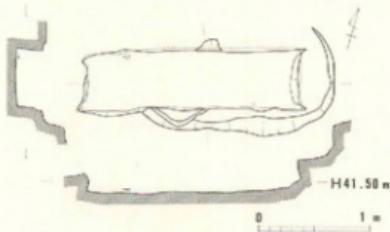


第50図 SK01・SK02実測図

c SK03

1号墳（B主体部）西面1mの墳丘
下層に、長方形プラン状に地山を切り
込んだもので、その掘り方は、幅0.5m
×長さ1.9mが検出された。また土圧に
よって掘り方の肩面が張り出しており、
基底面の長さ及び幅部分が若干広くな
っている。基底面から鉄鎌（無茎式、
身＝菱形状）が1個発見され、この鉄
鎌の身部分（下面になっていた部分）
から木片が検出された。これらのこと
から木棺葬と解するものである。

（主軸N75°20' E）



第51図 SK03実測図

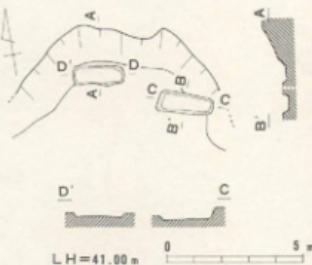
d SK04・SK05

2号墳の東南8m緩斜面から検出されたものであり、主軸は、両者ともにほぼ同方向(N80°W, N74°W)になり、中からの遺物の出土は見られなかった。また両者の掘り方幅は60cmが計測でき、長さもSK04=1.9mとSK05=2mではほぼ同じである。この両者は、掘り方が部分的に搅乱されているため明確でないが、SK03に比較し、平面プラン・規模等類似点が見られ木棺葬が考えられる。

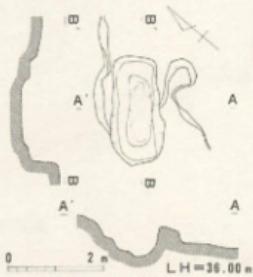
c SK06

8号墳の東面4m埴丘下層から、ほぼ長方形状に掘り方が検出された。主軸はN50°15' Eで、その大きさは、幅1.1m、長さ2.3mになり、中から数片の弥生土器の出土を見た。

(西尾、池田、松村、栗田)



第52図 SK04・SK05実測図



第53図 SK06実測図

V 遺 物

各古墳出土の遺物概説

(各古墳出土の詳細なデータは、出土土器観察表に表示した。)

a. 2号墳出土須恵器 (図版45・46)

2号墳出土物のうち杯A・B(4・5)は同型式であり、両者とも受部上面に鈍い一条のヘラ凹線を施し、手法的には蓋A・Bと同じく底部のヘラ削りのシャープさはなく、粗く不調整のまま仕上げている。

蓋Aは短頸壺の蓋として考えられ、このうち蓋3は短頸壺6とセットをなす。蓋Bに分類する2は焼成も甘く不調整であり、天井部のヘラ削りは粗く、製作工程における所の粘土ひも巻きあげの痕跡等が見られる。蓋C(17)・D(16)は墳丘南裾封土下から出土したものであり、蓋D(16)は器形的に古い要素を残している。

短頸壺はほぼ同型式として考えられ、器形的には口縁部が内傾するものと直立気味になるものになり、体部は肩が張り気味になるものと丸くなるものに分別できるが、施文は施さないものである。底部は共通して扁平になり、粗いヘラ削りを施す。

提瓶は3個体出土し2型式と考えられ、体部側面の耳が環状になるもの(12)とカギ状屈曲するもの(13・14)が見られ、共通して体部前面が丸くふくれ、背面が平らになるものである。

横糸(15)は退化形態で小型化している。口頸部の形態は、前者の提瓶(12・13)と全く同じである。広口壺(19)は口頸部を3段にヘラ凹線により区分し、柳描き波状文を施すものである。また、石室内より手づくねによる小型広口壺(土師)の出土が見られた。その他墳丘南裾部から甕(20・21)と蓋(16)が一緒に出土し、皿(18)も墳丘上から出土したもので、底部に糸切が見られ2号墳とは別に考えるものである。

b. 4号墳出土須恵器 (図版47・48)

4号墳から須恵器は計38個体出土した。このうち杯は3型式に分類でき、まずA類の杯(53)はたちあがりが長く内傾し、受部は外上に短くあがり、体部から底部にかけてのヘラ削りの範囲は広く、器高は比較的高くなり、当墳の先行タイプとして考えられ、また蓋(52)とセットをなす。杯B類はたちあがりが極端に短くなり、杯(22)は小形になり、杯(23)の器高は比較的高いタイプである。杯C類は器高が浅くなり、たちあがりも比較的短く内傾または直立気味になるタイプである。また、杯D類は平安期の瓦器になり別に考えるもので

ある。

蓋も3型式に分類でき、A類は杯(53)とセット関係になる蓋(52)タイプであり、2号墳出土蓋(17)タイプとはほぼ同形態として考えられ、天井部のヘラ削りの範囲は広く、体部との境界は丸味がかるものである。蓋B類(31~34・49・50)は天井部が丸味気味になり、蓋C類(35・51)は天井部を一段高くし、平ら部分が広く作られ、天井中央に点状に粘土を付すタイプも見られる。

高杯は細かく4型式に分類でき、出土高杯はすべて無蓋であり、A類(36)は杯部への施文が櫛状の施文具により列点文が施され、B類(37)は櫛描き波状文を施すタイプで古い要素をまだ引き継いでいるものであり、C類(39~40)は器高が比較的低くなるタイプであり、短脚になるものである。D類(38・42)はC類同様に短脚化し、施文をしないもので、杯部が体部から底部にかけて丸味化している。

平瓶は2型式考えられ、A類(43・44)は漏斗状の口頭部が付き、体部上面がふくらむ器形になり、B類(45・46)は口頭部が外上に長くのびるもの(45)や、体部上面が扁平になり肩が張る器形になる。しかし、A・B類共に口頭部または体部に一条のヘラ凹線を施す共通点が見られる。

短頸壺は3型式に分類でき、A類(47)は口頭部が外反するタイプであり、B類(61・62)は直立または内傾するタイプで、C類(63)は外上にのびるものである。また、A・C類は共通して体部上面に数条のヘラ凹線またはヘラ描き斜線文が施されるものであり、B類は施文が見られない。

長頸壺は1個体のみであるが、群集墳の衰退期にかかる時期の久万ノ台1号墳等の出土のものと比較してみると、口頭部がより細く長くなり、体部上面も扁平気味に広くなり肩が張る器形を示し、土器相対の形態的には明らかに前者より後出の下るタイプとして考えられる。

台付広口壺は2型式に分類するものあり、A類(66)は口頭部径も広くなりより大きくラップ状に広がり、頭部または体部上面にヘラ凹線とヘラ描き斜線文・櫛描き列点文を施すものである。B類(67)もA類同様の施文であるが、形態的には頭部が窄められ細長になり長頸壺を思わす。

その他墳丘部から上記より先行形態の甕や器台が出土した他に、平安期に属する小皿(土師)は底部に糸切り痕を残しているものも見られた。

c. 6号墳出土須恵器 (図版49~52)

6号墳からは周溝出土を含め計53個体出土し、当墳からの出土物は、そのほとんどが4号墳出土のものと同形態として当てはめることができた。それらのうち杯は3型式に分類でき杯A類(69~71)は4号墳B類に同様であり、杯B類は4号墳C類に比定でき、杯(94)のみ別に考えるものである。

蓋は2型式に分類でき、蓋A類(72)は4号墳蓋C類に同様であるが、蓋C類(74)の天井中央に乳首形つまみの出現が見られる。また、蓋B類(73)は短頸壺とのセットが考えられ、蓋D類(82~85)は天井中央に乳首形つまみがつくもので、子持付器台の杯とのセットになるものである。

無蓋高杯は2型式に分類でき、石室内出土A類(75)と周溝出土のC類(100~102)は同タイプになり、4号墳A類と同形態として考えられる。また、石室内出土無蓋高杯B類(76~79)と周溝出土D類(103~105)が同タイプになり、4号墳出土無蓋高杯C類と同形態になるものである。

台付長頸壺は2型式に分類でき、A類(80)は4号墳出土台付長頸壺(48)と器形及び施文がほぼ同様になるが、体部肩面下のヘラ描き斜線文は、斜線の中に列点状の施しが見られる。また、もう1型式は、周溝出土のA・B類(116・117)に細分類することが見られる。

また広口壺(118)も4号墳出土台付広口壺A類と同タイプとして比定できるものである。

甌は2型式に分類でき、A類(95)に比べB類(96)は口頭部がより長く広くなる特質が見られ、A類が先行タイプとして考えるものである。

短頸壺は2型式に分類でき、A類(106)は4号墳のA類に比定でき、B類(107~113)も4号墳B類と同形態として比定できるが、1型式B類の中で極端に口頭部が短く体部の肩が張る(113)ものも分類可能である。

その他特筆すべきものの子持付器台(86)であるが、器台上面中央に付けられる子持掛は形象化され、その周囲の杯部は同墳の杯B類と同形態の範囲になり、脚部に施文される列点文も先述した4・6号墳の時期に盛行する施しとみられる他、当平野で出土の松が谷古墳出土のものに比べ器高も低く、形象化されたものとして解するものである。

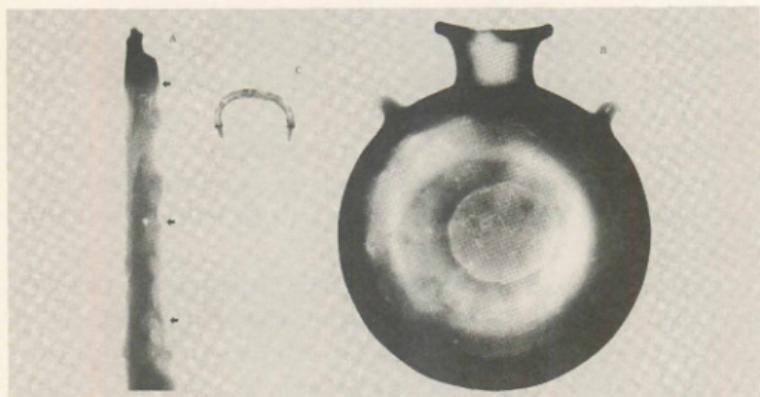
d. 8号墳出土須恵器 (図版53)

8号墳からは計24個体出土した。型式的には古い特徴をもつ杯は同形態になり、たちあがりや受部及び器高、口径等2号墳と大差ないものとして解され、椀として分類する(133~135)ものは別個に考えるものである。

蓋は3型式に分類でき、A類(122~123)は上記の杯とのセットが考えられ、C類(127)もほぼ同時期の形態として考えられ、B・D類は6号墳にも見られるが、4号墳蓋C類のタイプとして解するものである。

高杯はすべて4・6号墳の型式に当てはめられるもので、有蓋高杯(141・142)は6号墳出土のものと大差なく、無蓋高杯(143・144)は4号墳出土無蓋高杯C・D類に比定される。

短頸壺はほぼ同形態として考えられるが、136は直口壺としても考えられ、また、長頸壺の短頸化された退化形態としても考えることができ、当平野では松が谷古墳からその出土が見られる。また他の短頸壺(136・138)は、4号墳出土短頸壺B類に比定できるものとして



第54図 X線による調査成果

A. 2号石室出土、直刀（目釘穴） B. 2号石室出土、提瓶（粘土のつぎ目）

C. 2号石室出土、刀の吊金具（金張り）

データ (A・C) 0.8, 200mA, 60kVp L H - II リス (8:1) 50cm (B) 50kVp, 200mA, 0.1sec

愛媛県放射線技師・会長 樋口忠志・同県中予部会

愛媛大学放射線部・川上寿昭技師長・同県立中央病院放射線部・渡部昇・味口博志

解する。

広口壺は2型式に分類でき、A類(140)は6号墳(118)のタイプと大差ない形態として考えられ、B類(145)は2号墳出土広口壺に統く形態として考えるものである。

e. 1号墳出土須恵器 (図版54)

部分的に擾乱されており石室内から出土として断言できないが、当墳から3個体出土し、このうち高杯(149)は器形的には4号墳A類と同形態になり、短頸壺(146・147)も4号墳B類と同形態として考えられる。

f. 5号墳出土須恵器 (図版54)

当墳の主体部は消滅しており、墳丘から検出されたものであるが、蓋(150)及び底(151)は陶邑のTK23型式に当たるもので、本調査出土のうち先行タイプとして考えられる。

(西尾)

第一表

2号墳出土須恵器観察表 (図版45・46)

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋A	1	天井部は扁平でヘラ削りをしている。 口縁端下内面には凹線により段をなす。	天井部はヘラ削りにより調整がされている。 天井部内面には、体部との境界がヘラによる凹線により明瞭である。	短頭蓋の蓋か?。
	3			短頭蓋6とセットをなす。
	2	天井部は平らでヘラ削りをし、体部との境界にヘラによる凹線が見られる。 内部に口縁部と体部の境界に鈍い凹線が見られ、口縁端は丸く仕上げている。	体部には指頭によるナデ凹線が見られる。 粘土ひも巻きあげの痕跡を残す。	杯5とセットをなす。
蓋B	17	天井の扁平部が前者より広くなり、この部分のヘラ削りは見られるが、体部及び口縁部との境界は丸くなり不明瞭である。 口縁端は丸く仕上げている。		埴丘南裾部出土。
	16	天井部中央にまみがつき、つまみの中央は凸状になる。 天井部は丸く仕上げ、ヘラ削りは見られるがシャープさはない。 口縁端は段をなす。	天井部と体部の境界は段をなし明瞭である。	埴丘南裾部出土。
杯A	4	たちあがりは内傾し、口縁端は上方へのびる。 受部先端は水平方向になり、上面には鈍いヘラ凹線が一条みられる。 底部は丸くなるがヘラ削りが見られる。	口縁及び体部はナデによる調整が見られる。	
	5	たちあがりは内傾し、先端は丸く仕上げている。 受部先端はやや外上方にのびており、上面には鈍いヘラ凹線が一条みられる。 底部は平らになり、ヘラ削りは粗く不調整のままである。	体部は指頭によるナデ凹線が見られる。 底部は、不調整により粘土ひも巻きあげの痕跡を残す。	蓋2とセットをなす。
杯B	6	口縁部は内傾し、先端はやや外上にのびている。 底部は比較的扁平になりヘラ削りが見られる。	体部はナデ調整が見られる。	蓋3とセットをなす。
	7	口縁部はやや内傾し、端面はやや外上にのびるものと尖るものがある。	底部はヘラ削りだけで不調整である。	
蓋C	8	口縁直下より体部肩面にかけてやや丸く仕上げている。 底部はヘラ削り跡が見られ、底部中央部分だけやや扁平になる。	体部にはカキ目調整が見られる。	
	9	口縁部は直立し、端面は尖っている。 体部肩面が前者に比べやや張っている。	体部から底部にかけてカキ目調整が見られ、境界は不明瞭である。	
提瓶	12	口縁部は外反し、口縁端部は段をなす。 体部両側の耳は環状である。 体部前面は丸くふくれ、背面は凹状に逆屈曲して中に入っている。	体部前面には回転を利用したカキ目調整が見られる。 (窓内での他の遺物との付着が見られる。)	

第二表

2号墳出土須恵器観察表 (図版45・46)

器形	上番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
提 瓶	13	口縁部は外反し、口縁端部は丸くなる。 体部両側の耳はカギ状に屈曲し、先端は尖る。 体部前面は丸くふくれ、背面は少しふくれ、両面ともにカキ目調整が見られる。	口縁端部側面(外面)は上下方向にヘラ調整を施している。(焼成良好)	
	14	口縁は短く外反し、端部は尖りぎみに丸くおさめている。 体部両側の耳はカギ状に屈曲し、先端は尖る。 体部前面は丸くふくらみ、背面は平らになっている。	口縁端部側面(外面)は内上方向のヘラ調整が見られる。 体部前面はカキ目調整をし、背面は叩き板による叩き目の痕跡を残す。	
横 甕	15	口縁部は外反し、口縁端部は丸くおさめる。 体部は片面だけ平らにしている。	口縁部の手法は13に同じ。 体部全面にカキ目調整を施している。	
広 口 壺	19	ラッパ状に外反する長い口頭部になり、口縁端部は丸くおさめている。 体部径より口縁径の方が若干広くなる。 口頭部には全面に文様を施しており、2条の四線で3段に区分し、櫛描き波状文を施すものであり、底部は丸く仕上げている。	体部から底部にかけて叩き板の叩き目が残り、その後カキ目が施されている。 体部及び底部内面に同心円文が残る。	
中 型 甕	20	口頭部は外反し、口端部をさらに水平方向に折りまげて、端部は上下に三角状に尖りぎみにしている。 又、口端部外面には一条の凹線が施される。	頭部はヨコ櫛調整が見られる。 体部は格子目叩きの後にヨコグシ調整が見られる。	底部欠失。 埴丘南縁部出土。
	21	口頭部のたちあがりはやや外反し、口端部は折りまげて端部上下に断面三角状の稜が見られ、折りまげた部分外面にも見られる。 頭部には櫛描き波状文を施し、肩部は丸く、底部も丸底である。	頭部外面にはヨコ櫛調整が見られる。 体部は叩き目の後にヨコ櫛調整をする。 体部内面には同心円文を残す。	埴丘南縁部出土。
土 師 器 (小 型)	10	口頭部は外反し、口縁端部は丸くおさめている。	手づくねにより作られ、全体的に肉厚になっている。	
	11	体部は凹凸が多くなり、底部はやや扁平であるものと、11は明らかに平底にしている。	頭部から口縁にかけてはナテが見られるが、体部及び底部は粗仕上げとなっている。	
土 師 器 皿	18	比較的浅い小型の皿であり、口縁部は外上へほぼ直線上にのび、口縁端部は尖りぎみにおさめている。 底部は平底をなす。	内外面ともナテ調整が見られる。 底部に糸切の痕跡を残す。	埴丘上から出土。 (平安期)

4号墳出土須恵器観察表 (図版47・48)

器形	番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯B	22 ・ 23	小型になり、短いたちあがりは内傾し、口縁先は上方へのびる。 受部は湾曲し、先端は上向きになるものと、先端が完全に外上方にのびるもののが見られる。 受部から底部にかけて全体的に丸みがかっている。 底部はやや丸みがある。	底部のヘラ削りは見られない。	杯A59は本文、出土須恵器で説明。
	24 ・ 27	たちあがりは比較的短く内傾し、口縁先は丸くおさめている。 受部上面に一条のヘラ凹線を施し、受部先端はやや上向きになる。 底部は扁平ぎみになり、体部と底部の屈曲部は丸くなる。	底部にヘラ削りが見られるが、シャープさはなく不調整のままである。	
杯C	54 ・ 57	体部と口縁部が外上方へ直線的にのびるもので、端部は丸くおさめる。 体部から口縁にかけてヘラ削りが見られる。 底部は完全に平底になり、体部と底部の境界屈曲部は丁寧なヘラ削りを施す。	口縁部及び内面にかけてヨコナデを施す。 28は体部の底部近くにヘラ削りによる湾曲が見られる。	平安期(瓦器)。
	28 ・ 29	天井部はやや丸みがあり、ヘラ削りがうすく残る。 天井部と口縁部との境界は鈍い稜をなす。 端部はほぼ垂直にのび、丸くおさめる。	上師質と見まちがう程焼成が甘い。	
蓋A	52	2号墳出土蓋No.17に同じ		
蓋B	31 ・ 34	天井部はやや丸みがあり、ヘラ削りがうすく残る。 天井部と口縁部との境界は鈍い稜をなす。	全体的に丸みがかかっており、ヘラ削りによるシャープさも見られない。	杯B・Cとのセット。
	49 ・ 50	端部はほぼ垂直にのび、丸くおさめる。 口縁端内面のかえり部にヘラ凹線一条施すものもみられる。		
蓋C	35 ・ 51	形態は蓋Bとほとんど変わらないが、天井部を平らに仕上げている。 僅かに天井中央に点状に粘土を残すものも見られる。	口縁部外面から内面にかけてヨコナデを施す。	杯B・Cとのセット。
無蓋A	36	杯部口縁はやや外方に直線的にのびる。 口縁下及び底部近くにそれぞれヘラ凹線一条施され、3区画になり、中段に櫛描き列文をめぐらす。 脚部は細くなり、3方向に2段透しを施す。 脚部中段に2条のヘラ凹線も見られる。	口縁外面から内面にかけてヨコナデを施す。 小型であるが脚部は細長く作っている。	
	37	口縁部は上方に直線的にのびる。 口縁下及び底部近くにそれぞれ強い棱を施し、3区画になり、中段に櫛描き波状文を施す。		脚部欠失。
高杯B	39 ・ 40	口縁部はほぼ外方に直線的にのびる。 端部は丸くおさめる。 口縁下に鈍い棱をなすものと、一条の凹線を施すものが見られる。 口縁部及び内面にヨコナデを施している。	40の脚部は無文になり透しも見られない。 (40のみ上師質である)	
	41			

第四表

4号墳出土須恵器観察表 (図版47・48)

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
無蓋高杯 D	38 42	ほとんどCに同じ形態であるが、口縁部がやや内湾ぎみである。 脚部はほとんど欠失しているが透しではなく、一条のヘラ回線が見られる。	杯部は全体的に丸みがあり、回線や棱は見られない	
平瓶 A	43 44	口縁部は漏斗状になり、頭部中央に一条のヘラ回線を施す。 口縁はヨコナデをする。 体部上面はふくらんで、底部も尖りぎみである。 (全体的に丸みがかっている。)	体部の調整は丁寧である。	
平瓶 B	45 46	45の口縁は長く直線的に外上にのび、口縁端下に一条のヘラ回線を施す。 口端はヨコナデをする。 46の口縁はまた短くなる。 体部上面は扁平になり、肩に棱も見られる。 46の底部は平ら部分が作られる。	体部の肩に接合痕跡を残し、ヘラ調整を施す。 底部はAほど丸みはない。 <small>45</small> 体部肩に一条のヘラ回線を施す。 <small>46</small>	
短頸壺 A	47	口縁は短く外反し、端部は水平方向に屈曲し、端はヘラにより垂直になる。 体部上面から肩部に三条のヘラ回線を施し、その間にヘラ描き斜線文も施す。 底部は丸底になり、僅かにヘラ調整が見られる。		比較的大型である。
短頸壺 B	61 62 64	口縁は短くほぼ垂直方向又は内傾ぎみになり、ヨコナデをする。 61の体部肩に張りが見られ棱をなし、62の体部肩は丸みがある。 底部は61が丸底になり、62は平底になる。	施文は見られないが、口縁はヨコナデ調整をし、体部はヨコ構状のもので調整を丁寧にしている。 64の体部上面は扁平ぎみになる。	
短頸壺 C	63	口頭は小さく、口縁はやや外上に直線的にのび、端面は水平である。 また口縁部外面には、一条のヘラ回線による棱をなす。 体部上面が広くなり、二条づつの回線を肩部にかけて3段に施し、2段目と3段目には斜線文を施す。 底部は丸底になり、体部下から底部にかけてヘラ削りが僅かに見られる。	口縁部は丁寧にヨコナデを施す。	
台付長頸壺 A	48	頭部は細長く中間部で絞り、口縁にいくに従って広がりながら外反し、先端は丸くおさめる。 体部肩及びその下に二条づつのヘラ描き回線を施し、ヘラ描き斜線文を施す。 脚部はラッパ状に開き、縁はやや内湾気味になる。 3方2段透しの下に、二条のヘラ描き回線を施す。	3方2段透しは、ヘラで突き刺しただけの簡略な透してある。	体部の肩が張りぎみで、上面がやや広くなる。

4号墳出土須恵器観察表 (図版47・48)

器形	土番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
台付広口壺A	66	頸部はラップ状になり、口縁部で大きく外反し、先端は欠失しているが水平方向になる。 口縁下から頸部に二条づつのヘラ回線が3段めぐらされ、その間に2段の斜線文を施す。 体部は丸みがかった肩とその上面に二条のヘラ回線と斜線文を施す。 やや扁平ぎみの底部に脚がつく。		脚部欠失。
	67	同種Aに比べ頸部がやや細長くなる ラップ状に開いた口縁先端に一 条のヘラ回線を施す。 二条づつのヘラ描き凹線を、口 縁下から頸部にかけては4段めぐ らし、体部上面から肩部にかけて 3段めぐらし、それぞれ櫛描き列 点文を施す。 脚部は48とほぼ同じ器形だが、 透しを三角状に穿つ。		
中型甕	60	口縁は外上には直線的にのび、 端面はヘラにより水平にカットする。 体部は格子目叩き後に、ヨコ櫛 調整を全体に施す。 体部内面には同心円文を残す。		墳丘より出土。
	68	器台瓶部であるが、三条づつの ヘラ描き回線による稜を2段づつ それぞれ区画をなし、その間に小 さな5本櫛により波状文をめぐら し、三角透しを呈す。		墳丘より出土。
土師器皿	18	小型の皿であり、体部口縁の外 傾度は大きく低い。 体部と底部の境界には鈍い稜が 見られる。	※底部に明瞭な糸切りの 痕跡を残す。 (4号墳とは無関係と考え られる。)	灯明皿か? 墳丘上出土。

6号墳出土須恵器観察表 (図版49~52)

器形	土番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯A	69	たちあがりが短く、内傾したま ま先端は尖りぎみになる。	全体的に調整が粗雑にな り焼成もあまり。	69は蓋72とセット をなす。
	70	受部は渦曲し、先端が外上方に のび丸くおさめる。		
	71	受部上面に鈍い一条のヘラ回線 を施すものがある。 底部はやや扁平になり、ヘラ削 りが見られるものもある。 体部と底部の屈曲部は鈍い稜に なる。 形態的には4号墳杯Cとほとん ど同様である。		
蓋A	72	天井部に段をつけ一段高くし、 平らになる。 天井中央に僅かに指が引っかかる 程度に粘土を残す。	口縁部内外面にヨコナデ が見られる。 焼きが甘く粗雑さを感じ る。	69とセットをなす。

第六表

6号墳出土須恵器観察表 (図版49~52)

器形	番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋 A	72	口縁部はやや内湾ぎみになり、先端は丸くおさめる。 形態的には4号墳蓋Cにほとんど同様である。		
蓋 B	73	天井部は扁平ぎみである。 口縁部と体部の境界に鈍いヘラ凹線を一条施す。 口縁部は外下に尖る。(内面はヘラにより斜めに切り、その後ナデ仕上げする。)	天井部のヘラ削りは粗く仕上げたものでシャープではない。	短頸壺の蓋か?。
蓋 C	74	天井部は粗く扁平になり、中央部に扁平な乳首形つまみがつく。		口縁部欠失。
蓋 D	82 85	天井部は僅かにヘラ削りが見られ、扁平ぎみである。 天井中央に尖ったつまみ及び乳首状のつまみをつける。 器厚は口縁先になる程肉薄になり、口縁先端は尖る。 口縁部から内面にかけてヨコナデをしている。		子持付器台。 86とセットをなす。
無蓋高杯 A	75	口縁は外上に直線的にのび、先端はヨコナデにより尖りぎみになる。 杯の体部中間及び下部に一条のヘラ凹線を施す。 杯底部は扁平である。 脚は裾に至ってラッパ状になり、端部は上下方向のヘラ調整により端部上下に稜をなす。 透しは2方向2段透しである。	杯部分の体部と底部の境界は稜をなし明瞭である。 脚部中間に二条のヘラ凹線を施す。	比較的小型の高杯である。 器形的には4号墳高杯A (No.36) と大差ない。
無蓋高杯 B	76 79	杯部口縁は外上に直線的にのび、端部は丸くおさめる。 底部はやや丸みがかっており、体部との境界に鈍い稜が見られる。 脚部は欠失しているが、透しのないものとして考えられる。 形態的には4号墳高杯C・Dと同様である。	全体的に粗雑さを感じる。	焼成は生焼きが多く、中に土師質を思われるものも見られる。
台付長頸壺 A	80	形態的には4号墳出土の台付長頸壺Aと同様である。 体部上面のふくらみがやや少い。 体部肩面下のヘラ書き斜線文は斜線の中に列点状の施しが見られ、貝類の施文具の使用か。	4号墳台付長頸壺Aに対しての手法の差は、脚部の3方透しが台形状にきっちり透している。	
壺 台付長頸壺 B	80-1	器形はやや小型になる。 体部は上面から底部にかけて丸みをもつ。 体部上面の斜線文は貝状の施文具により上下方向の直線になる。 脚部はAとはほぼ同様である。		頸部欠失。

第七表

6号墳出土須恵器観察表(図版49~52)

器形 番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
子持付器台	<p>86 器台口縁は大きく外反し、端部は上下方向のヘラ調整によりやや角張り、その後ヨコナデを内面に至って施す。</p> <p>杯の形態は小型になるが同墳出土杯Aに同様であり、口縁部に4個体着く。</p> <p>器台上面中央の子持壺は装飾そのものの要素になり極端に小型化され、長頸壺を小型化したものであり、体部上面に二条のヘラ凹線を配し、脚によって列点状に施す。</p> <p>ラッパ状になる脚部は二条づつヘラ凹線により4段にめぐらし、長方形の透しを4段3方に穿って、さらに櫛状の施文具で刺突文を施す。</p> <p>脚部はやや内湾きみになり、先端はヘラ切りにより角張る。</p>	<p>杯は口縁部に接合用粘土を着け杯を接合する。</p> <p>杯と器台の接合粘土の離ぎ目が見られる。(子持壺も同じ)全体的にナデ調整が見られる。</p>	器台そのものが小型である。

6号墳周溝出土須恵器観察表(図版49~52)

器形 番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯B	88 6号墳石室内出土杯Aと同様。 91は受部を持たない杯に類似し、底部は平らになる。		
杯C	93 たちあがりは非常に短くなり、先端はヘラにより水平になる。 受部も短く水平方向に尖りぎみになる。 体部は低く皿に近い器形をなし、底部との境界はなくなっている。	底部に僅か鋭いヘラ削りが見られる。 焼成は甘く粗雑である。	
杯D	94 体部と口縁部は外上方へは直線的のび、端は丸くおさめる。 口縁部から内面にかけてヨコナデを施す。 底部の高台は平らに円盤状になる。	焼成は甘く粗雑である。	平安期。
蓋E	87 天井部は扁平ぎみになり、鋭いヘラ削りが見られる。 天井部と口縁部の境界に鋭い棱をなし、口縁部は直線方向にのび、端部は丸くおさめる。 口縁部から内面にかけてヨコナデを施す。	天井部のヘラ削りは粗雑である。	
蓋F	97 天井部中央に低い乳首形つまみを付け乳首形つまみは凸状になる。 天井部はヘラ削りにより鋭い棱が見られる。 6号墳出土蓋Cと大差ない。		口縁部欠失。
椀	98 体部と口縁部が直線的に上方へのびる。 底部は扁平ぎみになり、ヘラ削りによる鋭い棱が見られる。	体部外面から口縁及び内面にかけて丁寧なヨコナデを施す。 底部のヘラ削りはシャープさはない。	焼成良好。
高有杯蓋	99 杯部たちあがりは短くやや内傾し、端は丸くおさめる。 受部先端はやや外上にのび丸くおさめる。	受部上面及び口縁たちあがり内面にヘラ凹線を施す。 杯部・底部のヘラ削りは粗いままでしとし、シャープさはない。	杯部鋒と脚根鋒がほぼ同じになる。

6号墳周溝出土須恵器観察表 (図版49~52)

第八表

器形	番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
高杯 A	99	体部の器高は比較的低く、底部との境界はヘラ削りによる鈍い棱が見られる。 底部は粗いヘラ削りを施す。 脚は裾に至ってラッパ状になり、裾端は段をなしへら調整により角張る。 脚中間にヘラ凹線を二条めぐらし、その上下に2段透しを2方向に呈す。		
高杯 B	100	形態的には6号墳無蓋高杯Aと同様。		杯口縁径の方が脚部径より大きい。
無蓋高杯 C	102	杯の体部上面及び底部との境界が大きく段をなすものと、鈍い棱をなすものがある。 脚部に3方向2段透しを呈す。		
無蓋高杯 D	103 105	形態的には6号墳無蓋高杯Bとほぼ同様。 口縁下に一条又は二条の鈍いヘラ凹線を施す。 脚部の透しではなく、脚中間に二条のヘラ凹線を施す。 脚は裾に至ってラッパ状になり、裾端の段は棱をなす。		杯口縁径と脚部径がほぼ同じである。
甌 A	95	口頸部は外反した上に段をなし、また外方に広がるものである。 口縁下に一条のヘラ凹線を施し、体部肩及び肩上面にも一束づヘラ凹線を施す。 体部及び底部は丸みかかっている。	口縁外側から内面にかけてヨコナデを施す。 底部の調整は粗雑である。 焼成は甘い。	器形的には古く見せているタイプとして考えられる。(淡道塙より出土)
甌 B	96	口頸部はAタイプより細く絞り長くなり、口縁に至って大きくラッパ状になるものである。 体部肩面は丸みをもち、底部は尖りぎみになる。 施文はAタイプと同様である。		
短頸壺 A	106	口頸部はやや外反し、壺部は水平方向にひねり出され丸くおさめる。 体部肩から上面にかけてヘラ凹線を四条施し、ヘラ状のもので列点文も施されている。 体部肩面から底部にかけて鈍くヘラ削りが見られ、底部は平らになる。	体部上面から口縁にかけてヨコ構状のもので調整されている。 口縁から内面にかけてヨコナデを施す。	
壺 B	107 113	口頸部は短く、垂直方向又はやや内傾する。 113のみ極端に短い口頸部になる。 体部肩面に一条又は二条のヘラ凹線を施す。 109と113は施文をしないものである。 体部肩面から底部に至って、粗いヘラ削りを施し上げとしている。 底部はやや丸みがかるものと、扁平なものになる。	口縁部から体部肩に至つてヨコナデ又はナデを施す。 ヘラ削りは粗雑でシャープさはない。	

第九表

6号墳周溝出土須恵器観察表(図版49~52)

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
長頸壺A	114 ・ 115	口頭部は若干外反しながら外上にのび、先端は丸くおさめる。 口縁から頭部にかけてヨコナテを施す。 114の体部は丸くなり、115の体部はやや肩が張っている。 両者とも肩面に一条のヘラ凹線を施す。 前者の底部は完全に平ら部が作られ、後者は肩平ぎみである。 体部から底部にかけて粗いヘラ削りを施し仕上げをしている。	ヘラ削りは粗雑でシャープではない。	
台付長頸壺A	116	口頭部は長頸壺Aと同様。 体部上面は肩平ぎみになり肩部が張る。 ヘラ凹線を肩部に二条と、体部下に一条施し、脚は裾部近くで内溝ぎみになり、鈍いヘラ凹線が二条見られる。 3方1段透しを施す。	体部肩下に貝状のもので刻み状の施文を施している。	
台付長頸壺B	117	口頭部は長頸壺Aと同様。 体部上面は丸みが見られ、二条づつのヘラ凹線が体部下面にかけて3段めぐらし、列点文を施す。 脚はラッパ状に広がり、1方向1段透しを施す。		
広口壺	118 ・ 119	口頭部は外反しながらのび、先端は水平方向にのびその近くで段をなすものである。 頭部上面に列点文を施し、頭部中間に二条のヘラ凹線を施す。 体部は肩が張りぎみになり、119は丸くなる。 体部肩から底部にかけてヘラ削りを施す。 底部は肩平ぎみであり、119は丸みの底部が考えられる。	体部及び底部のヘラ削りは粗い仕上げになり、シャープではない。	
横瓶	120	口頭部は外反し、先端は丸くおさめる。 体部は横にした卵形になる。 体部は格子目叩きが薄く残り、体部内面は明瞭に同心円文が見られる。	口縁部及び頭部にヨコナテ調整を施す。 体部は格子目叩きの後、カキ目調整をする。	
大型甕	121	口頭部は外反し、ひねり出した口縁はヘラ調整により断面三角状をなし、上方、水平方向、下方向にそれぞれ尖る。 体部はやや肩が張り、底部は丸底であるが尖りぎみになる。	体部は格子目叩き後にヨコグシ状の調整を施す。 内面に同心円文を残す。	形態的には5号墳出土甕と同じである。

8号墳出土須恵器観察表(図版53)

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯A	130 ・ 132	たちあがりは内傾し、先端は丸くおさめる。 受部は短く、先端はやや外上方に向にのび丸くおさめる。	底部のヘラ削りはシャープではない。 132の底部内面には同心円文が残される。	古く見せるタイプとして考えられる。 131は蓋123とセットをなす。

8号墳出土須恵器観察表 (図版53)

第十表

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯	130 A 132	受部上面にヘラ凹線を一条施す。 底部は扁平になり、粗いヘラ削りを施し仕上げとする。		型式的には古い特徴をもっている。
蓋	122 A 123	天井部は扁平になり、天井部と口縁部の境界に一条のヘラ凹線又は稜をなし、明瞭である。 口縁部は内湾ぎみになり、先端は丸くおさめる。 天井部は粗いヘラ削りを施す。	ヘラ削りのシャープさはない。	123は8号墳B石室より出土し、杯131とセットをなす。
蓋	124 B 125	天井部は扁平ぎみになり、粗いヘラ削りを施す。 口縁部は内湾ぎみになり、先端は丸くおさめる。 口縁部はヨコナデを施す。	天井部と口縁部の境界が不明瞭になっている。	
蓋	127 C	天井部は扁平になり、中央に低い乳首形つまみを付ける。 口縁部は蓋Bと同様。	天井部にヨコグシ状の調整を施す。 天井部と口縁部の境界が不明瞭である。	
蓋	126 D 128 129	天井部は完全に平ら部分が作られ、明瞭な稜が見られる。 口縁部は蓋Bと同様。 126のみ口縁部が垂直に下にのび、端は丸くおさめる。		
椀	133 A	体部と口縁部が内湾しながら外上にのび、口縁部はいったんふくらんでから上方に尖る。 口縁下に一条のヘラ凹線を施す。 底部は完全に平ら部分が作られ、体部との境界部分にヘラ削りを施す。	体部上面から口縁・口縁内面にかけてヨコナデを施す。	
椀	134 B 135	いったん体部は外上方方向に内湾しながらのび、口縁部が外上に直線的にのびる。 端部はヘラ調整により丸くおさめる。 口縁下に指頭による凹線又は稜をなす。 底部にやや外に張った高台をつける。	内面に暗文状の施しが見られる。 口縁部はヘラ調整後にヨコナデを施す。	瓦器
高杯	141 有蓋高杯A 142	杯部たちあがりは短く内傾し、端部は尖る。 受部は比較的短く、端は外上にややのびる。 受部上面に鈍く一条のヘラ凹線を施す。 杯底部及び脚部欠失。		
高杯	143 無蓋高杯A 144	4号墳出土無蓋高杯Cと同様。 (短脚がつく。)		
壺	139 小型壺	4号墳出土器台の子持壺と同形態。 長頸壺を小型化したもの。		

8号墳出土須恵器観察表 (図版53)

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考	第十一表
短頸壺A	136	口頸部は長頸壺の頸部が短くなつた形になる。 体部肩面がやや張りぎみに丸くなる。 底部は平ら部分が作られる。	全体的に粗雑さを感じる。	長頸壺の退化形態か。 8号墳C主体出土。	
短頸壺B	137	口頸部が短く内傾し、端部は丸くおさめる。 体部肩面が張りぎみに丸くなる。 体部下から底部にかけて粗いヘラ削りを施す。 底部は扁平ぎみになる。	ヘラ削りはシャープさは見られない。	8号墳C主体出土。	
短頸壺C	138	形態的にはC主体出土短頸壺B 137と同様。 口頸部が垂直に上方へのび、端部を丸くおさめる。	ヘラ削りはシャープさは見られない。	8号墳B主体出土。	
広口壺A	140	口頸部がゆるやかに外方に外反する。 体部は肩が張りぎみに丸くなる。 体部下から底部にかけて粗いヘラ削りを施す。 底部は扁平である。		8号墳B主体出土。 6号墳周溝出土甕 121の口縁部と同じ。	
広口壺B	145	口縁部は欠失しているが、頸部は外方に外反しながらのびる。 頸部に櫛描き波状文を施す。 体部肩は丸くなり、肩相当部に二条のヘラ凹線を施し、その下に列点文を施し櫛描き波状文もだぶらせている。 底部は尖りぎみに丸くする。		8号墳C主体出土。	

1号墳出土須恵器観察表 (図版54)

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
高杯無蓋高杯	149	6号墳出土無蓋高杯Cと同様。 体部中間と底部との境界に稜をなす。 脚は2方向2段透しを施し、脚中間部分に二条のヘラ凹線を施す。		
壺	146 147	6号墳出土短頸壺B (112・113)と同様。		

5号墳出土須恵器観察表 (図版54)

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯	150	天井部は3分の2ヘラ削りを施す。 天井中央のつまみ部が欠失している。 天井部と口縁部の境界に明瞭な稜が見られる。	器形的には初期のおもかげを残すが、ヘラ削りの範囲は狭くなり、粗雑でありシャープさは見られない。	古く見せるタイプとして考えられる。

第十二表

5号墳出土須恵器観察表 (図版54)

器形	上番号	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
杯	150	口縁内面に段をなし、端部は丸くおさめる。	焼成も甘い。	
提瓶	148	体部のみであるが、体部上面の耳は尖りぎみになる。		
大型甕	151	口頭部は外反し、口縁部は水平方向にひねり出され、端部は上下方向のヘラ調整によって角張る。 さらに口縁下に断面三角形状の段をなす。 体部はやや肩が張り、格子目叩きが明瞭に残る。 底部は丸底であるが尖りぎみである。 形態的には6号墳出土甕(121)と大差ない。		

3号墳出土土器観察表 (P-23・挿図第27図)

器形	上番号	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
土師壺	170	体部と口縁部は外方に内凹ぎみにのび端部は丸くおさめる。		焼成良好。
	171	口縁外から内面にかけてヨコナデを施す。		
	172	底部は扁平ぎみになる。		

弥生土器観察表 (図版55)

器形	上番号	出土地	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
壺形土器	152	1号墳封土中	口頭部が欠失し、体部の器形は卵形になり、タテにヘラ調整を施す。 平底をもつ。		焼成良好。
	153	2号墳封土中	複合口縁になる口縁部は内傾し、先端は丸くおさめる。 頸部ゆるやかに外反し、縱横調整を施す。 体部は細長の卵形になり、縱及び斜横調整を施す。 平底部が狭く作られる。	口縁部に横構が見られるが波状文の省略か。	
壺 棺	154	SKO 2	体部がややふくらむ器形をなし、斜グシ後に縱・横・斜にヘラ磨研を施す。	壺の口頭部及び体部上面を割って使用し、蓋も体部から割って蓋とするもの。	砂粒を多量に含む。 焼成良好。
	155	3号墳封土中	口頭部及び底部が欠失するが、体部上面の肩が張り気味になる。 長頸壺の体部か。	体部上面に縱・横グシ調整を施す。	

弥生土器観察表 (図版55)

器形	番号	出土地	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺形土器	156	3号墳封土中	複合口縁になる口縁は内湾しながら、先端は上にのび平らになる。 口縁部に七条のヘラ四線をめぐらし、その下に梅描きの山形文を格子状にグブらして施す。 大きく外反する頭部にも八条のヘラ四線をめぐらし、一定の間隔ごとに縦のヘラ四線をダブらせて施し、さらにその下部に斜四線を施す。	複合口縁のつぎ目が見られ、工程が理解できる。	大型の壺形土器になる。
器台	157	4号墳南裾	口縁部は大きく外反し、端は角張る。 内面に小さく柳描き波状文を施す。 口縁部から体部にかけて縦横調整を施す。 円筒形になる体部は、不定に18mm平均の円形透しを施す。	透しは外か内方向に透される。	
壺形土器	158	4号墳南裾	器形的には156と大差ない。 口縁部に鈍くヘラ四線が見られる。 頭部に粗い縦横文を施し、頭部下に断面三角形状の貼付突部をなし、刻目状の施しを呈す。	頭部及び口縁内面に粗い横・斜状の柳調整を施す。	
壺形土器	164 ・ 165	3号墳封土中	小破片であるが壺形土器の口縁部であり、口縁部に二条から四条のヘラ四線を施す。 爪形を施す円形浮文の貼付も見られる。		
	159 ・ 160	S K - 06	159は体部がふくらむ壺形土器の底部になり、160は僅かに上げ底ぎみになる壺形土器の底部になり、体部下に縦横調整が見られる。		
壺形土器	161 ・ 162 ・ 163	6号墳封土 ・ 4号墳封土 ・ 3号墳封土	161はかなり磨滅が著しいが、口頭部が外上にのび丸くおさめ、体部のふくらみが少ない器形になる。 162の体部はヘラ磨き後タテ刷毛目調整を施し、底部は上げ底になりくびれ部に指頭による絞りが見られ、裾が大きく広がる。 163は小型の壺になり、口頭部は外反し、先端は丸くおさめる。 口縁部はヨコナデを施し、頭部は横刷毛目調整を施し、体部をヘラ研磨する。 底部は僅かに上げぎみになる。		
	166 ・ 169	2・3・ 8号墳封土	166は杯部の口縁と体部が内湾ぎみに外上にのび、先端は丸くおさめる。 脚部は極端に杯部より大きく広がり、円形透しをする。 167・168は朝顔形に2段に口縁が広がり、体部上面は鋭い棱をなし鋭角をなす。 口縁から体部に縦ヘラ研磨をする。 169の杯の体部及び口縁は内湾ぎみに外上にのびる。 脚部の裾は広がらない。		

(第十四表)

2号墳出土装身具類觀察表 (単位mm・g)

No.	種類	高さ	直径	孔径	重量	色調	材質	備考
1	勾玉	長 24.7×14.5	厚 8.7	2.5	1.0	1.3	白透明	水晶 石室東北側 E体頭
2	耳環		15.5×15.5			0.2		" "
3	"		16.4×16.2			0.35		" "
4	空玉	5.2	5.4	2.0		1.0		2個 側着銀計13個
5	"	4.8	5.2	1.0		0.08		一部欠失
6	貝美	43.0	輪	23.0	厚	13.5		
7	"	33.0	"	21.5	"	7.5		"
8	"	30.0	"	21.5	現状	7.5		"
9	"	37.0	"	23.5	"	9.0		"
10	菅玉	15.6	5.6	2.0	1.0	0.9	暗緑色碧玉 A体頭	
11	"	15.6	5.7	2.2	0.8	1.0	"	" "
12	"	16.6	5.8	1.8		1.05	"	" "
13	"	16.0	6.0	3.5	1.0	0.95	"	" "
14	"	18.5	5.9	1.8		1.2	"	" "
15	"	18.5	6.0	2.0	1.0	1.2	"	" "
16	"	19.0	6.8	2.5	0.8	1.7	"	" "
17	"	18.0	6.9	2.0	0.8	1.6	"	" "
18	"	19.5	7.0	2.4	0.8	1.8	"	" "
19	"	20.0	6.4	2.3	0.8	1.5	"	" "
20	"	20.9	6.5	2.5	1.0	1.7	"	" "
21	"	21.4	6.3	2.0	1.0	1.7	"	" "
22	"	24.3	9.5	2.0	0.8	4.4	"	" "
23	草蛇玉	9.0	11.0	4.0	1.0	1.3	白透明	水晶 A体左手頭
24	丸玉	7.5	9.4	3.2	1.0	0.9	"	" "
25	"	7.7	9.2	3.0	1.2	0.85	"	" "
26	"	6.8	10.3	3.0		0.95	"	" "
27	"	7.6	10.6	1.5		0.96	濃青ガラス	A体頭
28	"	6.7	8.7	1.8		0.65	"	" "
29	"	5.5	9.5	2.0		0.8	"	" "
30	"	5.6	8.4	1.7		0.6	"	" "
31	"	8.5	8.6	2.0		1.0	"	" "
32	"	7.0	9.6	1.7		0.9	"	A体左手頭
33	"	8.3	9.6	1.5		0.95	"	" "
34	"	8.5	10.2	2.0		1.08	"	" "
35	"	6.4	7.6	1.2		0.65	"	" "
36	"	5.6	7.6	1.3		0.45	"	E体頭
37	"	5.8	7.3	1.2		0.45	"	" "
38	"	5.0	7.2	1.5		0.4	"	A体頭
39	"	6.0	9.5	1.7		0.75	"	" "
40	"	6.7	8.9	1.7		0.75	"	" "
41	"	8.3	8.8	1.5		0.95	"	" "
42	"	8.2	8.7	1.6		0.85	"	" "
43	"	6.0	8.7	1.0		0.65	"	" "
44	"	4.9	6.4	1.2		0.3	"	" "
45	"	4.2	6.7	1.5		0.3	"	E体頭
46	"	3.5	4.7	1.2	1.0	0.15	"	" "
47	"	4.5	5.0	1.0		0.2	"	" "
48	小玉	1.8	2.7	1.0		0.02	青	A体頭
49	"	2.0	3.5	1.0		0.06	"	" "
50	"	2.3	2.9	1.0		0.03	"	" "
51	"	2.2	3.2	0.9		0.05	"	" "
52	"	2.2	3.1	1.0		0.05	"	" "
53	"	2.2	3.1	1.0		0.05	"	" "
54	"	2.1	3.4	1.0		0.06	"	" "
55	"	2.3	2.9	1.0		0.03	"	" "
56	"	1.7	3.6	1.2		"	"	" "
57	"	2.0	3.7	0.9		"	"	" "
58	"	1.8	2.9	0.9		"	"	" "
59	"	2.0	3.5	1.3		青い青	"	" "
60	"	2.6	3.8	0.9		青	"	" "
61	"	1.9	3.2	1.2		"	"	" "
62	"	2.3	3.5	1.0		"	"	" "
63	"	2.2	2.8	1.0		"	"	" "
64	"	1.6	3.2	1.1		"	"	A体
65	"	1.8	2.7	1.0		"	"	" "

2号墳出土装身具類觀察表 (単位mm・g)

No.	種類	高さ	直径	孔径	重量	色調	材質	備考
							ガラス	A 体
66	小玉	1.8	3.1	1.2		青		
67	"	1.8	2.9	1.0		"	"	"
68	"	1.4	3.2	1.1		"	"	"
69	"	1.8	2.7	0.9		"	"	"
70	"	2.7	3.5	1.0		"	"	"
71	"	1.6	3.0	1.1		"	"	"
72	"	1.6	3.1	1.0		"	"	"
73	"	1.7	2.9	1.0		"	"	"
74	"	1.7	3.2	0.9		"	"	"
75	"	1.6	3.0	1.0		"	"	"
76	"	1.8	3.0	0.9		"	"	"
77	"	2.6	3.1	1.0		"	"	"
78	"	2.4	3.1	1.0		"	"	"
79	"	2.2	3.1	1.1		"	"	"
80	"	1.8	3.2	1.0		"	"	"
81	"	2.0	3.0	1.1		"	"	"
82	"	1.8	3.0	1.1		"	"	"
83	"	2.2	3.2	1.0	0.05	"	"	"
84	"	1.8	3.5	1.0	0.05	"	"	"
85	"	2.1	3.4	0.9		"	"	"
86	"	1.8	2.9	1.0		薄い青	"	"
87	"	2.5	3.4	1.0	0.8	青	"	"
88	"	1.4	3.0	1.0	0.03	"	"	"
89	"	1.9	3.2	1.5	0.03	"	"	"
90	"	1.3	3.0	1.3	0.02	"	"	"
91	"	1.7	3.2	1.0	0.03	"	"	"
92	"	2.0	3.1	1.2	0.03	"	"	"
93	"	1.4	3.3	1.3	0.03	"	"	"
94	"	2.4	3.2	1.0		"	"	"
95	"	1.6	3.6	1.0		"	"	"
96	"	2.0	3.9	1.2		"	"	"
97	"	2.5	3.5	1.0		"	"	"
98	"	1.6	3.3	1.1		"	"	"
99	"	1.8	3.4	1.1		"	"	"
100	"	2.0	3.3	1.3		"	"	"
101	"	2.3	3.4	1.2	0.04	"	"	"
102	"	1.8	3.6	1.2		"	"	"
103	"	1.6	3.2	1.1	0.02	"	"	"
104	"	1.9	3.4	1.0	0.03	"	"	"
105	"	1.5	3.4	1.1		"	"	"
106	"	1.5	2.5	1.0		"	"	"
107	"	2.0	3.0	1.0		"	"	"
108	"	1.8	3.8	1.1		"	"	"
109	"	1.7	3.4	1.1		"	"	"
110	"	2.2	3.4	1.0		"	"	"
111	"	1.6	3.1	0.9		"	"	"
112	"	1.8	3.1	1.1		"	"	A 体頭
113	"	1.8	3.3	1.1		"	"	"
114	"	1.8	3.5	1.2		"	"	"
115	"	2.6	3.4	1.0		"	"	"
116	"	2.1	3.5	1.1		"	"	"
117	"	1.7	3.4	1.0		"	"	"
118	"	2.3	3.2	1.0		"	"	A 体
119	"	2.3	3.1	1.0		"	"	"
120	"	2.5	3.1	1.1		"	"	"
121	"	2.1	3.4	1.2		"	"	"
122	"	1.7	3.4	1.1		"	"	"
123	"	1.1	2.8	1.1		薄い青	"	"
124	"	1.8	3.0	1.0		"	"	"
125	"	2.5	3.3	1.0	0.06	青	"	"
126	"	1.8	3.5	1.0		"	"	"
127	"	1.8	3.6	1.1		"	"	"
128	"	2.2	3.8	1.0		"	"	"
129	"	1.9	3.8	1.1		"	"	"
130	"	2.4	3.7	1.0		"	"	"

(第十六表)

2号墳出土装身具類観察表 (単位mm・g)

No.	種類	高さ	直径	孔径	重量	色調	材質	備考
131	小玉	3.1	3.0	0.8	0.04	青 青 青	ガラス	A
132	"	1.6	3.5	1.2		青 青	"	"
133	"	2.0	3.1	1.0		青	"	"
134	"	1.4	3.2	1.1		青 い 青	"	"
135	"	2.0	3.7	1.3		"	"	"
136	"	1.8	3.4	1.3		青	"	E体頭
137	"	1.4	3.4	1.1		"	"	"
138	"	2.1	3.0	1.1		"	"	"
139	"	2.2	2.7	1.1		"	"	"
140	"	2.4	3.2	1.1	0.05	"	"	"
141	"	2.0	3.3	1.1		"	"	"
142	"	2.1	3.0	1.0		"	"	"
143	"	2.0	3.2	1.1		"	"	"
144	"	1.6	3.5	1.2		"	"	"
145	"	1.5	3.4	1.3		"	"	"
146	"	2.1	3.0	1.0		"	"	"
147	"	2.2	2.9	1.0		"	"	"
148	"	1.9	3.4	1.1		"	"	"
149	"	2.2	3.5	1.1		"	"	"
150	"	2.1	3.2	1.1		"	"	"
151	"	1.8	2.8	1.0		"	"	"
152	"	1.6	2.9	1.0		"	"	"
153	"	2.1	2.8	1.0		"	"	"
154	"	1.8	3.0	1.0		"	"	"
155	"	1.7	3.7	1.2	0.05	"	"	"
156	"	2.1	3.7	1.2		"	"	"
157	"	3.1	2.7	1.1		"	"	"
158	"	1.8	2.5	0.9		"	"	"
159	"	2.1	3.1	1.0		"	"	"
160	"	2.0	3.1	1.0		"	"	"
161	"	1.7	3.1	1.1		"	"	"
162	"	2.7	3.0	1.1		"	"	"
163	"	2.2	3.4	1.0		"	"	"
164	"	2.2	3.4	1.1		"	"	"
165	"	1.8	2.5	1.2		"	"	"
166	"	2.3	3.4	1.1	0.06	"	"	"
167	"	1.6	3.5	1.2		"	"	"
168	"	2.2	3.6	1.2		"	"	"
169	"	1.3	2.8	1.0		"	"	"
170	"	2.1	3.0	1.2	0.03	"	"	"
171	"	1.7	2.9	1.1		"	"	"
172	腕鋼	71.5×62.0					銅	断面内側平坦
173	"	66.0×58.5					"	"

(第十七表)

2号墳出土鉄製品観察表 (単位cm)

No.	種類	全長	幅	厚	残存状態	備考
2号	1 大刀	120.0	4.4	0.75	完形	刀柄部 本質
"	2 油金具	5.8	4.0	0.7	" 銀銅に金塗	内端部 "
"	3 刀子	15.3	1.9	0.45	"	柄部 "
"	4 "	14.5	2.0	0.6	"	柄部 鋸角
"	5 "	10.0	1.2	0.5	刀部に欠失あり	" "
"	6 "	7.0	1.0	0.2	刀先 欠失	" "
"	7 鉄鍔	17.0	3.1	0.45	完形	
"	8 鉄斧	9.0	月部 3.2	表面部2.4×2.1	"	袋内部に本質
"	9 鉄鍔尾被式刀根	18.7	" 1.1	0.3	" 内刃	矢柄竹質上に横巻
"	10 "	18.7	" 1.1	0.3	" 片刃	"
"	11 "	17.0	" 1.0	0.35	" "	"
"	12 "	19.4	" 1.0	0.3	" "	"
"	13 "	15.6	" 1.1	0.3	刀先根側	"
"	14 "	19.1	" 0.9	0.28	完形片刃	"
"	15 "	13.0	" 1.3	0.3	" 両刃	
"	16 "	10.9	" 0.9	0.3	茎大片刃	
"	17 "	17.5	" 1.0	0.2	完形 "	矢柄竹質断面丸
"	18 "	14.7	" 1.2	0.2	" 斜刃	"
"	19 "	15.3	" 1.4	"	月部断らむ	矢柄竹質上に横巻
"	20 "	"	"	"	完形狀態	22本束で検出
"	21 "	13.9	月部 1.1	0.2	完形両刃	矢柄竹質上に横巻
"	22 "	16.2	" 1.6	"	" 跛らむ	"
"	23 "	16.0	" 1.2	"	" "	"
"	24 "	15.5	" 1.7	"	" "	"
"	25 "	15.8	" 1.3	"	" "	"
"	26 "	鏡被	現状 5.0	"	月、革、欠失	
"	27 "	革	n 2.8	"	鏡被 "	矢柄 竹質
"	28 "	n	n 2.5	"	" "	" "
"	29 "	n	n 4.1	"	" "	" "
"	30 "	n	n 5.2	"	"	矢柄竹質上に横巻
"	31 "	n	n 5.9	"	" "	"
"	32 "	n	n 8.9	"	" "	"
"	33 鏡其物	鏡板8.0×6.5	面約16.0	引手約 17.0	"	
"	34 "	n	n 7.9×7.5	n 16.0	n 17.5	
"	35 兵庫鎖	"	"	"	"	
"	36 "	"	"	"	"	
"	37 用途不明 金具	4.3	1.0	0.4	"	
"	38 社金具	6.5	"	"	完形	
"	39 "	6.6	"	"	"	鉄部分に有機質
"	40 "	6.8	"	"	"	"
"	41 貨金具	2.7	0.35	"	完形	
"	42 "	2.6	0.8	"	"	
"	43 師範	1.2	0.9	"	"	
"	44 貨金具	2.6	0.9	"	完形	植物に刺 2本
"	45 "	2.4	0.45	"	"	" 1本
"	46 銀金具	4.4	最大幅2.6	"	"	
"	47 "	5.2	n 3.5	"	"	刺金 欠失

3号墳出土鉄製品観察表 (単位cm)

No.	種類	全長	幅	厚	残存状態	備考
3号	1 刀子	現状 6.3	2.9	0.35	刀先	硝酸欠損
"	2 "	n	6.9	"	柄部	刀部 "
"	3 鉄鍔尖根	n	6.5	1.2	0.35	刀先
"	4 "	n	7.0	1.2	0.3	茎部 "
"	5 "	n	4.3	0.95	"	" "
"	6 "	n	3.8	1.3	"	" "
"	7 "	n	3.6	1.2	0.3	" "
"	8 "	n	4.0	1.1	0.2	" "
"	9 "	n	3.7	1.0	0.35	茎
"	10 "	n	2.1	0.65	"	" "
"	11 鋼先	不明	現状2.2	0.7	"	両端欠損
"	12 刀子	現状 8.2	1.4	"	柄刃の一部	刀先
"	13 不明鉄器	n	4.4	現状2.5	"	断面椭円形
"	14 "	n	4.1	n 2.8	"	"
"	15 鍔	n	5.5	n 3.4	0.35	柄着装部
S.K.	16 鉄鍔平根	n	7.1	1.8	0.35	刀部欠損
S.K.-2	17 不明	現状 15.6	1.1	0.4	一方縮欠	全長片刃状

4号墳A石室出土装飾品観察表 (単位mm・g)

(第十八表)

No.	種類	高サ	直径	孔径	重量	色調	材質	備考
1	耳環		29.5×25.7		14.9		銅	表面樹脂が剥離
2	"		30.8×28.0		14.3		銅金張	緑青が頃く
3	"		34.2×29.4		29.8		"	
4	"		32.8×29.9		29.3		"	
5	"		27.6×25.2		14.2		"	
6	"		25.8×23.2		5.7		"	
7	"		23.5×21.4		6.4		"	
8	"		23.5×22.8		7.3		"	大部分の金剥落
9	"		26.2×23.0		5.5		"	
10	"		19.3×17.0		1.7	鉄 藍色	鉄	銀状光沢
11	"		20.2×18.4		1.7	"	鉄銀張	"
12	"		18.8×16.6		1.1		銅金張	腐蝕が激しい
13	"		23.8×21.4		6.55		"	部分腐蝕
14	"		23.3×21.6		7.2		"	完全
15	"		23.0×20.5		5.7		"	腐蝕が激しい
16	"		20.0×18.6		3.05	鉄 藍色	鉄銀張	銀状光沢
17	切子	19.6	13.0	3.0	1.0	4.3 透明	水晶	右室 内
18	"	7.8	10.2	3.7	2.0	1.3 暗い赤メタウ	"	"
19	丸玉	7.0	9.0	2.0	1.0	"	"	"
20	管玉	20.0	7.6	2.0	1.0	2.2 暗いみどり	碧玉	"
21	"	18.4	7.0	3.5	1.0	1.65	"	"
22	丸瓦	7.2	9.5	1.5	0.95	暗い青ガラス	"	"
23	"	7.1	9.8	1.5	1.0	"	"	"
24	"	6.5	9.1	1.5	0.8	"	"	"
25	"	5.2	8.2	1.7	0.5	濃い青	"	"
26	"	3.8	6.4	2.0	0.2	明るい青みどり	"	"
27	"	4.7	8.5	3.8	2.8	0.75 黄みどり	"	"
28	"	4.5	8.3	2.0	0.45	濃い青	"	"
29	"	7.8	9.0	1.7		暗い青	"	"
30	"	5.0	5.0	2.2	0.2	明るい青	"	"
31	"	6.5	8.6	1.5	0.7	暗い青	"	"
32	"	6.6	8.5	1.6	0.7	濃い青	"	"
33	"	6.8	10.4	3.0	0.93	"	"	"
34	"	5.8	6.7	1.2	0.4	"	"	"
35	"	6.5	8.6	1.5	0.7	"	"	"
36	"	8.3	9.5	1.0	0.9	みどり	"	"
37	"	7.0	10.0	2.0	1.5	0.95 濃い青	"	"
38	"	8.4	9.4	2.0	0.95	暗い青	"	"
39	"	7.5	9.5	1.5	0.9	"	"	"
40	"	5.8	9.7	2.8	0.8	"	"	"
41	"	5.9	8.9	1.8	0.7	"	"	"
42	"	7.0	9.2	1.8	0.95	明るいみどり	"	"
43	"	4.0	6.6	2.8	0.25	濃い青	"	"
44	"	6.2	8.3	1.5	0.7	"	"	"
45	"	8.2	8.7	1.8	0.95	明るいみどり	"	"
46	"	6.3	8.4	1.8	0.75	濃い青	"	"
47	"	5.5	9.2	1.5	0.7	暗い青	"	"
48	"	5.3	8.2	2.0	0.6	濃い青	"	"
49	"	5.1	7.7	1.8	0.45	"	"	"
50	"	6.0	7.8	1.5	0.6	暗い青	"	"
51	"	5.4	4.4	1.8	0.2	明るい青	"	"
52	小玉	2.5	4.3	1.1	1.3	黄	"	床土 内
53	"	1.8	3.5	1.2		明るい青	"	"
54	"	1.8	3.5	3.2	1.0	みどり	"	"
55	"	2.7	3.9	1.1		黄	"	"
56	"	3.4	4.6	4.0	1.2	0.1 みどり	"	右室 内
57	"	3.9	4.0	1.2	0.1	"	"	"
58	"	2.4	4.2	1.1		"	"	"
59	"	2.0	4.1	1.2		"	"	"
60	"	2.5	4.0	1.1	0.07	"	"	"
61	"	2.1	4.2	3.8	1.0	"	"	"
62	"	2.9	4.6	3.8	1.1	"	"	"
63	"	3.2	4.8	4.0	1.2	0.07	"	"
64	"	2.4	3.8	3.4	1.0	黄	"	"

(第十九表)

4号墳A石室出土鉄製品観察表 (単位cm)

No.	種類	全長	横幅	側厚	側厚	残存状態	備考	
4号	1 銚	16.0	1.7	0.9	0.4	刃部欠損	月断面、三角形	
	2 月子	現状	9.0	2.2	0.5	口のみ		
	3 ハ	12.0	1.9	0.4	0.4	口	柄部欠損	
	4 ハ	13.5	1.4	0.9	0.4	0.3	完形	
	5 ハ	現状	11.4	1.4	0.9	0.4	0.4	刃先欠損 銅金具柄木質残存
	6 ハ	12.5	1.7	0.3	1.3	口	柄部木質残存	
	7 ハ	10.0	1.4	0.9	0.3	0.5	口	月断面柄木質残存
	8 ハ	7.6	1.9	1.2	0.2	柄部	口 不質目斜穴	
	9 ハ	5.7	1.5	1.0	0.4	口	口 残存	
	10 ハ	6.7	1.3	0.9	0.3	口	片刃	
	11 ハ	4.9	1.3	1.0	0.38	口	木質残存	
	12 ハ	3.9	0.9	0.3	0.2	刃先部		
	13 ハ	6.8	1.0	0.6	0.25	完形状態	柄部木質残存	
	14 ハ	6.6	1.3	1.0	0.2	刃先欠損	両面	
	15 ハ	11.4	1.3	1.3	0.3	口 優少欠損	柄部宛角	
	16 直刀	28.5	2.4	1.4	0.4	0.6	完形状態	
	17 鉄鍔跡被尖根	15.9	1.5	0.9	0.3	0.38	月断面	
	18 ハ	14.7	1.2	0.6	0.25	0.3	口	
	19 鉄鍔跡被尖根	14.4	1.2	0.8	0.25	0.33	口	
	20 ハ	14.6	1.2	0.7	0.3	口	二本施着	
	21 鉄鍔跡被尖根	13.5	0.9	0.6	0.25	0.25	口	
	22 鉄鍔跡被大根	現状	8.9	1.0	0.5	0.2	0.25	
	23 鉄鍔跡被尖根	16.7	1.2	0.7	0.3	刃先 口	片刃茎有機質	
	24 ハ	11.7	1.0	0.7	0.25	口	茎有機質	
	25 鉄鍔尖根	2.8	1.0	0.25	0.25	口	片刃	
	26 ハ	3.0	1.0	0.25	0.25	口	口	
	27 ハ	3.8	0.8(頭頂)	1.5(足端)	0.25	刃先部	口	
	28 輸籠被	6.6	0.8	0.3	0.35	尾端部	-	
	29 ハ	4.8	0.6	0.3	0.25	口		
	30 ハ	原被	0.6	0.6	0.25	口		
	31 ハ	尖根	2.7	1.0	0.2	刃先部	両刃	
	32 ハ	3.0	1.2	0.2	0.2	口	口	
	33 ハ	2.9	1.05	0.2	0.2	口	口	
	34 ハ	危被尖根	8.6	1.1	0.5	0.3	茎部欠損	口
	35 ハ	棘頭被尖根	6.1	0.6	0.25	頭部被		
	36 ハ	6.0	0.5	0.25	内端部欠損			
	37 ハ	6.5	0.6	0.3	口			
	38 ハ	8.9	0.5	0.25	口			
	39 銅金具	1.5	3.0	0.25		3.0×2.8 四形		
	40 ハ	3.4	3.0	0.25		3.0×2.7 口		
	41 猪	3.7	0.5	0.25	完形	中間部に木質横目		
	42 ハ	3.2	0.5	0.25	口	口		
	43 不明金具	3.0	1.0	六径0.8×0.8	完形状態	一方端部に孔あり		
	44 武藏形抜式平根	10.0	2.5	0.8	0.3	脛らみで當部不明		
	45 武藏形抜式平根	9.3	2.0	0.9	0.25	0.3	吊掛部欠損	
	46 ハ	9.7	2.2	0.8	0.25	完形		
	47 鉄鍔形抜式平根	現状	5.8	2.0	0.2	跳び欠損	跳挿左右先端欠損	
	48 ハ	6.4	2.5	0.9	0.25	0.35	口	
	49 ハ	10.4	2.2	0.8	0.2	完形状態	鷲挿左欠損	
	50 鉄鍔範被平根	11.3	3.0	0.8	0.25	0.3	直角の両面	
	51 ハ	8.8	2.9	0.9	0.3	口	口	
	52 ハ	10.7	3.7	0.8	0.25	0.3	完形状態	
	53 ハ	11.7	3.4	1.0	0.3	完形	鷲挿両面	
	54 ハ	12.7	3.4	1.0	0.4	完形状態	塞中央に横巻跡	
	55 ハ	10.1	3.2	0.5	0.3	0.5	三角形、塞木質残存	
	56 ハ	10.3	2.3	0.7	0.2	0.45	両側口先端部欠損	
	57 ハ	13.8	2.8	0.65	0.3	0.6	口 名木質横巻跡	
	58 駒頭	15.0	3.3	0.55	0.35	0.55	完形	
	59 鉄鍔	11.1	2.7	0.55	0.2	0.55	口 左刃先端欠損	
	60 駒頭一角刀平根	12.2	1.9	0.5	0.25	0.5	口 三角形	
	61 猪	19.3	3.2	0.7	0.4	完形状態	先端一部欠損	
	62 鉄斧	11.5	4.2	3.6	0.8	2.8	完形	
	63 ハ	12.0	3.5	3.0	0.8	2.3	袋部折返し作り	
	64 馬具 鞍	鍵板環	8.5	衝約16.0	引手	11.5	頭部側面缺け	

4号墳B石室出土装身具類観察表 (単位mm・g)

No.	種類	高	サ	直	径	孔	径	重	量	色	調	材質	備考
1	耳環			22.6×25.7				12.85				銅金張	石室内
2	n			復元 19.0								n	n
3	管玉	20.8		8.5	3.0	1.0	2.7	暗いみどり	碧玉			n	n
4	n	21.0		8.8	3.7	1.3	2.9	n	n			n	n
5	n	21.2		9.3	3.0	1.0	3.4	n	n			n	n
6	n	21.3		9.5	3.0	0.8	3.45	n	n			n	n
7	n	22.5		8.0	3.0	1.0	2.7	n	n			n	n
8	n	24.0		9.2	3.0	1.0	3.95	n	n			n	n
9	n	27.0		8.8	3.0	1.0	3.8	n	n			n	n
10	n	29.4		8.6	3.0	1.0	3.90	n	n			n	n
11	丸玉	8.0		8.4	1.4			0.63	黒	土製	石室床土内		
12	n	7.1		8.5	1.5			0.58	n	n		n	n
13	n	7.0		8.0	7.2	1.5		0.47	n	n		n	n
14	n	7.3		8.5	1.0			0.6	n	n		n	n
15	n	7.4		8.4	7.8	1.5		0.53	n	n		n	n
16	n	6.4		7.7	7.3	1.3		0.43	n	n		n	n
17	n	6.3		8.1	7.9	1.5		0.42	n	n		n	n
18	n	7.0		8.4		1.2		0.5	n	n		n	n
19	n	6.8		8.4	8.0	1.1		0.5	n	n		n	n
20	n	6.9		8.2		1.5		0.5	n	n		n	n
21	n	8.0		8.6	8.2	1.5		0.58	n	n		n	n
22	n	6.1		7.6	7.1	1.5		0.37	n	n		n	n
23	n	7.8		8.4		1.5		0.6	n	n		n	n
24	n	8.6		8.0		1.5		0.5	n	n		n	n
25	n	7.0		7.4		1.5		0.4	n	n		n	n
26	n	7.0		7.5		1.5		0.5	n	n		n	n
27	n	7.0		7.5		1.5		0.45	n	n		n	n
28	n	7.5		7.3		1.5		0.48	n	n		n	n
29	n	7.5		8.6	8.2	1.3		0.57	n	n		n	n
30	n	7.8			7.6		1.8	0.5	n	n		n	n
31	n	6.9		8.2	7.3	1.5		0.4	n	n		n	n
32	n	6.2		7.9	7.4	1.5		0.4	n	n		n	n
33	n	6.4		8.7		1.3		n	n			石室底土内一部欠	
34	n	6.4		7.8	7.0	1.5		0.4	n	n		石室	内
35	n	7.4		8.2	7.9	1.4		0.55	n	n		n	n
36	n	6.5		8.2	7.6	1.5		0.5	n	n		n	n
37	n	6.8		7.5		1.5		0.45	n	n		n	n
38	n	7.6		9.2	8.4	1.8		0.65	n	n		n	n
39	n	6.9		8.5	8.0	1.5		0.6	n	n		n	n
40	n	6.3		8.3		1.3		0.5	n	n		n	n
41	n	7.3		8.1	7.7	1.5		0.5	n	n		n	n
42	n	7.2		8.3		1.5		0.55	n	n		n	n
43	n	7.5		8.3	7.9	1.0		0.55	n	n		n	n
44	n	6.8		8.0		1.2		0.5	n	n		n	n
45	n	7.3		8.2		1.2		0.53	n	n		n	n
46	n	7.3		8.3		1.4		0.55	n	n		n	n
47	n	7.4		8.5	8.2	1.2		0.6	n	n		n	n
48	n	7.3		8.9	7.7	1.3		0.53	n	n		n	n
49	n	7.2		8.9		1.5		0.68	n	n		n	n
50	n	6.5		8.0	7.3	1.1		0.4	n	n		n	n
51	n	7.1		8.1	7.3	1.2		0.45	n	n		n	n
52	n	7.1		8.0	7.4	1.5		0.55	n	n		n	n
53	n	6.8		7.7	7.4	1.3		0.45	濃い青	n		床土	内
54	n	6.0		7.2	6.7	1.0		0.42	n	n		n	n
55	n	7.0		8.5	7.8	1.2		0.5	黒	n		石室床土内	
56	n	7.1			7.9	1.1		0.5	n	n		n	n
57	n	7.7			7.6	1.5		0.64	n	n		n	n
58	n	7.5			8.1	1.1		0.65	n	n		n	n
59	n	7.2			8.2	1.2		0.55	n	n		n	n
60	n	7.3			8.0	1.2		0.55	n	n		n	n
61	n	5.2		8.4	7.4	1.5		0.28	濃い青	ガラス	床土	内	
62	n	4.8		5.6	4.6	1.3		0.3	n	n		n	n
63	n	4.3			5.4	1.5		0.45	n	n		n	n
64	n	7.3		8.1	7.8	1.2		0.5	黒	土製	石室床土内		
65	n	7.4			8.3	1.2		0.6	n	n		n	n

4号墳B石室出土装身具類觀察表 (単位mm・g)

No.	種類	高さ	直径	孔径	重量	色調	材質	備考	第
66	丸玉	6.8	7.9	1.3	0.5	黒	ガラス	石室床土内	二
67	小玉	2.2	4.7	1.7	0.08	黄	ガラス	石室	十一
68	"	2.8	4.2	3.8	1.2	明るい青	"	"	
69	"	2.2	3.5	1.2		黄	"	"	
70	"	2.2	4.0	1.2		黄	"	"	
71	"	5.5	5.0	3.0	1.8	青みどり不透明	"	ガラス鑑看	
72	"	4.0	4.8	1.5	0.12	"	"	"	
73	"	2.5	4.0	1.0		"	"	"	
74	"	2.2	3.7	1.2		"	"	"	
75	"	2.3	3.4	1.0		"	"	"	
76	"	2.8	3.9	1.0		"	"	"	
77	"	3.4	4.6	1.2		"	"	"	
78	"	2.5	3.8	3.3	1.1	"	"	"	
79	"	3.1	3.2	1.0		"	"	"	
80	"	2.6	4.2	1.0		"	"	"	
81	"	1.8	3.7	1.1		"	"	"	
82	"	3.0	3.6	1.0		"	"	"	
83	"	2.1	3.5	3.2	1.5	薄い青透明	"	"	
84	"	1.5	3.8	3.5	1.2	濃い青	"	"	
85	"	2.0			3.5	1.1	"	"	
86	"	2.6	4.2	1.4	1.0	0.06	"	"	
87	"	2.3	3.8	1.2		"	"	"	
88	"	2.4	3.7	1.1		"	"	"	
89	"	1.8	3.2	1.2		暗い青	"	"	
90	"	2.3	3.6	1.2	1.0	"	"	"	
91	"	1.9	3.3		1.0		"	"	
92	"	2.2	3.9		1.2		"	"	
93	"	2.3	3.8		1.2		"	"	
94	"	2.3	3.4		1.2		"	"	
95	"	4.2	4.1	3.2	1.1	みどり	"	"	
96	"	3.9	4.3		1.0	"	"	"	
97	"	2.4	4.4		1.5	"	"	"	
98	"	2.4	4.3		1.4	"	"	"	
99	"	2.2	3.0		1.0	黄	"	"	
100	"	3.1	2.9		0.6	"	"	"	
101	"	3.5	3.4		1.1	"	"	"	
102	"	3.2	3.3		1.0	"	"	"	
103	"	3.1	3.5		1.1	"	"	"	
104	"	2.9	4.8		1.4	"	"	"	
105	"	2.5	4.5		1.0	"	"	"	
106	"	2.4	4.0		1.1	"	"	"	
107	"	3.1	4.2		1.5	"	"	"	
108	"	2.5	3.7		1.0	"	"	"	
109	"	2.1	3.8		1.1	"	"	"	
110	"	2.0	3.2		1.1	"	"	"	
111	"	2.6	3.3		1.1	"	"	"	
112	"	2.3	3.4		1.0	"	"	"	
113	"	2.2	3.0		1.0	"	"	"	
114	"	1.9	3.6	3.3	1.1	"	"	"	
115	"	1.9	3.2		1.0	"	"	"	
116	"	1.9	3.2		1.1	"	"	"	
117	"	2.1	3.0		1.0	"	"	"	
118	"	2.2		3.1	0.8	"	"	"	

4号墳B石室出土鉄製品観察表 (単位cm)

No.	種類	全長	(mm) 幅(横)	(mm) 厚(横)	残存状態	備考
4号B	1 刀子	14.7	1.6	0.8	0.35	0.4 完形
"	2 "	7.3	1.4	0.7	0.2 月牙欠損	両開柄木質残存 柄先角
"	3 "	6.6	1.0	0.6	0.2 0.25 完形	両開
"	4 "	7.2	1.4	0.7	0.3 月牙約1欠損	両開柄面角
"	5 鉄鍔輪底板尖根	14.3	1.1	0.7	0.25 0.3 完形状態	基削木質残存
"	6 鉄鍔輪底板尖根	15.9	1.2	0.7	0.25 0.3 完形	両開柄木質残存
"	7 鉄鍔輪底板尖根	13.1	2.8	0.8	0.2 0.3 完形	直角開基木質残存
"	8 鉄鍔平根	12.2	1.2	0.7	0.2 完形状態	基木質残存
"	9 "	11.0	3.4	0.7	0.25 完形	両開基木質残存
"	10 鉄鍔平根	12.8	3.0	0.7	0.25 完形状態	基木質残存
"	11 "	10.6	3.3	0.7	0.25 完形	"

(第二十二表)

6号墳出土装身具類観察表 (単位mm・g)

No.	種類	高さ	直 径	孔 径	重 量	色 調	材 質	備 考
1	耳環		28.7×25.2		8.90		銅 金 張	
2	"		30.0×27.0		12.65		金	状態良く若不明
3	"				現状2.4		銅 金 張	方端部欠損
4	"		30.7×27.4		5.15		"	大部分の金剥げる
5	銅鏡片		想定	11.0				
6	玉	1.6	12.7	6.5		茶褐色	琥珀	石室内一部欠損
7	"	17.8	11.3	7.9	2.0	1.1	"	" "
8	切子	18.8	10.5	10.0	4.0	1.0	2.75	透明水晶
9	丸玉	6.8	8.0		1.0	0.4	黒土	土製
10	"	5.0	8.0		1.5	0.38	"	"
11	"	6.3	7.8		1.2		"	" 破損品
12	小玉	2.6	2.7		1.1		みどりガラス	"
13	"	2.1	3.1		1.1	明るい青	"	"

6号墳出土鉄製品観察表 (単位cm)

No.	種類	全長	(左)幅(側)	(右)幅(柄)	残存状態	備考
6号	1 刃子	現状	9.8	1.9	0.5	刃部分
"	2 "		13.8	1.8	1.1	0.3 0.35
"	3 刃部	現状	4.2	1.6	0.45	完全状態
"	4 " 柄部	"	2.6			刃先部
"	5 "	"				柄部のみ
"	6 "	"	7.7	1.0	0.9	0.2 0.3
"	7 "	"	7.8	1.1	0.8	0.3 0.45
"	8 "	現状	8.0	1.4	0.8	0.35
"	9 刃部	"	4.0	0.6		柄先端欠損
"	10 鉄鍔尖根	"	4.0	1.1 (裏面)	0.2 (施被)	刃先部
"	11 "	"	3.8	1.3	0.25	両刃
"	12 "	"	3.6	1.4	0.7	0.34
"	13 "	"	6.3	1.3	0.8	0.35 0.35
"	14 鉄鍔鍔頭被尖根		15.6	1.3	0.7	0.35 0.4
"	15 "	"	11.3	1.3	0.65	完全状態
"	16 鉄鍔頭被平根		10.3	2.9	0.7	0.3 0.4
"	17 鉄鍔茎		4.7		0.9	0.35 壁片
"	18 "	現状	3.0		0.7	0.3 0.3
"	19 "	"	3.0			0.3 0.3
"	20 "	"	3.5			0.3 0.3
"	21 "	"	4.8		0.7	0.3 0.3
"	22 鉄鍔頭被	"	6.9		0.6	0.3 0.3
"	23 鉄鍔頭被	"	6.8		0.7	0.25 0.25
"	24 鉄鍔	"	3.0			0.3 0.3
"	25 "	"	3.2			0.3 0.3
"	26 "	"	3.0			0.3 0.3
"	27 "	"	4.2			0.3 0.3
"	28 鍾	"	4.0	2.2		0.3 鍾先片
"	29 鍋	"	2.8			0.4 完形

8号墳A石室出土装身具類觀察表(単位mm・g)

No.	種類	高サ	直径	孔径	重量	色調	材質	備考
1	耳環		28.0×25.0		6.6		銅金張	既錆あり
2	"		28.0×26.0		7.0		"	"
3	"		29.0×26.5		15.7		銅	
4	"				現状1.8		金	芯なく管状
5	"		29.1×26.4		17.3		銅	腐蝕あり
6	"		29.7×27.2		16.3		銅金張	約半分空欠損
7	"		31.3×29.0		17.9		銅	腐蝕あり
8	"		26.3×23.0		5.8		銅金張	"
9	"		26.5×23.6		7.15		"	"
10	"		25.8×23.8		6.8		銅	腐蝕激しい
11	"		24.8×22.2		10.0		銅金張	腐蝕あり
12	"		26.8×23.5		14.9		"	"
13	"		27.2×24.4		14.95		"	"
14	"		27.2×23.6		8.4		銅	腐蝕激しい
15	"		22.2×20.4		7.75		銅金張	状態良
16	"		22.3×21.0		9.55		"	"
17	"		22.8×21.3		6.95		"	腐蝕あり
18	トンボ玉	9.3	10.0	2.8	1.08	黄にみどり目玉	ガラス	石室内
19	"	10.6	11.4	2.27	現状1.52	青みどりに黄玉	"	石室内欠損
20	東玉	13.6	12.7	10.0	3.0	茶褐色	琥珀	石室内
21	"	18.7	12.8	10.4	2.1	黒	"	"
22	"	22.1	16.2	11.3	2.5	茶褐色	"	"
23	"	31.6	17.5	15.2	3.0	現状4.63	茶	石室内一部欠損
24	丸玉	8.0	10.9	4.0	3.2	1.47	薄いみどり	滑石
25	"	6.8	10.0	3.0	2.0	1.33	白みの黄	"
26	"	8.5	10.6	3.0	2.5	2.22	白	"
27	"	8.6	10.8	3.0	2.2	1.77	白みの黄	"
28	"	10.5	15.0	10.5	15.0	3.8 3.0	みどり銀色あり	"
29	"	5.5	8.8	3.0	2.5	0.97	銀芯みどり	"
30	"	4.9	9.2	3.0	2.5		みどり	"
31	"	6.2	9.3	2.8	2.0	1.2	白	"
32	"	4.8	10.3		2.1		白みの黄	"
33	"	6.5	10.3			1.31	薄いみどり	"
34	"	5.2	8.2	2.8	2.0	1.07	みどり白	"
35	"	4.1	8.4	4.5		0.47	みどり	"
36	"	4.6	8.8	4.0	3.5	0.9	薄いみどり白	"
37	"	4.3	8.6	4.3	3.5		薄いみどり	石室内現状計測
38	"	4.4	8.5	3.2	2.8	0.38	白	"
39	"	4.5	8.5	4.5		0.63	薄いみどり	"
40	"	3.4	8.3	3.0			"	"
41	"	6.5	7.1	2.0	1.7		みどり黄	"
42	"	3.9	6.9	3.5	3.0		白みの黄	石室内半数
43	"	5.6	9.1		2.7		黄みどり	"
44	"	6.6			2.2		白みの黄	"
45	"	4.0			約5.0		"	"
46	"	5.2					土製状黄	"
47	"	6.0					外白内黄 内裏みどり	"
48	中玉	3.1	4.8	1.2	0.12	濃い青	ガラス	石室内
49	丸玉	4.8	6.4	5.9	1.5	0.28	滑石	"
50	"	4.5	6.9	1.8	1.5	0.3	"	"
51	"	6.0	8.3	2.0		0.6	"	"
52	"	6.2	8.2	7.5	1.1	0.67	"	"
53	"	4.5	7.3	1.6		0.35	"	"
54	"	6.8	5.9	6.9	5.6	2.5	0.36	"

(第二十四表)

8号墳A石室出土鉄製品観察表(単位cm)

No.	種類	全長	刃幅	刃厚	柄	残存状態	備考
8号	1 細	22.2	2.1	0.6		完形	柄部鹿角
"	2 "	現状	4.7	0.9	0.25	刃先欠損	" "
"	3 刀子	"	8.3	1.0	0.4	刃部	
"	4 "	"	9.6	1.6	0.3	0.8	0.25
"	5 "	"	10.7	1.6	1.2	0.25	0.25
"	6 "	"	11.5	1.6	0.4	刃先部欠損	
"	7 "	"	12.3	1.3	0.3	刃先部 "	柄、木質残存
"	8 "	"	12.8	1.1	0.8	0.32	0.25
"	9 "	"	15.2	1.4	0.35	"	"、鹿角
"	10 直刀	現状	19.0	2.5	0.5	刃部約十	
"	11 "	"	21.7	2.9	1.8	0.5	0.9
"	12 "	"	10.0	2.3	1.5	0.48	0.45
"	13 鉄劍頭状平根	"	5.0	2.5	0.4	茎部欠損	腹块左右欠損
"	14 " 宽被式 "	"	9.8	3.6	1.0	0.4	0.5
"	15 " 鹿頭式 "	現状	10.6	4.6	0.7	0.5	0.55
"	16 " 三角名式 "	"	12.7	3.1	0.5	0.5	0.5
"	17 " 鹿頭式 "	"	12.9	2.8	0.6	0.4	0.6
"	18 " " "	現状	7.0	3.1	0.5	0.4	0.35
"	19 鉄斧	"	11.4	4.2	3.2	1.0	2.4
"	20 錄	"	19.5	3.3	0.5	"	袋部鋸目なし
"	21 "	"	24.6	4.2	0.8	先端部欠損	全体に凹凸らむ
"	22 刀子、片	"				柄端部	目打及び木質残存
"	23 柄、金具	"				断片	内部木質
"	24 不明金具	"	2.7	0.9	0.9	完形	管状に木質残存
"	25 刀子、柄	現状	3.9	1.5	"	断片	柄に木質残存
"	26 " "	"	3.0	1.2	0.6	"	周圍、柄木質残存

8号墳B石室出土装身具類観察表(単位mm・g)

No.	種類	高さ	直径	孔径	重量	色調	材質	備考
1 耳環		約20.0×18.0			現状 0.8		銅	腐蝕激しい
2 "		20.0×19.6			1.25		"	"
3 小玉	1.3	2.7	1.0			青	ガラス	石室内
4 "	2.1	3.3	1.0			"	"	"
5 "	2.1	4.1	3.8	2.0		濃い青	"	"
6 "	2.8	4.1	3.9	1.1		"	"	"
7 "	2.6	4.7	1.7			青みどり	"	"
8 "	3.7	4.2	3.9	1.2		"	"	"

8号墳B石室出土鉄製品観察表(単位cm)

No.	種類	全長	刃幅	刃厚	柄	残存状態	備考
8号B	1 刀子	現状	7.3	1.2	0.2	一部欠損	柄、木質の上に鹿角
"	2 鉄片	"	5.9	0.7	0.6	塞部	竹質の上端巻

8号墳C石室出土装身具類観察表(単位mm・g)

No.	種類	高さ	直径	孔径	重量	色調	材質	備考
1 耳環		26.0×22.6			5.7		銅	金張、金張僅少残る
2 小玉	2.2	3.2	1.1			みどり	ガラス	石室内
3 白玉状	3.4	4.0	1.1			赤茶	"	"
4 "	2.5	3.6	3.2	2.0	1.5	"	"	"
5 小玉	2.5	5.0	1.7		0.08	濃い青	ガラス	"
6 "	1.9	2.8	1.1			青みどり	"	"
7 "	1.9	3.0	2.8	1.0		"	"	"
8 "	2.5	3.3	1.0			みどり	"	"
9 "	2.5	3.7	1.4			青みどり	"	"

8号墳C石室出土鉄製品観察表(単位cm)

No.	種類	全長	刃幅	刃厚	柄	残存状態	備考	
8号C	1 鉄劍頭状平根	12.3	2.4	0.7	0.3	0.35	另一部欠損	直角両側
"	2 鉄劍片	4.0				0.7	茎部分	竹質上に横巻
"	3 錄						鍼先端部	

(池田)

VI 総括

1. まとめと若干の考察

第25表 東山鶴が森古墳群の構成

遺構名	墳丘(直径)	石室形態	主軸角度	開口方位	石材使用法	石材種類	床面施設	閉塞施設	外周施設	状態
1号墳(A主体)	11m	竪穴式石室	建北	——	横積	割石	玉石敷	——	——	全壙寸前
" (B主体)	——	"	N44°E	——	——	——	"	——	——	"
2号墳	13m	横穴式石室	N53°52' E	西南西	小口石積	割石	"	土と石	——	良好
3号墳	12m	竪穴式石室	112°30' E	——	基底接続	"	"	——	——	床面のみ
4号墳(A主体)	13.7m	横穴式石室	N31°11' E	東々西	横積主体	"	板石+玉石	土と石	開溝	半壙
" (B主体)	上記の中	"	N47°E	西南西	"	"	玉石	"	"	"
5号墳	19m	"	N2°11'W	南々西	"	"	玉石と一部割石	"	"	"
8号墳(A主体)	14m	"	N26°4'40'E	"	"	"	玉石と一部小角運	"	——	"
" (B主体)	上記の中	"	N47°W	西南西	小口石積	"	玉石	"	——	"
" (C主体)	——	——	——	——	——	——	"	——	——	全壙寸前

当古墳群の調査は1978年～1979年の2か年に亘って、2回の実働100日余りをかけて実施したものである。本調査地は全体的に緩斜面となり、各墳丘の大半の封土は流失または2次・3次的開墾により、当初の地形は大きく変貌していた地域と言える。これまで当調査地には3基の古墳の存在が知られていたが、全面調査することによって1～8号古墳の外、木棺墓、壺棺墓等の検出を見たものである。

1号墳については、主体部が全壙及び全壙寸前の状態であったことから、本文で前述した域を出ない状況であるが、石室掘り方及び基底石の配置等により竪穴式石室としての要素が強く、2石室を同時期に構築したものとして解される。さらに古墳石室内からの出土の要素が強いと考えられる無蓋高杯は4号墳出土高杯A類に、短頸壺も4号墳出土短頸壺B類に同形態として分類できることにより、4号墳と平行する時期として考えられるが、当墳の築造時期については資料不足のためさし控えるものである。

2号墳は当調査地区中唯一の処女墳であった。当墳の石室形態は外面的には竪穴式を思わずが横穴式石室になり、羨道部のほとんどが省略化され、玄室相当部に直接閉塞施設をなすもので、入口相当部は閉塞石を側壁の中にはさみ込む形状に閉塞をするものである。また、石室の構築は小口の割石を中心に側壁を積み、天井石は緑泥片岩系の大きな板石を使用し、石室床面施設は小粒の玉石(川原石)によって敷くものであった。次に石室床面から検出された6体分の歯牙は、ほぼ原位置として考えられ、A体(成人男子)は石室内状況により最後に被葬されたものであり、先の被葬者が整理されたものとして解される。これらの外、出

上遺物から比較的短期間に追葬されたものと推察される。また、石室内出土の直刀（120cm）は当平野最長クラスになり、X線撮影により目釘穴の発見の成果を得た他、前述のことく一括の副葬品の出土がみられ、杯・蓋・広口壺等は陶色のTK209型式の平行期として考えられ、本墳の築造時期を後述する土器相対により陶色の2期終末の形態を示すが、若干の地域差が考えられることにより、7世紀初頭期として位置づけられるものである。

3号墳は1号墳同様に全壊寸前の状態であったが、石室床面から成人男子

（熟年）の大腿骨や歯牙と数点の椀や鋤・鉄鎌等が検出され、石室形態は残された基底石の配置や石室の掘り方によって竪穴式石室の要素が濃いと考えられるものである。築造時期については出土した土師器椀が少數であると共に土師器の形式的年代の特徴も少なく、今後の調査研究に期するものである。

4号墳は別表に示すように石室形態は横穴式石室であり、外部に周溝をもち、同一墳丘に2石室を同時構築し、A主体の西側面にそって小規模のB主体を構築したものであり、その平面プランはA主体が羽子板状を示し、B主体は一見竪穴式石室の様相であるが、明らかに長方形状プランには玄門部の区切りを行い南面に閉塞するものであり、両者とも玄門部袖の省略化が見られ、群集墳盛期の形態に対し異り退化プランとして考えられる。石室床面施設は第2章に記述したように基底に玉石を敷き、その上に板状の割石（20cm～30cm）を敷き、さらにその上に玉石敷きをなす3段構成であるが、板状の割石面から規則的に耳環が検出されていることによりこの面での第1次埋葬が考えられるが断言はできないもので、その上面の玉石面からの落ち込みとして解する考え方が妥当かもしれない。ただ漢道部においては追葬時に明らかに閉塞近くの漢道部が広げられており、その部分に築造当初と考えられる旧状の漢道が見られることにより、これらは追葬時の築直しとして解される。また、漢道内に溝を掘り、石を並べた排水溝が作られていることを含め、石室内の3段構成による石敷よりも排水に対する古墳作りの設計者が配慮したものと考えられる。

次に4号墳出土の須恵器は、第3章にそれぞれ形態的に数型式に分類したが、各器形ともヘラ削りは粗くシャープさが見られないものであり、高杯、平瓶、短頭壺、台付長頭壺等の施文は、ヘラ回線、ヘラ描き斜線文・櫛状の施文具による列点文を施す共通点が多く見られ



第55図 4号墳A石室漢道部

た。また、この他高杯（B類）に古い要素を受け継ぐ波状文の施文が見られた他に、杯A類、蓋A類は古い器形を残しているが、他のものと大きく時期差があるとは言いたいものであり、これら一括して陶邑の編年で言うTK217型式の相当期として考えられ、本墳の築造時期を7世紀の第二4半期に築造し、7世紀中葉期までを追跡期として解するものである。

6号墳の石室形態は横穴式石室であるが、その平面プランは4号墳の設計者と同一者を思わず程類似し、4号墳と同じく羽子板状のプランをなし、玄門部の東面角に大きな玄門石が縦に据えられ、この部分から羨道にかけて絞り気味にするプランである。また、石室内は奥室と前室に区画されるが、断面的には前室部より奥室部を1段（20cm）高くし、被葬部への配慮が見られるが、羨道部から前室にかけては先述したように奥室を含め前室より高くなるものであり、羨道部の排水施設はしないものである。なお石積みは4・6号墳とともに横積みを基調とし、石材は当平野の群集墳盛期の石材に対し明らかに巨石が使用されているもので、石室を永久強固なものにしている。

次に出土した須恵器類のほとんどが先述のように4号墳出土のものと、その手法及び施文器形ともに同形態として当てはめられた。また、同墳周溝出土の須恵器類は石室内出土の

ものと同形態になるものであり、これら一括して石室外副葬として解するものである。なお同周溝出土高杯C類の中で、石室内出土の高杯片と一致し復原をみている。

以上のことから本墳の築造時期を4号墳と同時期のものとして解するものであり、さらにこれらのことにより、4・6号墳出土の須恵器の各型式と石室形態は、当平野における終末期の型式として解するものである。

次に5号墳及び7号墳は、明らかに外部施設とする周溝や地山整形が見られた。



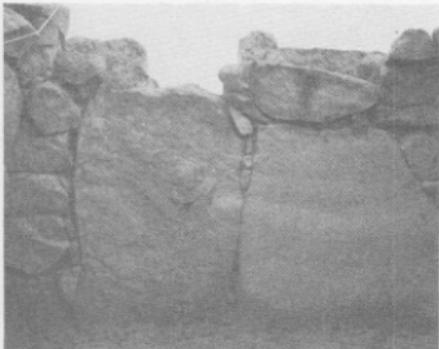
第56図 6号墳床面施設



第57図 6号墳羨道部



第58図 8号墳検出状況



第59図 8号墳A石室奥壁部

8号墳の石室形態は横穴式石室の両袖型式になり、特筆すべきものとして、石室内に石材の旧状の抜き跡が検出され、これにそって奥壁部にも明らかに大きめの奥壁に比べ、その延長部奥壁のみ小さい割石が詰め込まれており、石室が広められている形跡が認められ、古墳の設計者による何らかの要因が考えられるものであり、後日、機会があれば当墳の尺度等について追究したい。また、当墳のA主体とB主体は同時構築であり、造構の切り合い関係によりC主体のみ先に築造されたものである。

次に当墳からの出土須恵器は杯A類、蓋A類はTK209型式に平行する時期であり、当墳の先行タイプとして考えられるが、他の器形に蓋B・D類及び有蓋、無蓋高杯は、4号墳出土蓋C類や同墳出土無蓋高杯C・D類等に比定され、TK217型式に至る型式が見られることにより、本墳の築造時期を7世紀前葉に築造し、7世紀中葉期までの長期間の追葬期として解するものである。なお本墳出土椀類及び4号墳出土杯D類は、平安期に属する瓦器であり、明らかに石室内から出土していることにより、これも何らかの要因が考えられ、今後の研究を待つものである。

最後に調査及び本書作成にあたって、厳しく直接指導下さった京都市埋文研究所調査部長田辺昭三氏はもとより、御助言・激励下さった国立奈良文化財研究所・工芸普通室長、滋賀大学・小笠原好彦教授及び地元考古学関係者、また、本古墳群検出の人骨については気持ちよく調査研究下さった徳島大学・山田正興教授外、愛媛大学医学部・四宮孝昭教授、鉄器・X線については同大放射線部・川上寿昭技師長、樋口忠志技師会々長、県立中央病院・渡部昇氏、味口博志氏、戸梶医院長、鶴居産業株式会社等並々ならぬ御助力下さったことに感謝申し上げます。

(西尾幸則)

2. 東山鳶が森古墳群発掘調査の成果——須恵器の検討——

当古墳群の発掘調査に関する成果は、すでに本書の各章で詳細に報告されているが、発掘調査に参加した者の一人として、調査結果に対する一、二の雑感を述べておきたい。

今回発掘調査した古墳は計8基だが、このうち2・4・6・8号の各古墳から、それぞれ相当量の須恵器が一括出土した。これらの一括須恵器は、各古墳の築造年代を推定する上で有力な根拠を与えるものであり、その編年的位置を明らかにすることは、今回の調査における重要な課題の一つであろう。そこでまず、この点について若干の私見を披瀝しておく。

2号墳は東山鳶が森古墳群中唯一の処女墳であり、主体の石室内より16個体、墳丘上より5個体分の須恵器が出土している。石室内には計6体分の人骨が検出されており、古墳築造後に複数の追葬がおこなわれた可能性が強い。石室内須恵器には広口壺、横雲、提瓶、有蓋短頸壺、蓋杯の各器形を含むが、それらの型式的特徴を検討した結果、すべて同一型式内に属するものと判断し得た。

2号墳石室内的須恵器のうち、広口壺は頸部にめぐらした3段の波状文帯や形態そのものに、他の器形とくらべてやや先行する型式の特徴をもっているが、先行型式の特徴が後出型式にまで残るケースは極く一般的な現象であり、その意味で他の器形と強いて分離する必要はないだろう。むしろ器形の組合せから考えて、他に壺形の器形が見当らないことも考え合わせれば、これを一括須恵器群中の一つとしてよいだろう。

蓋杯は、形態上群集墳盛期のそれと大差ないが、杯身底部や杯蓋天井部の箇削りは粗く、底部は不調整が目立つ。これは明らかに後出の手法上の特徴である。横雲は群集墳終末期の頃に現われる形態上の特徴をもっている。以上の所見をふまえてこの一括須恵器の年代を位置づけるとすれば、7世紀の第一4半期の製品と考えられる。大阪・陶邑古窯址群における須恵器編年に対応させるとすれば、II期終末の型式に相当するものだが、群集墳の終末期のずれなどにもとづき、実年代については彼我に若干の差異が生じるのは当然である。なお、2号墳墳丘上から出土した杯蓋(16)は陶邑編年のI期末に対応する古い型式的特徴をもっており、これは石室内的須恵器とは別に考えるべきものである。また甌(21)についても同様である。

次に、4号墳の石室内一括出土須恵器は総計38個体あり、その内訳は蓋、有蓋短頸壺、古付長頸甌、平甌、蓋杯、高杯などの各器形をふくむ。この一括須恵器中には、平安時代まで下る杯身3個があり、これは分離して扱うべきものである。まず蓋杯だが、杯蓋(52)、杯身(53)には陶邑編年のII期後半の型式に共通する特徴をもっており、その他の須恵器とは型式的に先行する。52・53を除く他の蓋杯は、いずれも宝珠つまみ出現前のII期の形態をとるが、杯身の底部や杯蓋天井部の調整は不十分で、箇削りの範囲は狭くかつ粗い。また杯身(22・23)のうちには、明らかに宝珠つまみのつくIII期の杯と共に伴する形態のものもあり、



第60図 天山古墳群

その編年上の位置は陶邑III期前半の型式に対応するものと考える。

蓋杯以外の器形では、陶邑III期に入って初現する長頸瓶や平瓶を伴っており、高杯も矮小化し退化傾向を示していることからも、蓋杯から得られた見解と矛盾しない。平瓶（45・46）の形態は、この器形の初現型式のものよりはほぼ一型式後出の特徴をもっており、陶邑III期前半の型式としては新しいものに属すると考える。

6号墳石室内出土の一括須恵器も、型式編年上の位置は4号墳と一致する。蓋杯、高杯などの形態や製作手法上の特徴は、4号墳のそれと全く共通しており、特に台付長頸瓶は同一窯の製品と思われるほど共通点が多い。子持器台の杯部にのっている蓋杯の蓋には、宝珠つまみの先駆形態とみられる乳首形のつまみがつく。

6号墳周溝からも多数の須恵器が出土しているが、その大多数は石室内から出土した須恵器と同一型式に属するものである。

8号墳石室内出土の須恵器は、器形の種類が少なく、個体数も少ないので詳しい検討は控えるが、蓋杯を見るかぎり、2～3型式にまたがるものと思われる。概して4、6号墳の須恵器よりは型式上先行するが、小型高杯（143・144）は陶邑III期に対応するものであることは間違いない、長期間に数次にわたって追葬がおこなわれたものと推測される。

このほか、5号墳出土の甕（151）は、口端部直下に突帶をめぐらし、また体部内面の同心円文を消していることなどから、陶邑I期に対応するものと思われ、当古墳群出土須恵器中では、最も古い型式に属するものであろう。

以上概述してきた諸点を整理すれば、以下の通りである。8号墳石室内出土の須恵器は、当地方の群集墳盛期から衰退期にかけての2～3型式にわたるものであり、陶邑編年のII期後半に対応する。これに次ぐ型式の須恵器が2号墳出土の一括出土品であり、次いで4、6

号墳の須恵器が現われる。4、6号墳の一括須恵器は、量や器形の種類も豊富であり、当地方の群集墳終末期の標識型式とことができよう。なお、4、6号墳の須恵器は、いわゆる古墳時代タイプの須恵器の最終末のものであり、陶邑編年のⅢ期前半に対応するものと考える。

当地方の須恵器については、これまでに実施された発掘調査の調査報告書などに、個別に紹介、検討されているが、未だこれらを総括した研究は発表されていない。早急に、総括的な研究の公表が待たれるが、ここではその研究作業を進めていく上での見通しと二、三の留意点を簡単に述べておきたいと思う。これまで当地で発見されている須恵器の中で、最も古い型式に属するものは、松山市福音寺町に所在する竹ノ下遺跡出土の一群であろう。これらの須恵器はすべて單一型式ではないが、その主要なものは大阪陶邑古窯址群中の高藏23号窯跡出土須恵器と、最も多くの共通点をもつ型式である。なお、同遺跡出土の把手付椀は、一般に高藏23型式の須恵器に先行する型式に伴うものであるが、果してこの器形が竹の下遺跡出土の一群と同一型式に属するか否かは確定できない。竹ノ下遺跡出土須恵器と同型式のものは、松山市南江戸の古照遺跡からも発見されている。また、松山市桑原町所在の三島神社古墳横穴式石室内出土須恵器中の器台脚部片は、陶邑編年のⅠ期に対応するものと考えられ、更に詳細な検討が必要である。なお、翫、蓋杯は竹ノ下遺跡の須恵器に統く型式のものと思われるが、これも今後の検討に待ちたい。

松山市天山町所在の天山第1号古墳出土の須恵器は、天井部と体部とが稜と沈線で明確に区分された杯蓋、長脚一段無蓋高杯、器台、器台とセットをなす子持壺、翫などの器形をふくむが、全体的な観察所見からすれば、陶邑・高藏10型式に対応するものと考えられる。長脚一段透し高杯は、陶邑古窯址群の場合Ⅰ期からⅡ期への過渡期に、短期間みられるものが、その他の地方ではその後の型式にまで確実に残る。この天山第1号古墳出土須恵器と、先述の竹ノ下遺跡出土須恵器との間を埋める型式については、未だ良好な資料の発見はないが、確実に1～2型式を設定すべきであろう。

天山第1号古墳の須恵器に後続するものとしては、東山鳩が森8号墳、かいなご2号墳の須恵器を挙げができるが、天山第1号古墳との間には、さらに一型式の設定が必要であろう。東山鳩が森8号墳に統くものは、同2号墳、松山市久万ノ台の久万ノ台1号墳、松山市惠原町松ヶ谷古墳などから出土した一括須恵器である。このあとに東山鳩が森4・6号墳出土の須恵器が統く。東山鳩が森8号墳の須恵器には、すでに陶邑編年のⅢ期の特徴を示す長頸の器形を伴っており、これに実年代をあてるとすれば7世紀の第一4半期の頃と推定できる。したがって東山鳩が森4・6号墳の須恵器は、7世紀の第二4半期あるいは7世紀中葉におくことができよう。東山鳩が森4・6号墳が、当地の群集墳の終末段階に属するものとすれば、この型式の須恵器は、今後の古墳研究上に標識として大いに役立つものであろう。

(田辺昭三)

3. 人骨について

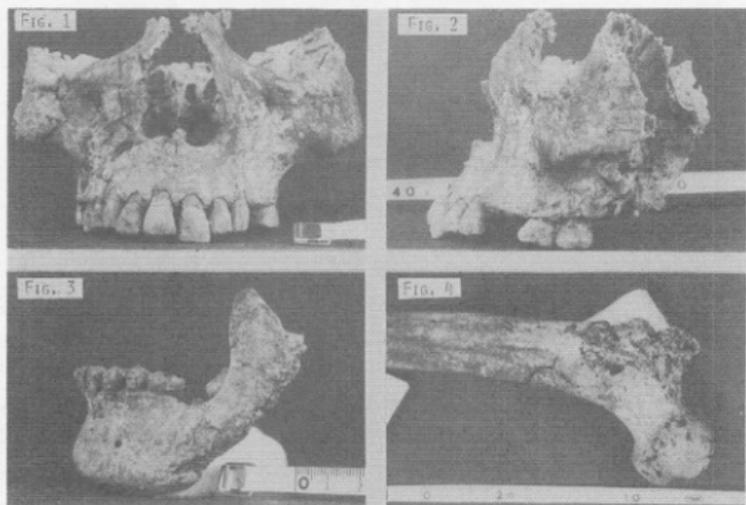
昭和53年10月、愛媛県松山市東石井町において発見された東山鳶が森古墳群の調査に付随して、古墳時代後期と推定される同古墳群の2号墳より、横穴式の石室内に若干の人骨破片が認められた。またそれ以前、昭和11年頃、松山市上野町どんだ原で出土した箱式石棺（シスト）内に、1体分の女性人骨が発見された。当時の調査によれば、同古墳は5世紀に造られたものと推定されている。これら2つの古墳人骨について調査する機会を得たので、その概要について報告する。

1. 東山鳶が森2号墳人骨（A体）(Fig. 1~4参照)

発見時、本人骨の殆んどは破損しており、注意深く収骨された数十個の骨片から、1体分の成人男子と思われる。

イ) 一般所見： 特に原型と保存状態のよいものを示すと、上顎部前面 (Fig. 1) (-・同左側面 (Fig. 2) ・下顎左側面 (Fig. 3) および右大腿骨頭側部 (Fig. 4) などである。

頭蓋は失われているために、頭型を知ることはできないが、上顎および頸骨はよく発達しており、中頭巾は7.2cm、また上部の破損から推定して、上顎高は6.1cmである（表1参照）。また鼻巾は2.9cm、鼻長3.2cmから広鼻型と想像され、上顎示数（ウィルヒョウ）は84.7cmで狭上顎型と推定できる。



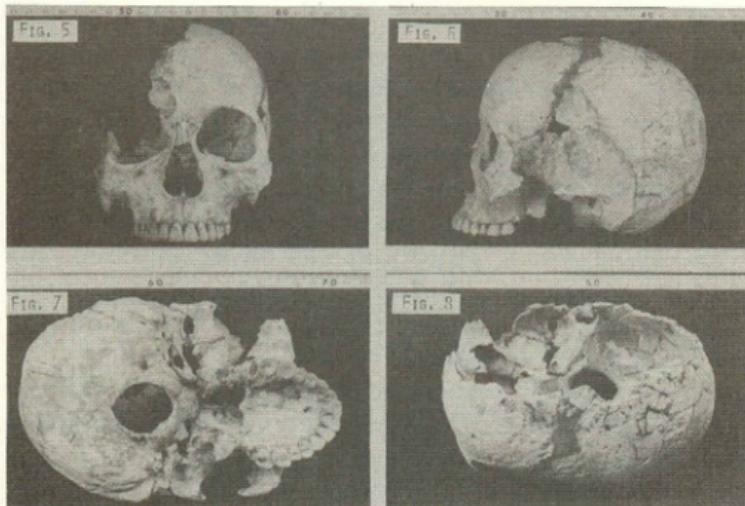
第61図 東山2号墳人骨A体

ロ) 頸骨および歯牙所見： 下顎骨 (Fig. 3) については関節突起は欠損しているが、筋突起の発達は良好である。上下顎とともに、歯槽の吸收・萎縮など異常を認めない。145の歯が生前に抜去または脱落した痕跡があり、その部の歯槽は治癒している。歯列は上下顎ともに正常であって、捻転歯や転移歯はみられない。齶歯は認められない。下顎では87が下顎骨とともに欠失している。「7がC」の齶歯であり、「5」の歯冠部は欠損している。咬合は鉗子型である。咬耗は上下顎歯とともに、エナメル質全面が点状に象牙質まで磨耗し、柄原の分類では3段または4段に該当する。「8」の萌出は認められるが、弱年成人歯と思われる。

ハ) 其の他の所見： 身体的特徴としては大脛骨の発育はよく (Fig. 4)，右大脛骨長は38.8cm、また右胫骨長は32.2cmで、それらから身長は150cm程度と推算できる。

なお、本人骨類骨・上下顎骨の一部およびその周辺の土に付着した赤色顔料について若干の金属の検出を行った。Hgについては、日立501 Zeeman Mercury Analyzer を用いて、対照の棺底の土とともに、 HNO_3-HCl 抽出後測定した。Hgは検出できず、その存在は否定できた。また原子吸光法によるcdの検出も陰性であった。しかし、Feについては、1g試料中に0.17g検出され、ベンガラ (Fe_2O_3) として0.24g (24%) 存在した。

対照上では0.021gで、はるかに少い。従って赤色顔料はベンガラと思われる。



第62図 どんだ原出土人骨

2. 東山薦が森2号墳人骨(B体)

発見時、A体の東側、横穴石室壁に近く、殆んど破損された状態で存在した。20個以上の骨片から1体分の成人男子骨と推定される。

イ) 一般的所見：頭骨の大部分は欠失し、僅かに $86-1\mid1$ -5の歯牙を付随した上顎の一部が認められた。主な残存骨は左右の大腿骨・脛骨と足根骨・中足骨・中手骨・指骨の一部であった。左脛骨が比較的破損が少なく、長さは32.2cmであった。これから身長は約153cmと推定される。

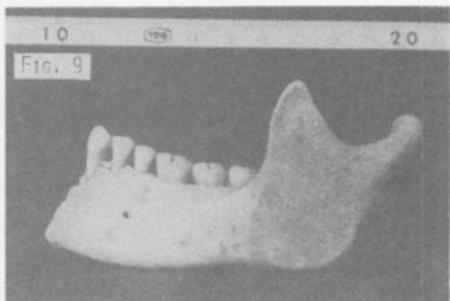
ロ) 上顎と歯牙の所見：7は残根状態で折損した以外は8-1は完全に存在している。1\1の咬耗が最も著しく、柄原の5段と思われる。臼歯では6が著しい。下顎が欠失しているため、咬型は不明である。8は萌出は完全で30才程度と推定できる。

3. どんだ原古墳人骨(Na.5) (Fig. 5~9参照)

発見時から良好な保存状態の1体分の成人女性人骨である。

イ) 頭骨所見：右頭頂部を含む頭蓋が欠失しているが(Fig. 5・8)，外形は充分推定できる。上面観では(Fig. 8)，頭頂部は左右相同と仮定すれば、卵円型で、頭長巾示数は82.7であって、中頸に近い短頭に属する。側面観では(Fig. 6)・ブレグマ高10.1cm・頭耳高10.6cmであった。前頭部の膨隆は比較的弱く(Fig. 5)・左アテリオン部に瘻着を認めない(Fig. 6)。側頭鱗の発育は弱く、頭頂切痕は鈍角をなす。頬骨弓の発育はやや弱い。外耳孔は円型に近く、小さい。後面については、外後頭結節の発育は優れず、インカ骨は存在しない。頭蓋底の一部に欠失があるが(Fig. 7)，大後頭孔は円形に近く、大後頭孔示数は82.3に達する。前面観では(Fig. 5)・上顎示数(コルマン)52.5(ウイルヒョウ)82.1で低型に属し、前頭縫合は見られない。眼窩・口は丸味が強く、左上縁は突出せず、鋭角をなして前頭部へ移行している。滑車窓・滑車輪ははっきりしない。鼻示数は55.3頸骨には分裂異常を認め難い。

ロ) 頸骨および歯牙所見：上顎骨は完全に残っているが(Fig. 5・6・7)下顎骨は右側を欠失し、左側のみ残存していた(Fig. 9)。上下顎ともに発達はやや弱く、歯槽突起はやや華奢である。歯牙は $\frac{7+8}{3-8}$ が残存しているが、8は死後脱落、8+2も下顎骨体とともに欠失している。歯齒は8にC₄、7にC₃程度のものがみられる。咬合面の咬耗は、上顎では主に前歯部および左右大臼歯部に、面状のエナメル質の咬耗を認め、6\6には



第63図 どんだ原出土人骨

表1

古 墳	東山2号墳	どんだ原
頭 骨No.	3	5
性 別	男	女
頬弓巾		(12.2)
最大上顎巾		6.3
中顎巾	7.2	7.8
上顎巾	(6.1)	6.4
鼻巾	2.9	2.6
鼻長	(3.5)	3.2
鼻高		4.7
鼻根巾	3.1	2.0
鼻根横弧長		2.5
ブレグマ高		(10.1)
頭耳高		10.6
頭長		16.2
頭巾		(13.4)
頭長巾示数		82.7
上顎示数(コルマン)		52.5
上顎示数(ウィルヒョウ)	(84.7)	82.1
鼻示数		55.3
乳突間巾		10.3
大後頭孔長		3.4
大後頭孔巾		2.8
大後頭孔示数		82.3

() 半分より推算、示数以外の単位cm

一部点状の象牙質の露出を認める。下顎では残存歯のすべてに面状のエナメル咬耗を認めると、上顎に点状の象牙質の露出を認める。柄原の分類によると、これらの咬耗は0~4段に該当する。歯列は整で、咬合は鉗子型に属するものと思われる。

ハ) 其の他の所見: 身体的特徴として、上下肢帶骨、および上下肢骨の残存部を通覧すると、一般に纖弱で、左肱骨長28.3cmで、それらより推算して身長137cm程度である。歯牙を含む全般的所見から年令は20才代と推定できる。

四宮孝昭(愛媛大学医学部教授)・*山田正典(徳島大学医学部教授)・*藤盛健(同徳島大学医学部)・*宮井正明(同)・*松原博(同)・*山下伸典(同)